東日本大震災
消防活動の記録

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部

東日本大震災「消防活動の記録」刊行にあたって

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合
管理者　気仙沼市長　　菅　原　　茂

万が一の火災や災害を未然に防ぎ、もし発生したら被害を最小限にとどめる。このことが消防の使命であり、職員は日夜その活動のために鍛錬し、町の安全・安心を底辺で支えてきました。

平成 23 年 3 月 11 日、当地方を襲った東日本大震災は地震・大津波・火災すべてが一度に発生、しかもその規模はどれをとっても過去の記録を遥かに上回るものでした。気仙沼市、南三陸町にとっても当消防本部にとってもまさに史上最大の試練でありました。

平成 24 年 6 月 23 日現在、気仙沼市においては死者 1,037 人、行方不明者 276 人、南三陸町においては死者 564 人、行方不明者 247 人とあまりにも多くの尊い人命が一瞬の内に失われました。ここに改めて犠牲者に対し心より哀悼の誠を捧げます。

この未曾有の災害に際し、当消防本部の職員は一人でも多くの人命を助けるため、身を賭してその任務を全うしました。迫り来る大波にたじろぎもせず、回りを取り囲む炎にもひるむことなく、使命感の塊となって活動をおこないました。その中で 10 名の仲間が殉職したことは痛恨の極みであり、私たちは今、この殉職者たちの遺志を胸に、町の安全・安心にむけ覚悟を新たにしているところであります。

大震災にあたっては東京消防庁を中心とした緊急消防援助隊、自衛隊、宮城県警、海上保安本部、米軍など、多くの団体・機関の皆様にお世話になりました。その勇敢かつ頼もしい活動振りに敬意を表するとともにご労苦に対し、圏域の住民を代表し深甚なる感謝の意を表します。また、地域の最前線に立って活動し同じく多くの犠牲者を出した、消防の仲間である地域の消防団の皆様にも改めて心よりの追悼の意と感謝の気持ちを表します。

私たちは今回の大震災で多くのことを経験し、そして学びました。ここに「東日本大震災　消防活動の記録」を記し、災害の内容と私たちの活動を検証し、後世に伝えるとともにこれからの災害予防、災害対応への重要な資料として残すことといたしました。多くの皆様方にご覧いただき、今回の大震災を振り返るとともに、今後に役立てていただければ幸甚です。

現在、多くの団体や研究機関によって大震災の徹底した検証が行われつつあります。私達はその結果と当地域での経験を元に、「津波死ゼロのまちづくり」を標榜し、住民に一層頼りにされる消防体制を築くべく不断の努力を重ねてまいります。皆様方の一層のご理解とご協力をお願い申し上げ、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

平成 24 年 7 月

発刊に寄せて

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合
副管理者　南三陸町長　　佐　藤　　仁

東日本大震災は、戦後における最大の国難と言われる未曾有の大災害となりました。我が国で観測史上最大規模となった東北地方太平洋沖地震による大津波は、人々が集った町並みをことごとく破壊し、我々の生活を一変させました。昭和35年に襲来したチリ地震津波からの50年、防災施設の整備を重ね、更には、予測されていた宮城県沖地震にも耐えうるべく、可能な限り災害に備えた体制の確立を図ってきたこの地で、多くの尊い人命、財産が一瞬にして奪われたことは、正に痛恨の極みであるところです。

発災当初、電気、電話といった全てのライフラインも途絶し、食料はもちろん、水の確保さえままならず、更には、生活基盤に当然欠かせない道路までもが寸断され、被災地は正に陸の孤島と化しました。こうした正に過酷な状況下で、全国から集結した消防をはじめとした関係機関によるいち早い人命の救助、行方不明者の捜索といった昼夜を問わない献身的な活動の展開は、絶望の淵にあった住民の心の支えとなったところであります。こうして1年を経過した今、朝夕を問わず耳にする消防機関の活動の声に、懐かしくも新しい平穏な日々を1日でも早く取り戻せるよう心を強くしているところであり、被災された住民の方々には、少しずつではありますが、生活の再建、町の復興に思いを致すことができるようになってきたものと思っております。

東日本大震災以後、首都直下地震、東南海・南海地震、そして原子力発電所の事故によりもたらされる大災害に備え、地震・津波防災対策等、国を挙げた検討が日々重ねられているところであります。安全・安心な、そして未来にわたり豊かさを実感できるまちづくりにおいて、命を守り、被害を最小限に止めるためには、我々そして祖先が幾度となく経験した津波災害を、子や孫、後世に伝えていくことが最も現実的かつ効果的なことは言うまでもありません。この記録集にも記される多くの体験、活動が、この地域に限らず、広くそして永く教訓として活かされることを願うものです。

平成24年7月

東日本大震災「消防活動の記録」の発刊に寄せて

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合議会
議　長　　臼　井　真　人

現代の科学をもってしても、予知・予報の出来ないものに地震の発生があります。

長年の研究データを元に近い将来に発生が予想されている「宮城県沖地震」が、ついに来たかと思える、強い衝撃と数分間の長い揺れに、気仙沼市議会定例会の最中であった市役所 3 階の会議室は、一同不安の中で、揺れが収まるのを待っていました。この時、この後に起きる大惨事を誰が予想出来たでしょうか。

しかし、消防署職員はいち早く情報の収集とともに、災害の発生に備え市民・町民の生命と財産を守るべく、素早い対応をされました。

大津波警報の発令に併せ、住民への周知と避難誘導、水門の閉鎖など、日頃の訓練を遺憾なく発揮され迅速に対応をされました。

それにも拘わらず、今回の大地震は巨大津波を引き起こし、圏域の市町の美しい街並みや海岸を破壊し、消防署員や消防団員を含め、千名を超える住民の尊い命を奪い去りました。

ここに、改めてお亡くなりになられました方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災されました方々に心からお見舞いを申し上げます。

この度「東日本大震災活動記録」として消防本部が纏められましたことは、今回の大災害を後世に教訓として残すことはもとより、「千年に一度」と言わず、数十年間隔で発生している宮城県沖地震も踏まえ、また、他の地域で予想されている大地震・大津波等への対策にも活用できる貴重な記録集であります。

あの日、真っ黒な濁流が私たちの家屋や車を、更に美しい街並みまでも飲み込みました。そのため電気・ガス・水道など全てのライフラインが使用不能となり、雪が舞い冷たい風が吹く中、漆黒の闇の中で湾内だけは真っ赤な炎を巻き上げていました。そして時折、爆発音が響く中、寒さと恐怖で震えながら一夜を過ごしたのです。

「災害は忘れた頃にやって来る」と言われますが、私たちは今回の大震災を生涯忘れること無く、子々孫々へと伝えて行く使命があります。それが不幸にして犠牲となられた方々への供養ともなります。

最後に、この記録集が消防体制の強化・充実に活用されますことを切に願います。

平成 24 年 7 月

はじめに

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部
消　防　長　　千　葉　　章　一

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とする日本観測史上最大の地震が発生し、東日本の太平洋沿岸は「千年に一度」ともいわれた巨大な津波に襲われました。当消防本部管内の気仙沼市と南三陸町では、壊滅的な被害を受け、多くの尊い生命が奪われ、未だに行方不明の方々も数多くおり、我々の大切な仲間 10 名もその犠牲となりました。

ここに、不幸にして東日本大震災の犠牲となられました方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

消防職・団員は、火災、救助、救急等、同時多発した災害現場に対し、一致団結し立ち向かいました。しかし、消防力をはるかに凌駕したその未曾有の災害により、限界を超えた活動を延々と強いられることとなりました。

このような状況の下、我々を支えたのは、地域住民相互による共助活動と、全国から駆け付けた緊急消防援助隊をはじめとする自衛隊、警察、海上保安庁、行政機関等の不眠不休の活動であり、それにより災害の急性期を乗り越えることができたものと確信しております。

この度、当消防本部としての「東日本大震災活動記録」を刊行することとなりました。現場で体験したことで得た教訓は、非常に貴重なものであり、風化させることなく、後世に伝えることを目的として作成したものです。今後の消防行政、また、全国各地で予想されている地震・津波における震災対策の一助になれば幸いです。

結びに、災害活動にご支援、ご協力をいただいた皆さまと、本誌作成に当たりご協力いただいた皆さまに厚く感謝申し上げます。

平成 24 年 7 月

目　次

第１部　　東日本大震災の概要

第１章　位置及び管内情勢

１　位置 ―― 1
２　面積と人口 ―― 1
３　地形・地域の特性 ―― 2

第２章　地震・津波の歴史

１　明治三陸地震津波 ―― 3
２　昭和三陸地震津波 ―― 3
３　チリ地震津波 ―― 4
４　宮城県沖地震 ―― 5
５　過去６回の宮城県沖地震 ―― 5

第３章　地震・津波の概要

１　地震発生状況 ―― 6
２　津波情報 ―― 6
３　津波観測 ―― 6
４　津波浸水域・浸水面積 ―― 7
５　津波高 ―― 7
６　被害状況 ―― 7
７　火災発生状況 ―― 8
８　防火対象物被害状況 ―― 13
９　危険物施設被害状況 ―― 14
10　石油基地における屋外タンク被害状況 ―― 15
11　消防施設等被害状況 ―― 17

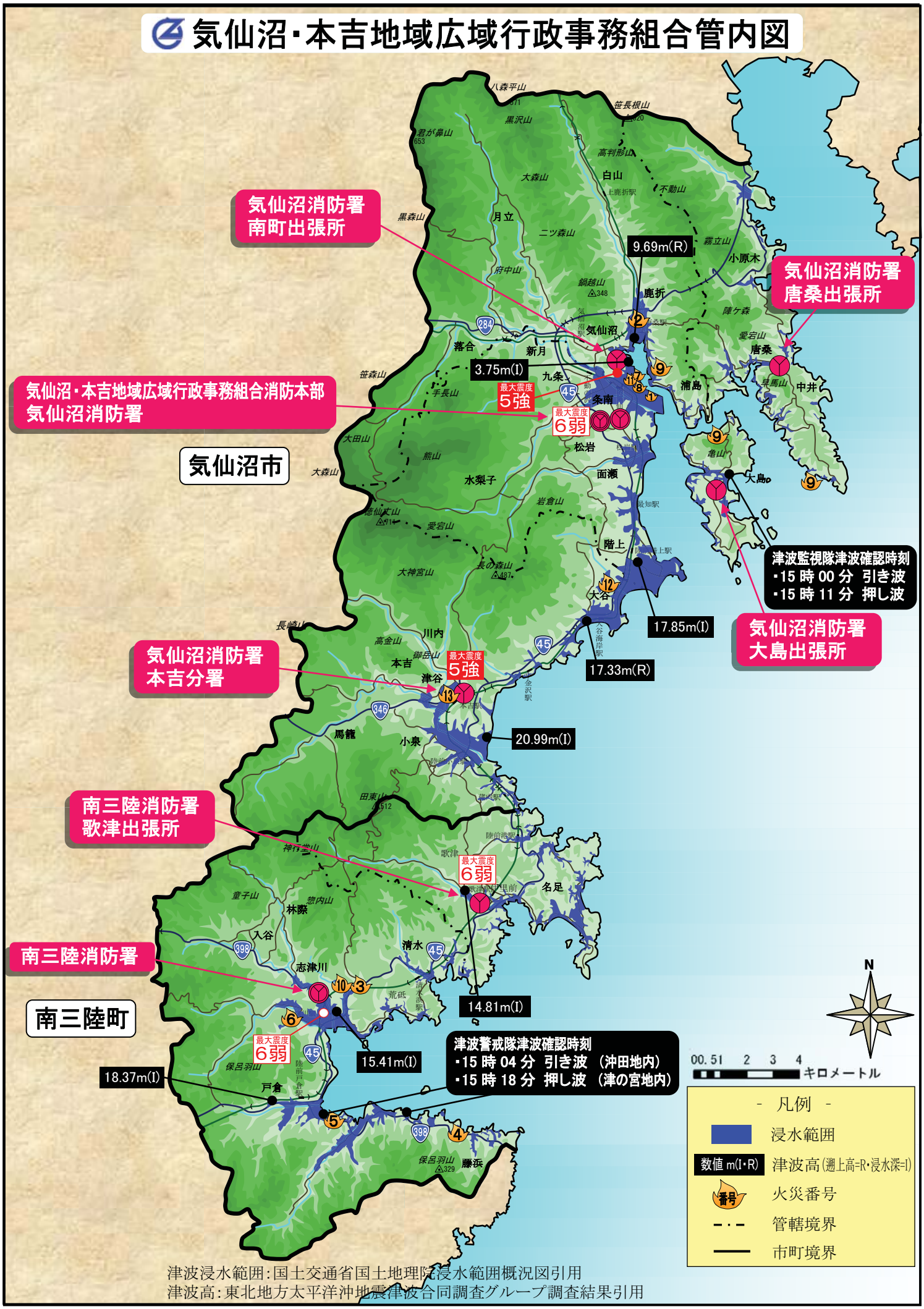
第４章　消防機関の対応

１　消防体制 ―― 20
２　地震津波安全対策 ―― 23
３　東日本大震災時系列 ―― 25
４　初動時の対応 ―― 32
５　災害対策本部等の設置状況 ―― 32
６　情報収集体制 ―― 34
７　職員参集状況 ―― 34
８　１１９番入電状況 ―― 35
９　活動状況 ―― 36

10　消防団の活動状況 ―― 40
第５章　各署所の活動
1　気仙沼消防署 ―― 41
2　気仙沼消防署南町出張所 ―― 43
3　気仙沼消防署本吉分署 ―― 70
4　気仙沼消防署唐桑出張所 ―― 77
5　気仙沼消防署大島出張所 ―― 83
6　南三陸消防署 ―― 91
7　南三陸消防署歌津出張所 ―― 98
第６章　消防応援活動の状況
1　緊急消防援助隊 ―― 106
2　宮城県広域消防相互応援協定 ―― 113
3　岩手・宮城県際市町災害時相互応援協定に基づく受援の概要 ―― 114

第２部　　災害現場から（職員手記）

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合管内図



津波浸水範囲：国土交通省国土地理院浸水範囲概況図引用
津波高：東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループ調査結果引用

平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震

- 発生日時　平成 23 年 3 月 11 日（金）　14 時 46 分頃
- 震央地名　三陸沖（北緯 38 度 06.2 分、東経 142 度 51.6 分）
- 震源の深さ　24 km
- 規　　模　Mw9.0（モーメントマグニチュード）
- 警　　報　大津波警報　3 月 11 日 14 時 49 分（気象庁）

被害状況（平成 24 年 3 月 14 日現在、宮城県公表）

市　町	人的被害（人）		住家被害（棟）			非住家被害（棟）
	死　者	行方不明者	全　壊	半　壊	一部損壊	
気仙沼市	1,032	324	8,483	2,552	4,555	10,225
南三陸町	565	280	3,142	169	1,214	234
合　計	1,597	604	11,625	2,721	5,769	10,459

火災発生状況（東日本大震災に伴い発生したもの）

市　町	建物火災	林野火災	車両火災	その他火災	合　計
気仙沼市	3			5	8
南三陸町		1	1	3	5
合　計	3	1	1	8	13

※国から「東北地方太平洋沖地震に係る火災報告取扱要領等の疑義事項」について回答があり、火のついた漂流物から複数の場所へ延焼拡大した場合は１件の火災として取り扱うことや、津波により、倒壊して機能を有しない建物や自走不能車両の場合には、その他火災として取り扱うとされた。このため、気仙沼市の９地区の火災は、燃えている漂流物からの延焼として１件の「その他火災」としている。

救急出動状況（平成 23 年 3 月 11 日～平成 23 年 3 月 31 日）

部　隊	出動件数（件）	搬送人員（人）
広域消防	419	407
緊援隊	161	174
相互応援協定	67	72
合　計	647	653

救助人員（平成 23 年 3 月 11 日～平成 23 年 3 月 31 日）

部　隊	救助人員（人）
広域消防	298
緊援隊（陸上）	378
緊援隊（航空）	266
相互応援協定	10

※詳細は本編をご覧ください。

第1部　東日本大震災の概要

第1章　位置及び管内情勢

1　位置

気仙沼・本吉地域は、気仙沼市と南三陸町の１市１町で構成され、宮城県の北・東端に位置している。東は太平洋に面し、西は北上山脈系の支脈の稜線となっている。

隣接地域として、気仙沼市は、西は岩手県一関市と登米市、北は岩手県陸前高田市、南三陸町は、西が登米市、南は石巻市と隣接している。

2　面積と人口

(1)震災前　　（平成 23 年 2 月末現在）

市町名	面　積（㎢）	世帯数（世帯）	人　口（人）
気仙沼市	333.37	26,601	74,247
南三陸町	163.74	5,362	17,666
合　計	497.11	31,963	91,913

宮城県震災復興・企画部統計課「住民基本台帳人口及び世帯数」

(2)震災後　　（平成 23 年 7 月末現在）

市町名	面　積（㎢）	世帯数（世帯）	人　口（人）
気仙沼市	333.37	25,649	70,757
南三陸町	163.74	4,905	15,703
合　計	497.11	30,554	86,460

宮城県震災復興・企画部統計課「住民基本台帳人口及び世帯数」

3　地形・地域の特性

当地域は、北上山系支脈の山地と海岸部に伸びる斜面、丘陵地が大半を占めており、台地上のところがほとんどなく、平地部が少ない。

太平洋側の海岸線はリアス式海岸となっており、沿岸部の狭隘な平地には港としての集落が点在しており、湾入り口には大島を配しているため、内湾は波の静かな天然の良港となり、古くから漁業が盛んに行われ、水産業が当地域の基幹産業といえる。

特に気仙沼市は、かつて「東洋一」といわれた魚市場があり、遠洋漁業の基地となっており、現在はカツオ等を中心に全国でも有数の水揚げ高を誇る港であり、南三陸町は、銀ザケ養殖が全国に先駆けて行われ、沿岸漁業と養殖漁業が盛んな町である。

また、複雑に入り組んだ海岸線が豊かな景観は、陸中海岸国立公園、南三陸国定公園の指定を受け、多くの観光客が訪れていた。

被災前

被災後

気仙沼市市街地付近航空写真　（提供：社団法人東北建設協会）

被災前

被災後

南三陸町市街地付近航空写真　（提供：社団法人東北建設協会）

第2章　地震・津波の歴史

三陸地方は、地形的特徴から古来より地震と巨大津波に襲われ甚大な被害に見舞われている。歴史上記録の残っているものでは、「日本三代実録」に記されている貞観11年5月26日（西暦869年）に発生したと言われる貞観地震がある。

また、度々遠地津波に襲われているのも特徴であり、平成22年2月27日にもチリで発生した地震による津波が襲来した。

明治以降の主な地震津波災害は次のとおりである。

1　明治三陸地震津波

発生日時	1896年（明治29年）6月15日19時32分
震　　源	三陸はるか沖
規　　模	マグニチュード8.5
死　　者	松岩村1人　階上村437人　鹿折村6人　大島村61人 唐桑村836人　御嶽村2人　小泉村219人　大谷村319人 志津川町371人　戸倉村64人　歌津村799人

中規模の地震動のため地震による被害は無かったが、三陸沿岸に破壊的な津波をもたらした。津波来襲直前に鳴動を聞いた地区もあった。志津川町では第 2 波が最大であり、満潮時であったため大津波をもたらした。

気仙沼市本吉町大谷地区の状況

2　昭和三陸地震津波

発生日時	1933年（昭和8年）3月3日2時31分
震　　源	三陸はるか沖
規　　模	マグニチュード8.1
死　　者	階上村1人　鹿折村4人　唐桑村59人　小泉村15人 戸倉村1人　歌津村84人

地震による被害は少なかったが、約 30 分後に三陸沿岸を津波が襲った。気仙沼地区では、津波の様相及び被害地区は明治三陸地震津波とほぼ同様であった。

気仙沼市唐桑町小鯖地区の状況

3 チリ地震津波

発生日時	1960 年（昭和 35 年）5 月 23 日 4 時 11 分　※日本時間
震　　源	チリ沖
規　　模	マグニチュード 8.5
死　　者	気仙沼市 2 人
	志津川町 37 人

津波は一昼夜かけて太平洋をわたり日本の太平洋沿岸に到達した。気仙沼市では、湾奥ほど波高が高くなり浸水被害を受けたが、異常な引き潮による注意喚起や昭和三陸津波の記憶から、速やかな避難が行われたことにより人的被害は少なかった。しかし、志津川町では死亡者 37 名と大きな被害となった。

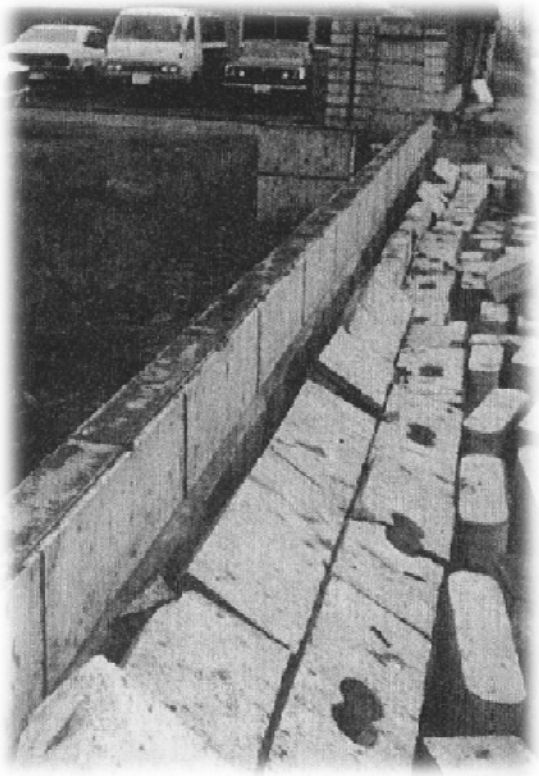
気仙沼市内の状況

※1～3 の死者数の引用先にあっては、「哀史　三陸大津波　山下文男著」より。

4 宮城県沖地震

発生日時　1978 年（昭和 53 年）6 月 12 日 17 時 14 分
震　　源　宮城県沖
規　　模　マグニチュード 7.4

本地域としての津波被害等は少なかったが、仙台市を中心に甚大な被害が発生した。都市型地震被害として、ライフライン被害が住民生活に大きな影響を与えた。津波警報も発表されたが、気仙沼市においては内湾で 0.6mと被害はなかった。



ブロック塀の倒壊状況

5 過去 6 回の宮城県沖地震

宮城県沖地震は、短い間隔で周期的に発生している。宮城県沖地震の長期評価では「2020 年（平成 32 年）までに、次の宮城県沖地震が発生している可能性が非常に高いと考えられる。」と評価されていた。

過去６回の宮城県沖地震の概要

地震発生年月日	前回の地震からの経過年数	地震の規模	備　考
1793 年 2 月 17 日	―	M8.2 程度	連　動
1835 年 7 月 20 日	42.4 年	M7.3 程度	単　独
1861 年 10 月 21 日	26.3 年	M7.4 程度	単　独
1897 年 2 月 20 日	35.3 年	M7.4	単　独
1936 年 11 月 3 日	39.7 年	M7.4	単　独
1978 年 6 月 12 日	41.6 年	M7.4	単　独
	過去 6 回の平均　37.1 年		

第3章　地震・津波の概要

1　地震発生状況

地　震　名　　平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震
発 生 日 時　　平成 23 年 3 月 11 日(金) 14 時 46 分頃
震 央 地 名　　三陸沖　北緯 38 度 06.2 分　東経 142 度 51.6 分
震源の深さ　　24 km
規　　模　　Mw9.0
※3 月 11 日 14 時 46 分 M7.9 と発表
16 時 00 分 M8.4 に訂正
17 時 30 分 Mw8.8 に訂正
3 月 13 日 12 時 55 分 Mw9.0 に訂正
震　　度　　6 弱　気仙沼市赤岩　南三陸町志津川　南三陸町歌津
5 強　気仙沼市笹が陣　気仙沼市本吉町　※最大震度 7:栗原市築館
警　　報　　大津波警報(気象庁)
3 月 11 日 14 時 49 分

2　津波情報

3 月 11 日 14 時 50 分(仙台管区気象台)
津波到達予想時刻　15 時 00 分　予想される津波の高さ　6m
3 月 11 日 15 時 14 分(仙台管区気象台)
津波到達予想時刻　津波到達を確認　予想される津波の高さ　10m以上

3　津波観測

(1)GPS波浪計　(気象庁 15 時 25 分発表)

14 時 54 分　第 1 波　気仙沼広田湾沖　6.0m観測
15 時 14 分　最大波　気仙沼広田湾沖　6.0m観測

(2)気仙沼市　(大島出張所津波監視隊)

15 時 00 分　気仙沼市大島　　引き波確認
15 時 11 分　気仙沼市大島　　押し波確認

(3)南三陸町　(南三陸消防署津波警戒隊)

15 時 08 分　南三陸町戸倉　　引き波確認
15 時 18 分　南三陸町戸倉　　押し波確認

4 津波浸水域・浸水面積

市　町	市町面積 (㎢)	浸水面積（㎢） 【予想浸水面積】	浸水比率 (%)	人　口 （人）	浸水範囲内人口 （人）
気仙沼市	333.37	18【10.2】	5.4	74,247	40,331
南三陸町	163.74	10【 3.6】	6.1	17,666	14,389
合　計	497.11	28【13.8】	5.6	91,913	54,720

浸水面積：国土地理院「津波による浸水範囲の面積（概略値）について（第5報）」(平成23年4月18日)
予想浸水面積：宮城県第三次被害想定調査による「宮城県沖地震連動型」を想定
人口：宮城県震災復興・企画部統計課「住民基本台帳人口及び世帯数」(平成23年2月末現在))
浸水範囲内人口：総務省統計局「浸水範囲概況にかかる人口・世帯数」(平成23年4月25日)

5 津波高

市　町	地　名	測定高(m)	津波高種類	測定対象
気仙沼市	浜町一丁目	9.69	遡上高	海岸堤防裏の工場
気仙沼市	港町	3.75	浸水深	海岸沿いの公衆トイレ
気仙沼市	波路上後原	17.85	浸水深	ＪＲ岩井崎踏切付近
気仙沼市	本吉町九多丸	17.33	遡上高	はまなす海洋館
気仙沼市	本吉町中島	20.99	浸水深	小泉ﾃﾞｨｻｰﾋﾞｽｾﾝﾀｰ海側法面
南三陸町	歌津字田表	14.81	浸水深	県道脇の耕作地
南三陸町	志津川字上の山	15.41	浸水深	上の山公園
南三陸町	戸倉字滝の沢	18.37	浸水深	工場のポンプ室側壁

東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループ調査結果による

6 被害状況（平成24年3月14日現在、宮城県公表）

（1）人的被害状況

（単位：人）

市　町	死　者	行方不明者
気仙沼市	1,032	324
南三陸町	565	280
宮城県全体	9,544	1,688

（2）住家被害状況

（単位：棟）

市　町	全　壊	半　壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水	非住家被害
気仙沼市	8,483	2,552	4,555	調査中	調査中	10,225
南三陸町	3,142	169	1,214	調査中	調査中	234
宮城県全体	84,749	147,165	221,895	15,403	12,842	34,184

7 火災発生状況

地震発生から 3 月 31 日までに 17 件の火災が発生し、うち 13 件が東日本大震災によるものとなっており、全て津波襲来後に発生している。

なお、13 件のうち 10 件が 11 日に発生しており、鹿折地区の火災(火災 2)は、3 月 11 日から 3 月 23 日まで 13 日間の最長活動を要し、また、海上にて発生した火災(火災 9)は、複数地区に延焼し、署所個別での同時対応を余儀なくされ、焼損面積が最も広範囲となった。

火災 1			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　15:30 頃	**覚知時刻:**3/11　15:30(消防本部から発見)	
種別:建物火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/21　15:30	**震災前棟数:**1 棟
焼損棟数:1 棟	**建物焼損面積:**2,695 ㎡(焼失面積:2,367 ㎡)		
焼損場所:気仙沼市朝日町地内			
火災概要:地上 2 階建ての工場から出火し、1 棟を焼損した。			
活動概要:出火当初は津波により対応できず、後日、堆積物が燻っていたため、18 日からポンプ車延べ 6 台が出動し消火活動を行った。			
火災 2			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　15:40 頃	**覚知時刻:**3/11　15:58(高台監視中の救急隊)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/23　7:48	**震災前棟数:**295 棟
焼失面積:101,973 ㎡			
焼損場所:気仙沼市中みなと町・西みなと町・東みなと町地内(鹿折地区)			
火災概要:津波により流出等をした車両・瓦礫等を焼損した。			
活動概要:11 日からポンプ車延べ 180 台及びヘリにより、陸上及び空中から消火活動を行った。			
火災 3			
市町別:南三陸	**出火時刻:**3/11　時間不明	**覚知時刻:**3/11　15:50(駆け付け)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/14　15:15	**震災前棟数:**67 棟
焼失面積:44,000 ㎡			
焼損場所:南三陸町志津川字天王山地内			
火災概要:津波により流出等をした車両・瓦礫等を焼損した。			
活動概要:ポンプ車が出動したが火災現場に寄り付けず、警戒筒先を配備、13 日から消火活動を行った。			
火災 4			
市町別:南三陸	**出火時刻:**3/11　時間不明	**覚知時刻:**3/24　9:30(事後聞知)	
種別:車両火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**不明	
焼損台数:1 台			
焼損場所:南三陸町戸倉字藤浜地内			
火災概要:津波により流されてきた 10t保冷車から出火し、車両 1 台を焼損した。			

火災 5			
市町別:南三陸	**出火時刻:**3/11　時間不明	**覚知時刻:**3/24　11:00(事後聞知)	
種別:その他火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**3/13　時間不明	**震災前棟数**:3 棟
焼失面積:61 ㎡、**その他:**被災車両 5 台			
焼損場所:南三陸町戸倉字小涼地内			
火災概要:津波により流出等をした車両・瓦礫等を焼損した。			

火災 6			
市町別:南三陸	**出火時刻:**3/11　時間不明	**覚知時刻:**3/11　15:50(駆け付け)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/13　16:30	**震災前棟数**:3 棟
焼失面積:680 ㎡、**林野焼損面積:**1a			
焼損場所:南三陸町志津川字下保呂毛地内			
火災概要:津波により流出した瓦礫等に着火し、林野に延焼した。			
活動概要:消防団が 11 日からポンプ車延べ 6 台で消火活動を行った。			

火災 7			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　16:00 頃	**覚知時刻:**3/11　16:26(高台監視中の消防隊)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/14　16:17	**震災前棟数**:11 棟
焼失面積:4,489 ㎡			
焼損場所:気仙沼市仲町二丁目・弁天町一丁目地内			
火災概要:津波により流出等をした車両、瓦礫等を焼損した。			
活動概要:出火当初は津波により対応できず、13 日からポンプ車延べ 6 台が出動し消火活動を行った。			

火災 8			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　16:00 頃	**覚知時刻:**3/14　10:25(事後聞知)	
種別:建物火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**不明	**震災前棟数**:2 棟
焼損棟数:1 棟	**建物焼損面積:**485 ㎡、**焼失面積(建物部分を除く):**815 ㎡ (焼失面積:1,149 ㎡)		
焼損場所:気仙沼市内の脇二丁目地内			
火災概要:地上 2 階建ての公衆浴場外周部から出火し、1 棟及び津波により流出等をした車両・瓦礫等を焼損した。			

火災 9			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　17:30 頃	**覚知時刻:**3/11　17:34(119 携帯)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/20　14:28	**震災前棟数**:223 棟
焼損棟数:62 棟 **焼損船舶数:**不明	**焼失面積:**103,199 ㎡、**林野焼損面積:**22,212a		
焼損場所:気仙沼・鹿折・大島・中井地区			
火災概要:海上(気仙沼湾)にて出火、津波により流出した建物等の漂流物に着火・拡大し、複数地区に延焼、建物、林野、船舶及び津波により流出等をした車両・瓦礫等を焼損した。			
活動概要:出火当初は津波により対応できず、12 日からポンプ車延べ 23 台及びヘリにより、陸上及び空中から消火活動を行った。			

火災 9-1			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　17:30 頃	**覚知時刻:**3/11　17:34(119 携帯)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/18　15:40	**震災前棟数**:188 棟
焼損棟数:58 棟 **焼損船舶数:**不明	**焼失面積:**91,154 ㎡、**林野焼損面積:**10,512a		
焼損場所:気仙沼市浪板・大浦・小々汐・二ノ浜・三ノ浜地内(鹿折地区)			
火災概要:海上にて出火し、津波により流出した建物等の漂流物に着火・拡大し、建物、林野、船舶及び津波により流出等をした車両・瓦礫等を焼損した。			
活動概要:出火当初は津波により対応できず、14 日からポンプ車延べ 3 台が出動し消火活動を行った。			

火災 9-2			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　18:00 頃	**覚知時刻:**3/11　18:04(119 携帯)	
種別:その他火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**不明	**震災前棟数**:10 棟
焼失面積:2,777 ㎡			
焼損場所:気仙沼市弁天町一丁目・魚市場前地内			
火災概要:海上にて出火し、津波により流出等をした瓦礫等を焼損した。			
その他:出火当初は津波により対応できなかった。			

火災 9-3			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　18:00 頃	**覚知時刻:**3/11　18:25(119 携帯)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/20　14:28	**震災前棟数**:21 棟
焼失面積:5,159 ㎡			
焼損場所:気仙沼市仲町二丁目・弁天町二丁目地内			
火災概要:海上にて出火し、津波により流出等をした瓦礫等を焼損した。			
活動概要:出火当初は津波により対応できず、14 日からポンプ車延べ 3 台が出動し消火活動を行った。			

火災 9-4			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　18:00 頃	**覚知時刻:**3/28　11:00(事後聞知)	
種別:建物火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**不明	**震災前棟数**:1 棟
焼損棟数:1 棟	**建物焼損面積:**1,703 ㎡(焼失面積:1,798 ㎡)		
焼損場所:気仙沼市弁天町二丁目地内			
火災概要:海上にて出火し、平屋建ての店舗 1 棟を焼損した。			

火災 9-5			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　18:00 頃	**覚知時刻:**3/28　11:00(事後聞知)	
種別:建物火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**不明	**震災前棟数**:1 棟
焼損棟数:1 棟	**建物焼損面積:**1,230 ㎡(焼失面積:1,137 ㎡)		
焼損場所:気仙沼市潮見町地内			
火災概要:海上にて出火し、地上 2 階建ての倉庫 1 棟を焼損した。			

火災 9-6			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　18:00 頃	**覚知時刻:**3/28　11:00(事後聞知)	
種別:建物火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**不明	**震災前棟数**:1 棟
焼損棟数:1 棟	**建物焼損面積:**1,398 ㎡(焼失面積:1,071 ㎡)		
焼損場所:気仙沼市潮見町地内			
火災概要:海上にて出火し、地上 2 階建ての工場 1 棟を焼損した。			

火災 9-7		
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/11　時間不明	**覚知時刻:**3/16　10:40(被害調査中の消防隊)
種別:船舶火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**不明
焼損船舶数:1 隻		
焼損場所:気仙沼市大島瀬戸番所根灯台付近		
火災概要:海上にて出火し、漂流後に座礁していた燃料補給船 1 隻を焼損した。		
その他:関係機関と協議し、他への延焼の恐れがないことから消火活動は行わなかった。		

火災 9-8			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/12　時間不明	**覚知時刻:**3/12　22:58(駆け付け)	
種別:林野火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/17　11:03	**震災前棟数**:1 棟
焼損棟数:1 棟	**林野焼損面積:**11,700a、**建物焼損面積:**103 ㎡(焼失面積:103 ㎡)		
焼損場所:気仙沼市外浜・亀山・磯草・大初平・浦の浜地内(大島地区)			
火災概要:海上にて出火し、林野及び建物 1 棟を焼損した。			
活動概要:12 日からポンプ車延べ 14 台及びヘリにより、陸上及び空中から消火活動を行った。			

火災 9-9		
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/14　14:00 頃	**覚知時刻:**3/14　14:15(駆け付け)
種別:林野火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/14　16:55
林野焼損面積:0a(0.25a)		
焼損場所:気仙沼市唐桑町津本地内(中井地区)		
火災概要:海上にて出火し、林野を焼損した。		
活動概要:ポンプ車 3 台が出動し消火活動を行った。		

火災 10		
市町別:南三陸	**出火時刻:**3/11　時間不明	**覚知時刻:**3/15　10:25(駆け付け)
種別:林野火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/15　12:20
林野焼損面積:123a		
焼損場所:南三陸町志津川字大沢地内		
火災概要:津波により流出等をした瓦礫等付近から出火し、林野を焼損した。		
活動概要:ポンプ車 3 台が出動し消火活動を行った。		

火災 11			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/14　22:00 頃	**覚知時刻:**3/14　22:34(別火災出動中の消防隊)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/25　15:00	**震災前棟数**:74 棟
焼損棟数:62 棟	**焼失面積:**36,444 ㎡		
焼損場所:気仙沼市内の脇一丁目地内			
火災概要:建物及び津波により流出等をした車両・瓦礫等を焼損した。			
活動概要:14 日からポンプ車数十台が出動し消火活動を行った。			
火災 12			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/28　17:14 頃	**覚知時刻:**3/28　17:19(119 携帯)	
種別:建物火災	**消火活動:**無	**鎮火時刻:**3/28　17:36	**震災前棟数**:1 棟
焼損棟数:1 棟	**建物焼損面積:**(表)2 ㎡		
焼損場所:気仙沼市本吉町洞沢地内			
火災概要:地上 2 階建ての住宅から出火し、1 棟を焼損した。なお、通電再開後に火災が発生した。			
その他:ポンプ車 9 台が出動、現場到着時、発見者により消火されていた。			
火災 13			
市町別:気仙沼	**出火時刻:**3/30　8:30 頃	**覚知時刻:**3/30　8:51 (119 携帯)	
種別:その他火災	**消火活動:**有	**鎮火時刻:**3/30　9:02	
その他の焼損:被災車両 1 台			
焼損場所:気仙沼市本吉町津谷明戸地内			
火災概要:津波により被災し、放置されていた車両から出火した。			
活動概要:ポンプ車 8 台が出動し消火活動を行った。			

※「火災 9-1」～「火災 9-9」は、「火災 9」が複数地区へ延焼した火災であることから内訳として再掲している。

なお、地区毎の状況については、1 件の火災と同様の方法で記載している。

※焼失面積は、建物及びその他(瓦礫等)火災の合計焼損水平投影面積である。

8 防火対象物被害状況

管内の防火対象物2,222棟のうち、51%にあたる1,140棟が被災しており、そのほとんどが津波による被害となっている。特に、気仙沼市においては、沿岸部に建てられていた福祉施設や工場等の被害が多く、管内での最初の火災も、津波襲来後間もなく、被災した工場から発生した。なお、防火対象物からは火災が 2 件発生している。また、南三陸町においては、マーケット等や病院等が全て被災したことにより、地域住民の生活はもとより、救急活動にも大きな影響を与えた。

防火対象物被害状況　　（平成 23 年 3 月 31 日現在）

用途別＼市町別			気仙沼市			南三陸町			合　計		
			対象物数	被災数	被災率	対象物数	被災数	被災率	対象物数	被災数	被災率
1項	イ	劇場・映画館・演芸場等	1		0%				1		0%
	ロ	公会堂・集会場	89	30	33.7%	42	19	45.2%	131	49	37.4%
2項	ロ	遊技場・ダンスホール	14	7	50.0%	3	3	100.0%	17	10	58.8%
	ニ	カラオケボックス等	3	2	66.7%				3	2	66.7%
3項	イ	待合・料理店等	3	3	100.0%				3	3	100.0%
	ロ	飲食店	64	34	53.1%	9	7	77.8%	73	41	56.2%
4項		百貨店・マーケット等	119	59	49.6%	35	35	100.0%	154	94	61.0%
5項	イ	旅館・ホテル・宿泊所等	111	62	55.9%	39	24	61.5%	150	86	57.3%
	ロ	寄宿舎・下宿・共同住宅	164	52	31.7%	44	36	81.8%	208	88	42.3%
6項	イ	病院・診療所・助産所	44	18	40.9%	9	9	100.0%	53	27	50.9%
	ロ	各種福祉施設(入所施設)	25	10	40.0%	6	1	16.7%	31	11	35.5%
	ハ	各種福祉施設(通所施設)	54	15	27.8%	10	3	30.0%	64	18	28.1%
	ニ	幼稚園・特別支援学校	13	1	7.7%	3	2	66.7%	16	3	18.8%
7項		小学校・中学校・高等学校等	117	3	2.6%	23	5	21.7%	140	8	5.7%
8項		図書館・博物館・美術館等	4	1	25.0%	3	1	33.3%	7	2	28.6%
9項	イ	蒸気浴場・熱気浴場等	1	1	100.0%				1	1	100.0%
	ロ	イに掲げる以外の公衆浴場	2	1	50.0%				2	1	50.0%
10項		車両の停車場等	6	2	33.3%				6	2	33.3%
11項		神社・寺院・教会等	43	3	7.0%	14	6	42.9%	57	9	15.8%
12項	イ	工場・作業場	332	209	63.0%	97	68	70.1%	429	277	64.6%
	ロ	映画スタジオ・テレビスタジオ	1	1	100.0%				1	1	100.0%
13項	イ	自動車車庫・駐車場	6	5	83.3%	1		0%	7	5	71.4%
14項		倉庫	217	120	55.3%	48	35	72.9%	265	155	58.5%
15項		前各項に該当しない事業場	183	108	59.0%	44	30	68.2%	227	138	60.8%
16項	イ	特定用途を含む複合用途防火対象物	92	61	66.3%	28	21	75.0%	120	82	68.3%
	ロ	イ以外の複合用途防火対象物	39	19	48.7%	10	8	80.0%	49	27	55.1%
17項		文化財建造物	3		0%	4		0%	7		0%
合　計			1,750	827	47.3%	472	313	66.3%	2,222	1,140	51.3%

※対象物数：棟数で記載

老人保健福祉施設（気仙沼市）

病院（南三陸町）

9 危険物施設被害状況

管内の危険物施設 390 施設のうち、50%あたる 197 施設が被災しており、その多くが津波による甚大な被害となっている。特に、気仙沼市においては、屋外タンク貯蔵所のタンク流出に伴う危険物漏えいの他、市街地への屋内・外貯蔵所からのドラム缶等の容器流入に伴う対応事案も多く発生した。また、南三陸町においては、給油取扱所が全て被災したことにより、発災後しばらくは燃料確保が困難な状況が続いた。

危険物施設被害状況　　（平成 23 年 3 月 31 日現在）

製造所等別 ＼ 市町別		気仙沼市			南三陸町			合　計		
		施設数	被災数	被災率	施設数	被災数	被災率	施設数	被災数	被災率
貯蔵所	屋　内	32	11	34.4%	6	6	100.0%	38	17	44.7%
	屋外タンク	37	31	83.8%	4	3	75.0%	41	34	82.9%
	屋内タンク	9	6	66.7%	1	1	100.0%	10	7	70.0%
	地下タンク	61	19	31.1%	18	8	44.4%	79	27	34.2%
	簡易タンク	1	1	100.0%				1	1	100.0%
	移動タンク	65	14	21.5%	8	4	50.0%	73	18	24.7%
	屋　外	21	13	61.9%	2	2	100.0%	23	15	65.2%
	小　計	226	95	42.0%	39	24	61.5%	265	119	44.9%
取扱所	給　油	46	31	67.4%	15	15	100.0%	61	46	75.4%
	第一種販売	1	1	100.0%				1	1	100.0%
	移　送	3	3	100.0%				3	3	100.0%
	一　般	48	22	45.8%	12	6	50.0%	60	28	46.7%
	小　計	98	57	58.2%	27	21	77.8%	125	78	62.4%
合　計		324	152	46.9%	66	45	68.2%	390	197	50.5%

市街地へのドラム缶等の流入（気仙沼市）

給油取扱所（南三陸町）

10　石油基地における屋外タンク被害状況

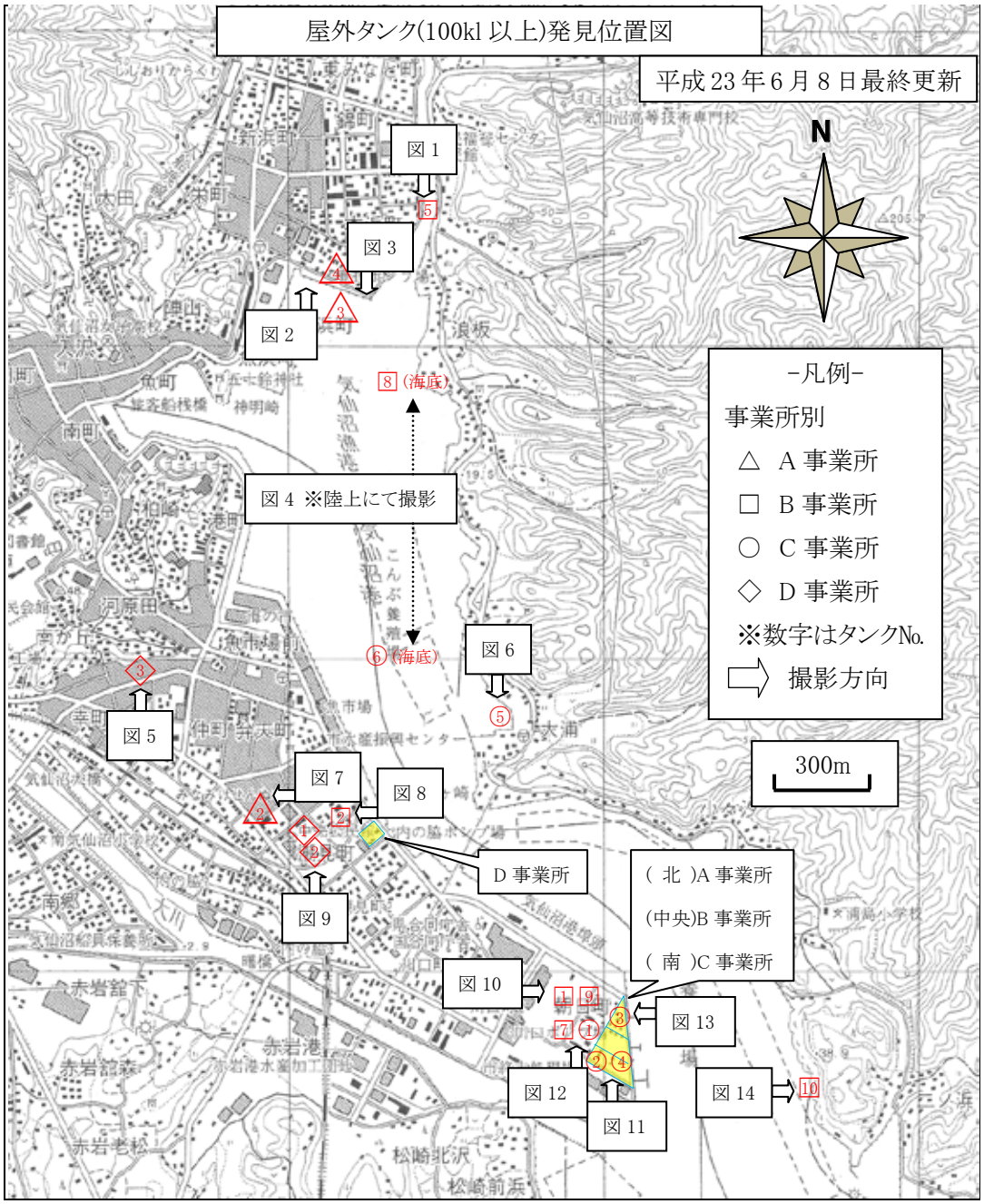
気仙沼市朝日町及び潮見町に設置されていた、100kl 以上の屋外タンク 23 基中、22 基が津波により流失した。現在 18 基のタンクが市内各地で発見されているが、4 基は所在不明である。なお、発見されているほとんどのタンクでは、発見場所周囲及び内部に油分は見分されず、津波で流される過程でタンク内の危険物は流出したと考えられ、この流出した危険物が気仙沼湾内で発生し、広範囲に延焼拡大した火災の一因になったものと思われる。

屋外タンク被害状況（100kl 以上）（平成 23 年 6 月 8 日現在）

	ガソリン	軽　油	灯　油	重　油	合　計
基　数(基)	2	3	4	13	22
最 大 数 量 (kl)	1, 912	2, 609	3, 155	16, 555	24, 231
被災時油量(kl)	1, 535	1, 958	498	7, 530	11, 521

※被災時油量は、業者からの聞き取り。

※未流出タンク:C 事業所 No.4 横置き中仕切り(ガソリン・軽油)タンク(最大数量:100 kl)



屋外タンク設置場所の状況

A 事業所(西側から撮影)

B 事業所(北側から撮影)

C 事業所(北側から撮影)

D 事業所(東側から撮影)

屋外タンク確認時の状況

図 1

B(No.5)

図 2

A(No.4)

図 3

A(No.3)

図 4

B(No.8)/C(No.6)
(陸上に引き上げた状態を撮影)

図 5

D(No.3)

図 6

C(No.5)

図 7

A(No.2)

図 8

B(No.2)

図 9

D(No.2)/D(No.1)

図 10

B(No.1)/B(No.9)

図 11

C(No.2)/C(No.4)

図 12

B(No.7)/C(No.1)

図 13

C(No.3)

図 14

B(No.10)

※未流出タンク
C(No.4)横置き
中仕切りタンク
(被災時油量)
ガソリン:44kl
軽　　油:12kl

※未発見タンク 4 基:A 事業所(No.1) 、B 事業所(No.3)・(No.4)・(No.6)

11 消防施設等被害状況

(1)消防本部被害状況

人的被害は、南三陸町内において、消防署庁舎内での活動及び庁舎周辺での避難誘導中に8名、役場防災対策庁舎で活動中に1名及び気仙沼市内において、業務途上での避難誘導中に1名が津波により流され殉職している。

施設被害は、津波により、南三陸町内において、1消防署1出張所が全壊及び気仙沼市内において、1出張所が全損となっている。

車両等の被害は、津波により、南三陸町内において、直近高台に移動した車両2台が水没及び気仙沼市内において、整備工場入庫中の車両1台が水没し、整備のため造船所に係留中の高速消防救急艇1艇が流出後火災により焼損している。

職員及び施設等の被害状況　（平成24年1月11日現在）

消防職員(人)		消防施設		消防車両等(台・艇)			
死　亡	行方不明	消防署	出張所	指令車	資機材搬送車	広報車	高速消防救急艇
8(公務)	2(公務)	1(全壊)	1(全壊) 1(全損)	1	1	1	1

南三陸消防署（全壊）

南三陸消防署歌津出張所（全壊）

気仙沼消防署南町出張所（全損）

高速消防救急艇

(2)消防団被害状況

人的被害は、その多くが避難誘導中であり、施設及び車両等の被害は、津波によるものとなっている。

団員及び施設等の被害状況　（平成 24 年 1 月 11 日現在）

市町別	消防団員(人)		消防団拠点施設	消防車両等(台)		
	死　亡	行方不明	使用不可	消防ポンプ自動車	積載車(軽車両含む)	その他の車両
気仙沼市	9(公務 7)	0	33	2	10	1
南三陸町	4（公務）	0	35	3	12	0

(3)同報系防災行政無線被害状況

気仙沼市は、3 系統(市町合併前)となっており、気仙沼及び唐桑地域は消防にて、本吉地域は総合支所にて地震直後から停電により屋外拡声子局の非常電源が尽きるまで広報を実施した。なお、気仙沼地域は広報不能となった 13 日 20 時 20 分までの間に、78 回の広報を実施した。

南三陸町は、役場にて地震直後から防災対策庁舎が津波で被災する直前まで広報を実施しており、親局が被災したため広報不能となった。しかし、11 日中には簡易親局を立ち上げ、停電により屋外拡声子局の非常電源が尽きるまでは広報が可能となった。

同報系防災行政無線被害状況（平成 23 年 5 月 12 日現在）

系統別＼構成別		親局			屋外拡声子局		
		施設数	被災数	被災率	施設数	被災数	被災率
気仙沼市	気仙沼地域	1		0%	107	26	24.3%
	唐桑地域	1		0%	30	9	30.0%
	本吉地域	1		0%	43	5	11.6%
	小　計	3		0%	180	40	22.2%
南三陸町		1	1	100.0%	105	43	41.0%
合　計		4	1	25.0%	285	83	29.1%

※南三陸町は、戸別受信機を毎戸、消防車庫、集会施設及び学校等に設置している。

親局：防災対策庁舎（南三陸町）

屋外拡声子局（気仙沼市）

(4)消防水利被害状況

消防水利は、発災後に管内の消火栓が断水等により全て使用不能状態となり、また、防火水槽は津波による瓦礫等の堆積により 6.2%が使用不能状態となった。このため火災防ぎょ活動は海、学校のプールや使用可能な防火水槽からの遠距離送水となった。管内の浸水区域外の全ての消火栓が使用可能となったのは発災から 173 日が経過した 8 月 31 日であった。

①消火栓　　（平成 23 年 12 月 31 日現在）

市町別	総　数	使用不可	内　訳					使　用 不可率
			故　障	流　失 (破損)	未通水	進入不可	その他	
気仙沼市	1,230	251	15	106	34	2	94	20%
南三陸町	309	114	8	27	73	6		37%
合　計	1,539	365	23	133	107	8	94	24%

※その他：瓦礫、土砂堆積等により不明

津波により破損した地上式消火栓

②防火水槽　　（平成 23 年 12 月 31 日現在）

市町別	総　数	使用不可	内　訳				使　用 不可率
			損　壊	流　出	進入不可	その他	
気仙沼市	399	6				6	2%
南三陸町	194	15	12	1	2		8%
合　計	593	21	12	1	2	6	4%

※その他：瓦礫、土砂堆積等により不明

第4章　消防機関の対応

1　消防体制

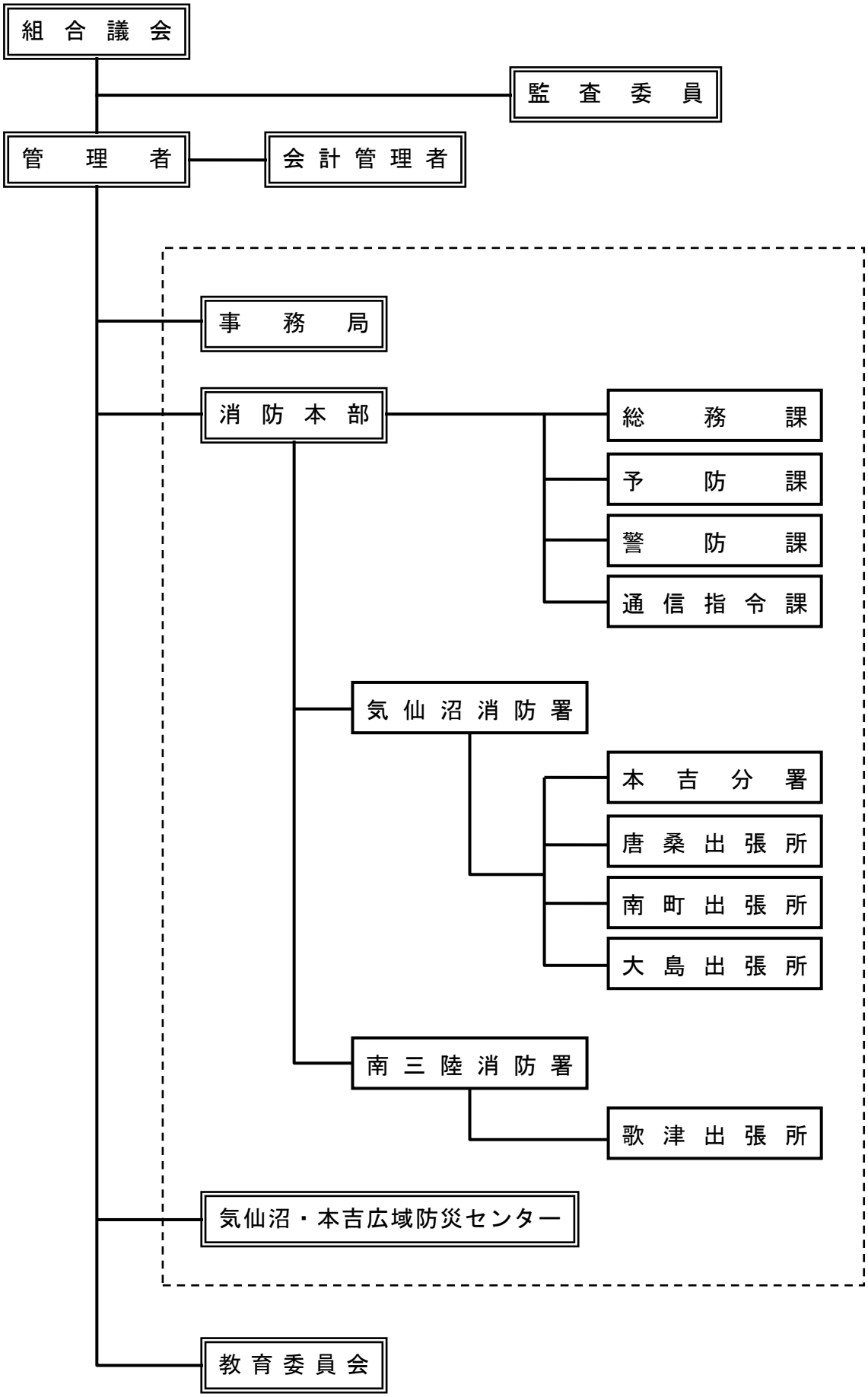
(1)組織

気仙沼･本吉地域広域行政事務組合消防本部の消防力は、消防本部に 4 課、気仙沼市に 1 署 1 分署 3 出張所、南三陸町に 1 署 1 出張所を配置し、職員数は 179 名で、消防車両は 38 台と高速消防救急艇 1 艇を保有していた。

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合職員及び車両配置状況（被災前）

	合計	消防本部	気仙沼消防署	南町出張所	大島出張所	唐桑出張所	本吉分署	南三陸消防署	歌津出張所
職員数	179	32	38	14	16	15	19	29	16
消防車両合計	39	6	11	3	4	3	4	5	3
消防ポンプ自動車	10	1	2	2	1	1	1	1	1
水槽付ポンプ車	2						1	1	
化学車	1		1						
小型動力ポンプ付水槽車	1		1						
はしご車(30m 級)	1		1						
照明電源車	1		1						
救助工作車	1		1						
水難救助車	1		1						
高速消防救急艇	1				1				
高規格救急自動車	6		1	1		1	1	1	1
救急自動車	2	1			1				
指令車	3	1	1					1	
査察車	1						1		
指揮車	1	1							
多機能型広報車	2					1			1
広報車	2	1			1				
資機材搬送車	2		1					1	
人員輸送車	1	1							

【組合組織図】


組合議会
監査委員
管理者
会計管理者
事務局
消防本部
総務課
予防課
警防課
通信指令課
気仙沼消防署
本吉分署
唐桑出張所
南町出張所
大島出張所
南三陸消防署
歌津出張所
気仙沼・本吉広域防災センター
教育委員会

(2)消防警戒に係る招集計画

区 分	招　集　基　準	招 集 職 員	本部体制
0号 配備	1　大雨、洪水、高潮等の注意報・ 警報が発表されたとき。 2　異常気象等の発生により、災害の発生が予測されるとき。 3　震度3の地震が観測されたとき。 4　その他特に消防長・消防署長が必要と認めたとき。	・当直員で情報収集及び広報警戒、応急対策等を行う。 ・当直員以外は、招集に応じられる体制とすること。	なし
1号 配備	1　大雨注意報又は大雨警報が発表され、次の各号のいずれかに該当するとき。 (1) 時間雨量が20㎜以上で、引き続き10㎜以上の時間雨量が予想されるとき。 (2) 3時間連続時間雨量10㎜以上で、引き続き10㎜以上の時間雨量が予想されるとき。 (3) 土砂災害警戒情報が発表されたとき 2　異常気象等の発生により、局地的な被害が発生したとき。 3　強風注意報又は暴風警報が発表され、次の各号のいずれかに該当するとき。 (1) 平均風速10m以上の風が1時間以上連続して吹くことが予想されるとき。 (2) 最大瞬間風速20m以上で、かつ、平均風速6m以上の風が1時間以上連続して吹くことが予想されるとき。 4　震度4の地震が観測されたとき。 5　宮城県に津波注意報が発表されたとき。 6　上記以外の注意報・警報が発表され、災害の発生が予想されるとき。 7　その他特に消防長・消防署長が必要と認めたとき。	・消防長、次長 ・各課課長外1名 (通信指令課は課長外2名) ・署長、副署長 ・分署長、出張所長 ・各署所1隊（5名） ・当直員及び上記招集職員以外は、招集に応じられる体制とすること。 ※所属長は、警戒事象や警戒時間等を考慮し、招集職員数を増減できるものとする。 ※消防長は、被害の状況等を考慮し、津波注意報が継続中においても0号配備に切り替えることができるものとする。	消防警戒本部
2号 配備	1　大雨、洪水、高潮等の注意報・警報が発表され広範囲にわたる災害の発生が予想されるとき、又は被害が発生したとき。 2　異常気象等の発生により、広範囲にわたる災害の発生が予想されるとき、又は被害が発生したとき。 3　火災警報を発令したとき。 4　震度5弱以上の地震が観測されたとき。 5　宮城県に津波警報が発表されたとき。 　ただし、遠地津波等で津波到達まで時間を要することが明らかな場合は、消防長特命とし、招集時間及び招集人員を別に指定することができるものとする。 6　その他特に消防長・消防署長が必要と認めたとき。	・全職員 （病気休暇等の招集免除者除く）	消防特別 警戒本部

※管内で1号配備又は2号配備に該当する地震が発生した場合、該当しない管内においても、招集計画に準じて職員を招集し警戒にあたるものとする。

2 地震津波安全対策

当消防本部では、高い確率で発生が予想されていた宮城県沖地震に備え、万全の体制を期するため安全対策の構築を目指していた。

(1)地震津波対策の歩み

平成 7年 2月 1日

地震・津波災害警防計画運用開始

平成13年 9月20日

「宮城県沖地震長期評価」の発表に伴い、地震津波対策検討委員会設置

平成15年 6月 4日

地震・津波災害活動計画作成(地震・津波災害警防計画の全面改正)

平成15年10月 1日

「死者0」を目標に掲げ、気仙沼消防署に地震津波安全対策担当者を配置

平成20年 4月 1日

平成16年3月に報告された宮城県第三次被害想定に対しての対策構築のため、各署所に地震津波安全対策担当者を配置

(2)訓練体制

地震に対する初動時の対応に万全を期するため、定期的な訓練を継続して行いその都度検証結果を活動計画に反映することとしていた。

平成20年 8月15日

第1回緊急地震速報伝達訓練(以後、毎月15日)

平成21年 2月27日

第1回津波災害対処訓練(平成22年11月30日までに8回実施)

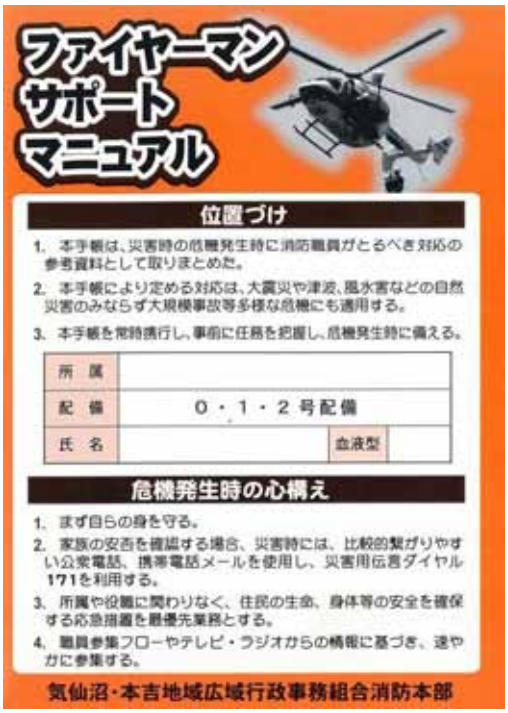
津波災害対処訓練

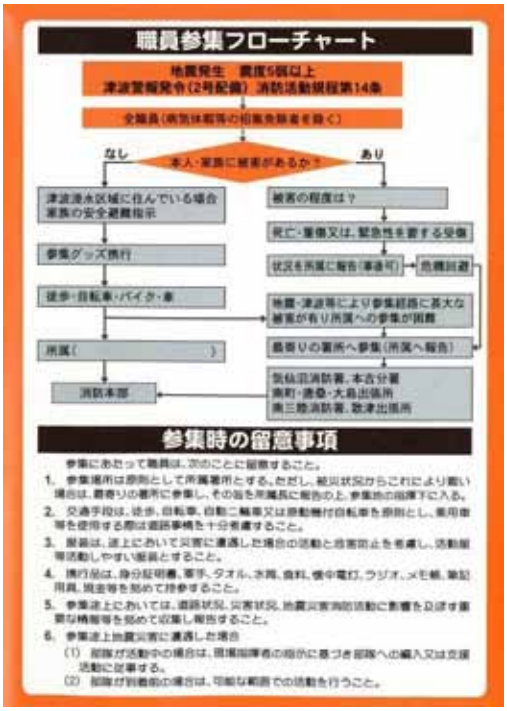
(3)ファイヤーマンサポートマニュアル

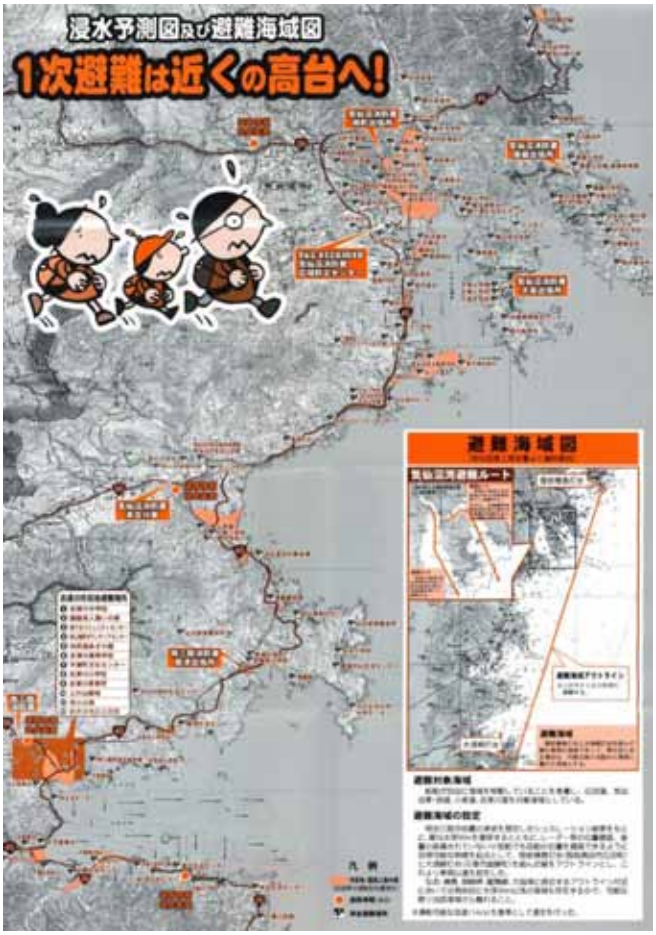
災害発生時に、職員全員が共通の認識を持ち、当直員以外も初動時の体制等を迅速に行うために作成したファイヤーマンサポートマニュアルを職員全員に配布した。

表面に消防警戒に係る招集計画、参集フローチャート、地震・津波災害活動計画に係る活動フロー、裏面に当消防本部管内の第三次被害想定調査津波浸水域予想図を記載し、全職員が津波浸水域予想区域を把握できるよう努めていた。

ファイヤーマンサポートマニュアル







3 東日本大震災時系列

3月11日

14:46　平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震発生。三陸沖を震源とする Mw9.0、最大震度 7。防災センター6 弱観測。通信指令課事務室に指揮本部設置。

14:46　気仙沼市役所に気仙沼市災害対策本部設置。南三陸町防災対策庁舎に南三陸町災害対策本部設置。

14:47　防災センター庁舎異常なし。指令回線・各署所無線基地局異常なし。

地震直後の防災センター庁舎

14:49　大津波警報発表(気象庁)。地震・津波災害活動計画に基づく活動開始。

14:50　気仙沼市内の県防潮水門遠隔操作システム一斉閉鎖。
(通信指令課)

14:50　気仙沼市本吉町西川内地内に危険排除出動。

14:52　南三陸町歌津字枡沢地内一般住宅、津波浸水区域救急出動。
[事例　歌津①]

14:53　気仙沼市田中地内、ガス臭調査出動。

14:56　MIDORI(宮城県総合防災情報システム)で第1報の被害報告。

14:59　津波情報。宮城県津波予想到達時間 15:00。予想波高 6m。出動各隊へ高台避難指示。
(通信指令課)

15:00　気仙沼市大島田中浜、引き潮を確認。
(津波監視隊)

15:01　気仙沼市内湾、引き潮確認。
(津波監視隊)

15:02　出動各隊へ高台避難指示。
(通信指令課)。

15:03　気仙沼市本吉町小泉海岸、引き潮確認。
(津波警戒隊)

15:03　気仙沼市岩井崎付近、引き潮確認。
(津波監視隊)

15:04　南三陸町戸倉字沖田地内、海岸線引き潮確認。
(津波警戒隊)

15:07　気仙沼市本吉町大朴木地内一般家屋、土砂崩れ救助出動。

15:11　気仙沼市大島田中浜、津波第 1 波襲来。
(津波監視隊)

15:11　南三陸町戸倉字津の宮地内、強い引き潮確認。
(津波警戒隊)

15:14　津波情報。宮城県 10m以上の津波襲来を確認。
(気象庁)

15:16　出動各隊に津波警戒区域からの避難指示。
(通信指令課)

15:17　出動各隊への高台避難指示。
(南三陸消防署)

15:18　南三陸町戸倉字長清水地内、津波襲来。
(津波警戒隊)

15:19　気仙沼市岩井崎方面、津波襲来。
(津波監視隊)

15:20　気仙沼市唐桑町鮪立漁港、津波襲来。
(津波警戒隊)

15:21　出動各隊への高台避難指示。
(南三陸消防署)

15:22　気仙沼市杉の下水門、津波監視システム破損。

15:24　気仙沼市御伊勢浜、津波襲来。
(津波監視隊)

15:24　気仙沼市本吉町天ヶ沢地内国道 45 号線上、津波襲来。
(津波警戒隊)

15:25　GPS 波浪計にて 14:54 気仙沼広田湾沖、6mの津波第1波観測。15:14 気仙沼広

田湾沖、6mの津波最大波観測。
（気象庁）

15:26　気仙沼市唐桑町鮪立漁港、津波襲来。
（津波警戒隊）

15:28　南三陸町志津川字袖浜地内、津波襲来。
（津波警戒隊）

15:30　県防潮水門遠隔操作システムモニター監視不能。

15:30　気仙沼市朝日町地内、津波浸水区域における冷蔵工場火災発生。
［事例　気仙沼⑨］

15:31　気仙沼市岩井崎沖、約 10m以上の津波襲来。
（津波監視隊）

15:34　南三陸町歌津字伊里前地区、津波により壊滅状態。
（津波監視隊）

15:35　気仙沼市市街地水没
（津波監視隊）

15:40　南三陸町戸倉字寺浜地内、約 7～8mの津波襲来。
（津波警戒隊）

15:41　消防職員安否確認開始。

15:47　気仙沼市本吉町前浜漁港、津波襲来（津波警戒隊）。

15:49　気仙沼市南町四丁目地内南町出張所、2 階まで浸水。
（津波監視隊）

15:50　南三陸町志津川字天王山地内、その他火災発生。
［事例　南三陸①］

15:50　南三陸町志津川字下保呂毛地内、火災発生。

15:55　気仙沼市田谷・本郷地内、津波浸水区域における救助出動。

15:58　気仙沼市鹿折地区街区火災発生。
［事例　気仙沼①］

16:00　南三陸町志津川字廻舘地内、津波による流出家屋における救助出動。
［事例　南三陸②］

気仙沼市田谷・本郷浸水区域からの救助活動

16:23　気仙沼市母体田高台から津波襲来確認。
（津波監視隊）

16:26　気仙沼市仲町二丁目・弁天町一丁目地内、津波浸水区域における火災発生。
［事例　気仙沼⑥］

16:34　気仙沼市本郷地内、津波浸水区域における救助出動。

16:35　気仙沼市松崎浦田地内気仙沼市立松岩保育所付近、流出・倒壊家屋救助出動。

17:00　南三陸町志津川字新井田地内、孤立被災者の救助出動。
［事例　南三陸③］

17:15　気仙沼・本吉広域防災センター視聴覚研修室に気仙沼市災害対策本部を移転。

17:27　気仙沼市南ヶ丘地内倒壊建物・被災車両、救助出動。

17:34　気仙沼市二ノ浜・浪板地内・沿岸部及び林野、気仙沼市沿岸部及び林野火災発生。
［事例　気仙沼⑦］

17:46　気仙沼市唐桑町小鯖地内一般住宅、津波浸水区域における救助出動。
［事例　唐桑①］

消防本部屋上から見た気仙沼市内湾地域火災

17:55　南三陸消防署庁舎、津波浸水の被害報告。

18:28　南三陸町歌津伊里前大橋落橋。歌津中学校に歌津災害対策本部設置。歌津出張所隊は地震・津波災害活動計画に基づき、南三陸町立歌津中学校に方面指揮所を移動し活動開始。

18:58　気仙沼市唐桑町小鯖地内倒壊家屋、救助出動。

19:00　南三陸消防署隊は庁舎被災のため、南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに方面指揮所を設置し活動開始。

19:10　指令回線・一般回線故障・119 番受信不能状態。第 1・2 無線（大島）遠隔操作装置故障。以後、第 3 無線装置（気仙沼署）で対応。

21:17　南三陸消防署通信員の安否不明。

21:24　本吉分署非番員1名、安否不明。

22:30　宮城県広域消防相互応援協定による登米市消防本部先行調査隊気仙沼・本吉広域防災センターに到着。

23:00　宮城県広域消防相互応援協定に基づき大崎ブロック幹事消防本部の大崎地域広域行政事務組合消防本部に応援要請。

3月12日

0:25　南三陸町防災対策庁舎に町長以下８名残留情報入手。
（県災害対策本部）

0:54　登米市消防本部先行調査隊、南三陸町入谷ひころの里到着。

1:32　気仙沼市松崎片浜地内一般家屋、救助出動。

気仙沼市鹿折地区火災現場活動

4:30　岩手・宮城県際市町災害時相互応援協定に基づき一関市消防本部（隣接消防本部先着隊）防災センター到着。

6:20　気仙沼市鹿折地区街区火災現場における救助出動。
［事例　気仙沼②］

7:20　宮城県広域消防相互応援大崎ブロック隊（大崎地域広域消防本部・登米市消防本部・栗原市消防本部）南三陸町検索救助活動開始。

7:40　気仙沼市唐桑町東舞根地内山林、孤立被災者の救助出動。
［事例　唐桑②］

8:39　緊急消防援助隊東京都隊地上部隊進出拠点の気仙沼市営総合運動場到着。

9:00　緊急消防援助隊東京都隊指揮隊、気仙沼・本吉広域防災センター到着。

9:00　気仙沼市東八幡前地内特別養護老人ホーム恵心寮、多数避難困難者救助活動開始。

9:00　気仙沼市南郷浸水区域救助現場、前進指揮所設置。

水没した気仙沼市街地

9:09　気仙沼市南郷・神山地内、浸水区域における救助活動開始。

9:20　緊急消防援助隊東京都隊、鹿折地区火災防ぎょ活動開始。

9:55　気仙沼市唐桑町西舞根地区、孤立集落救助出動。

10:10　緊急消防援助隊新潟県隊、鹿折地区火災現場到着。

10:30　緊急消防援助隊新潟県隊、鹿折地区火災防ぎょ活動開始。

11:00　気仙沼市錦町二丁目地内介護老人保健施設リバーサイド春圃、多数避難困難

者救助活動開始。
[事例　気仙沼③]

13:00　南三陸町志津川字汐見町地内耐火造4階建物集会場、高層建物に孤立した多数被災者救助活動開始。
[事例　南三陸④]

13:30　南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに南三陸町津波災害対策本部設置。

14:00　南三陸町歌津字町向地内、孤立被災者救助出動。
[事例　歌津②・③]

15:30　気仙沼市中みなと町地内特別養護老人施設ケアハウスみなみ、多数要救助者救助活動開始。

15:30　気仙沼市長、消防長現場視察。

15:39　気仙沼市内の脇一丁目地内被災建物、浸水区域救助出動。

17:34　気仙沼市南郷地内一般住宅、津波浸水区域における救助出動。
[事例　気仙沼④]

19:00　気仙沼市川口町一丁目地内工場、津波浸水区域における長距離の徒歩による救助出動。
[事例　気仙沼⑤]

19:10　南町出張所隊は気仙沼・本吉広域防災センターに方面指揮所を移動し活動開始。

20:20　大津波警報から津波警報に切り替わり。
(気象庁)

21:40　緊急消防援助隊京都府隊、登米市なかだアリーナ到着。

22:58　気仙沼市亀山地内、気仙沼市大島亀山林野火災発生。
[事例　大島①]

3月13日

6:20　大崎地域広域行政事務組合消防本部へ宮城県広域消防相互応援協定に基づく救急隊の気仙沼市への応援要請。

7:30　津波警報から津波注意報に切り替わり。
(気象庁)

8:32　気仙沼市南郷地内マリンサイド気仙沼、津波浸水区域における救助出動。

8:41　緊急消防援助隊京都府隊、南三陸町にて活動開始。

8:45　気仙沼市本吉町・気仙沼市御伊勢浜海岸の津波浸水区域内、行方不明者捜索開始。4 月 2 日まで 19 日間実施。
[事例　本吉①]

9:55　気仙沼市唐桑町西舞根地内、孤立被災者救助出動。
[事例　唐桑③]

9:55　気仙沼市田尻地内飲食店、被災車両からの救助出動。
[事例　大島②]

10:58　気仙沼市魚市場前地内被災建物、津波浸水区域における救助出動。

11:22　南三陸町各隊は行方不明者捜索開始。
(南三陸町災害対策本部)

気仙沼市浸水区域ヘリ救助活動

11:55　大崎地域広域行政事務組合消防本部救急隊 2 隊気仙沼市到着。

17:28　気仙沼市本吉町花見橋付近、危険排除出動。

17:58　津波注意報解除。
(気象庁)

23:30　緊急消防援助隊鳥取県隊、登米市津山町もくもくハウス到着。

3月14日

5:36　無線統制台使用不能。気仙沼署受令機で代用。

8:00　緊急消防援助隊鳥取県隊、南三陸町にて活動開始。

8:12　宮城県消防課長にヘリ調整員の出向を要請。

10:00　緊急消防援助隊新潟県隊、活動終了。石巻市に転戦。

13:40　緊急消防援助隊山梨県隊、宮城県本吉響高等学校に到着。

14:30　南三陸町志津川字天王山地内、火災発生。

15:29　気仙沼市唐桑町津本地内沿岸部漂流物による林野火災発生。
［事例　唐桑④］

17:00　緊急消防援助隊兵庫県隊、石巻市総合運動公園到着。

22:34　気仙沼市内の脇一丁目地内、内の脇地区火災発生。
［事例　気仙沼⑧］

3月15日

7:00　緊急消防援助隊兵庫県隊、南三陸消防隊と合流。南三陸町歌津地区にて活動開始。

7:40　気仙沼市長、消防長大島視察。

8:00　緊急消防援助隊山梨県隊、気仙沼市本吉地区にて活動開始。

10:25　南三陸町志津川字大沢地内、林野火災発生。
［事例　南三陸⑤］

3月16日

13:32　消防長、気仙沼市長、宮城県職員津波災害現場視察。

18:20　緊急消防援助隊香川県隊、気仙沼市立津谷中学校到着。

20:49　気仙沼市磯草地内一般住宅、ツイッター情報による救助出動。
［事例　大島③］

3月17日

8:00　大崎地域広域行政事務組合消防本部救急隊気仙沼市引揚。

8:30　緊急消防援助隊香川県隊、気仙沼市本吉地区にて活動開始。

12:18　気仙沼市立本吉病院被災のため、入院患者 19 名を一関消防本部・緊急援助隊山梨県隊・徳州会と連携して岩手県立千厩病院まで転院搬送。
［事例　本吉②］

13:40　緊急消防援助隊山梨県隊、野営場所を気仙沼市立津谷中学校に移動。

3月18日

9:39　気仙沼市朝日町地内、浸水区域倒壊建物火災発生。

11:12　気仙沼市立面瀬小学校付近、ガス臭調査出動。

15:40　指令回線・119 回線一部復旧。

15:52　指令台仮設電源にて仮復旧。

15:54　無線統制台復旧。

16:55　気仙沼市赤岩五駄鱈地内、ガス臭調査出動。

3月19日

11:00　緊急消防援助隊香川県隊、活動終了。

13:58　気仙沼市西みなと町JR鹿折唐桑駅付近、ガス臭調査出動。

16:45　緊急消防援助隊鳥取県隊、活動終了。

17:00　宮城県広域消防相互応援大崎ブロック隊、南三陸町での活動終了引揚。大崎地域広域行政事務組合消防本部・栗原市消防本部南三陸町救急応援開始。

3月20日

7:00　緊急消防援助隊鳥取県隊、引揚。

7:40　緊急消防援助隊香川県隊、引揚。

13:37　気仙沼市幸町四丁目地内工場、ツイッター情報による救助出動。
［事例　気仙沼⑩］

3月21日

12:00　緊急消防援助隊兵庫県隊、石巻市総合運動公園引揚。

14:43　気仙沼市朝日町地内、危険排除出動。陸に打ち上げられた被災船からの油漏れ。

19:40　福島原発空中放射線モニタリング情報。県内は健康に影響を与えるレベルではない。以降 7 月 12 日まで毎日受信。
（宮城県災害対策本部）

3月22日

15:23　気仙沼市魚町二丁目地内、危険排除出動。陸に打ち上げられた被災船からの油漏れ。

3月26日

14:55　南三陸・歌津無線基地局仮設置。

3月28日

17:19　気仙沼市本吉町洞沢地内、建物火災発生。

3月30日

8:51　気仙沼市本吉町津谷明戸気仙沼市立本吉病院敷地内、被災車両からの火災発生。
[事例　本吉③]

10:30　気仙沼市中みなと町地内、ガス臭調査出動。

3月31日

17:10　大崎地域広域行政事務組合消防本部・栗原市消防本部南三陸町救急応援終了、引揚。

4月 1日

気仙沼市災害対策本部

9:05　気仙沼市八日町二丁目青龍寺付近、ガス臭調査出動。

16:55　気仙沼市松崎五駄鱈地内、ガス臭調査出動。

4月 2日

10:21　気仙沼市南郷地内、非火災発生。通電により一般家屋の電力量計溶融。

4月 3日

10:40　緊急消防援助隊山梨県隊、帰任。

4月 6日

8:10　第1・2無線(大島)遠隔操作装置復旧。

13:10　気仙沼市仲町一丁目地内津波被災車両、油漏洩危険排除出動。

15:15　気仙沼市南町三丁目地内津波被災車両、油漏洩危険排除出動。

4月 7日

15:30　気仙沼市プラザホテル前岸壁、水難救助出動。

23:32　宮城県沖を震源とするM7.2、最大震度6強の地震発生。気仙沼市、南三陸町で震度5強を観測。
(気象庁)

23:34　宮城県沿岸に津波警報発表。宮城県沿岸の予想波高は 1m。既に到達している。
(気象庁)

4月 8日

0:52　気仙沼市内湾、海面変動なし。
(津波監視隊)

0:55　津波警報・注意報解除。
(気象庁)

4月11日

17:16　福島県浜通りを震源とするM7.0、最大震度6弱の地震発生。気仙沼市、南三陸町で震度3を観測。
(気象庁)

17:18　宮城県沿岸に津波注意報発表、津波到達予想時刻18:00、予想波高50㎝。
(気象庁)

17:42　出動各隊に高台への避難指示。
(通信指令課)

18:00　海面変動等なし。
（津波監視隊）
18:05　津波注意報解除。
（気象庁）

4月13日

10:20　緊急消防援助隊秋田県隊、登米市なかだアリーナ到着。
12:55　緊急消防援助隊秋田県隊、南三陸町にて活動開始。
13:00　緊急消防援助隊京都府隊、活動終了引揚。

4月15日

19:04　気仙沼市朝日町地内、異臭調査出動。

4月21日

17:17　気仙沼市浪板地内、危険排除出動。被災漁船からの油漏れ。

4月22日

12:00　緊急消防援助隊山形県隊、気仙沼・本吉広域防災センター到着。

4月23日

15:00　緊急消防援助隊山形県隊、気仙沼市にて活動開始。
17:00　緊急消防援助隊東京都隊、活動終了引揚。

4月24日

17:15　気仙沼市浪板地内、危険排除出動。廃油タンクからの油漏れ。

4月25日

8:45　気仙沼市唐桑町西舞根地区、集中捜索活動。

気仙沼市唐桑地区集中捜索

4月26日

14:37　119 回線全地区仮復旧。

4月27日

17:15　緊急消防援助隊秋田県隊、南三陸町での活動終了。

4月28日

13:00　緊急消防援助隊秋田県隊・山形県隊、引揚。
緊急消防援助隊全隊活動終了し帰任。

4 初動時の対応

3 月 11 日 14 時 46 分の地震発生と同時に、「消防活動規程」及び「消防警戒に係る招集計画」に基づき、職員は各所属及び最寄りの署所に参集した。消防本部体制を「消防特別警戒本部」とし、活動体制は、消防本部に消防長を指揮本部長とする指揮本部を設置し、署所には署所長を方面指揮所長とした方面指揮所を設置した。

防災センター２階事務室内の被災状況

地震発生時、職員は 73 名勤務しており、市町地域防災計画及び「地震・津波災害活動計画」等に基づき活動を開始した。自己及び来庁者の身体保護、出火防止を図りながら庁舎、施設及び人的被害状況と署所周辺の被害状況の把握に努めた。

14 時 49 分大津波警報が発表され、直ちに防災行政無線による「避難指示」の広報を間断なく実施した。各署所では消防車両で広報を実施しながら、情報収集、避難誘導を含めた災害事案対応、各方面指揮所は「地震・津波災害活動計画」により津波監視及び警戒を実施した。

指揮本部は 14 時 59 分に、出場各隊へ浸水予想区域内から退避し高台への避難を指示したが、幹線道路は住民の避難車両で渋滞したため、津波襲来直前に退避を完了した隊もあった。

大津波警報と余震が継続している中ではあったが、災害現場は切迫した状況下にあったため、消防隊は津波浸水区域内での活動をせざるを得なかった。津波襲来後から 119 番通報が殺到したが、全ての通報事案に対応することは不可能な状態であり、部隊編成は少人数で多数の小隊を編成し、人命救助を優先とした活動としたが、活動中の消防隊に対しての救出要請も相次ぎ、現場は混乱を極めた。

また、潮位観測システムが津波により破壊されたため、各津波監視隊の情報を基に活動を行った。

5 災害対策本部等の設置状況

発災と同時に地域防災計画に基づき 14 時 46 分気仙沼市役所に「気仙沼市災害対策本部」が設置された。しかし、市内全域が停電となり十分な非常電源が確保できず、庁舎周辺に津波により瓦礫が流入、更に多数の市民が市役所内に避難してきたため、災害対策本部が設置されたホールでは機能を果たさないと判断し、気仙沼市地域防災計画災害対策本部等の組織体制により、17 時 15 分に気仙沼・本吉広域防災センターに移設された。

防災センター災害対策本部の状況

気仙沼・本吉広域防災センターには、庁舎が被災した気仙沼警察署、気仙沼海上保安署が移転し、更に自衛隊が指揮拠点を構えた。生命、身体を保護する機関が一箇所に集結したことにより、連携が必要な災害事案に対して迅速な調整を図ることができた。

気仙沼市役所周辺のライフラインが回復し、気仙沼市役所の避難者が移動したことで、4 月 1 日に災害対策本部は気仙沼市役所に移設された。

南三陸町では、地域防災計画に基づき 14 時 46 分防災対策庁舎に「南三陸町津波災害対策本部」を設置したが、役場庁舎が津波により被災したため、3 月 12 日 13 時 30 分に津波浸水区域外にある南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに「南三陸町津波災害対策本部」を移設した。

ベイサイドアリーナに移設された津波災害対策本部の状況

6 情報収集体制

津波襲来後は管内の状況が一変したため、各方面に出動している車両部隊からの現場状況報告と、参集した職員の情報を併せ、管内の被災状況の把握に努めた。

気仙沼市災害対策本部としては、市内の被害の全貌を把握する必要があり、3 月 12 日早朝には、災害対策本部長である気仙沼市長、気仙沼市危機管理監及び消防長の 3 名が気仙沼市内の現場の視察を行った。更に 3 月 14 日、15 日、16 日にも視察を行い災害の全貌の早期把握に奔走した。

気仙沼市災害対策本部では、本部長である気仙沼市長から「生存者の救出を第一とした活動」との方針が示され、関係機関が連携した活動を展開した。関係機関の連携調整のため開催されている、気仙沼市災害対策本部全体会議は下記のとおりである。

3 月 31 日まで　毎日 2 回開催(午前 7 時 00 分、午後 7 時 00 分)
4 月　1 日から　毎日 1 回開催(午後 7 時 00 分)
5 月 16 日から　毎週 3 回開催(月、水、金:午後 7 時 00 分)
6 月 27 日から　毎週 2 回開催(月、木:午後 6 時 30 分)
8 月　8 日から　毎週 1 回開催(月:午後 6 時 00 分)
11 月 28 日から　隔週 1 回開催(月:午後 6 時 00 分)

南三陸町では総合体育館ベイサイドアリーナに南三陸町津波災害対策本部と仮設消防署が設置されたため、情報収集及び連絡を容易に図ることができた。

3 月 26 日には、総合体育館ベイサイドアリーナ隣接のテニスコートに仮設庁舎を設置し、津波災害対策本部を移設し、津波災害対策本部の開催状況は下記のとおりである。

3 月 12 日から　毎日 1 回開催(午後 7 時 00 分)
3 月 30 日から　毎日 1 回開催(午後 6 時 30 分)
5 月　1 日から　毎週 3 回開催(月、水、金:午後 6 時 30 分)
5 月 27 日から　毎週 3 回開催(月、水、金:午後 5 時 30 分)
7 月　1 日から　毎週 1 回開催(木:午後 5 時 30 分)
12 月　7 日で終了　各機関の申し出により必要に応じて開催

当消防本部では、3 月 12 日に消防庁舎と多くの職員が被災した南三陸町に消防次長と消防本部予防課長を派遣し、3 月 13 日には消防本部警防課長補佐を派遣し情報収集と指揮体制の強化を図った。旧町及び大島に設置された現地災害対策本部には、消防幹部職員を派遣し方面指揮所との連絡調整にあたった。

7 職員参集状況

「消防活動規程」及び「消防警戒に係る招集計画」に職員の参集基準を定めている。震度 5 弱以上及び津波警報発表の場合は全職員の参集とし、各所属への参集を原則とするが、被災状況からこれにより難い場合には最寄りの署所への参集を規定している。

地震発生後、30 分で 51 名、1 時間経過時には 74 名が参集し、参集率は 80%を超え、3 月 12 日 15 時 40 分には参集が完了した。

各署所では所属地が異なる職員による隊編成で初動時の活動が行われ、各所属地に復帰したのは発災から一週間が経過した 3 月 17 日であった。

現場活動が絶え間なく継続したため、発災日に勤務していた 73 名の職員と、発災と同時に参集した一部の職員は、家族の安否確認ができない状態で勤務を強いられており、3 月 14 日から各所属長の判断で災害の状況を判断し、安否確認のため、交替で一時帰宅した。

職員参集状況　（初任科学生、派遣、病休除く）

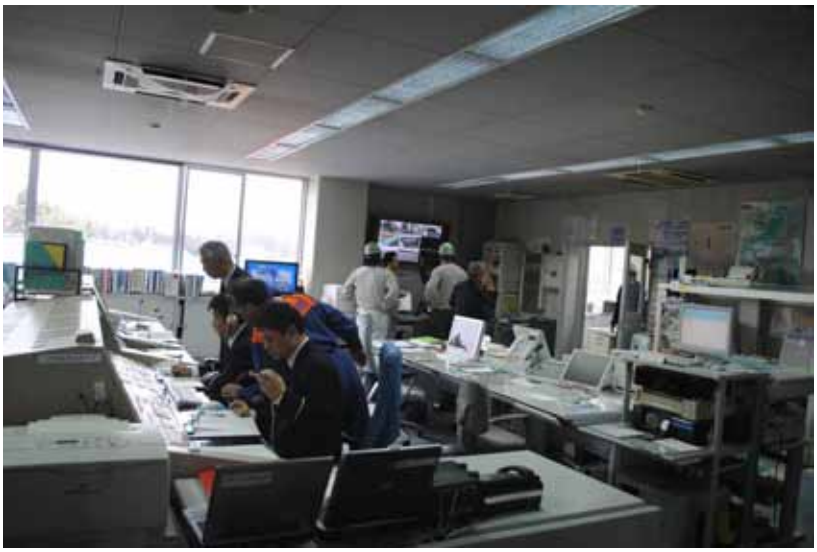
時　　間	参集人数	総参集人数	参集累計率
当直勤務者	73	73	
30 分以内	51	124	55.4 %
30 分～1 時間以内	23	147	80.4 %
1 時間～1 時間 30 分以内	2	149	82.6 %
1 時間 30 分～2 時間以内	3	152	85.9 %
2 時間～4 時間以内	5	157	91.3 %
4 時間～	8	165	100.0 %
合　計	165	165	

8　119 番入電状況

NTT 回線の被災により、3 月 11 日 19 時 10 分に 119 番通報が受信不可となったが 3 月 18 日以降、地域ごとに NTT 回線が復旧し、気仙沼地区の一部から 119 番通報が入電可能となった。

119 番入電状況（平成 23 年 3 月 11 日 14 時～19 時）

時　間	火　災	救　急	救　助	その他の災害	その他	合　計
14 時		1		2	4	7
15 時		5	14		11	30
16 時	2	8	26	1	9	46
17 時	11	5	18		7	41
18 時	7	2	19		18	46
19 時		1	1		3	5
合　計	20	22	78	3	52	175



発災当日の通信指令室の状況

9 活動状況

地震による直接の被害は軽微であったが、津波襲来直後から火災が発生し、救急、救助要請が相次ぎ、沿岸部に甚大な被害をもたらした。

(1)火災

地震発生後の 15 時 30 分に、気仙沼・本吉広域防災センターから気仙沼内湾入口の方向に立ち上る黒煙を確認したのが、地震に起因する最初の火災であった。

気仙沼内湾入口で発生した火災の状況

津波が繰り返し襲来している状況下の浸水区域内で、浸水と大量の瓦礫等のため現場に接近することができなかった。更に津波により破壊されたタンクから流出した油や漂流物、船舶等が炎上しながら内湾方向へ漂着したことで複数の場所に延焼拡大したことが、気仙沼市で火災が多発した要因のひとつとして挙げられる。

また、消火栓が断水や破損したことで使用不能となり、河川等も津波の影響で活用できなかったため、遠距離での中継体形での放水を強いられた。

そして消火活動を不眠不休で延々と行った隊員は、疲労の限界を超えた活動となった。

火災件数（東日本大震災に起因するもの）

市　町	建物火災	林野火災	車両火災	その他火災	合　計
気仙沼市	3			5	8
南三陸町		1	1	3	5
合　計	3	1	1	8	13

焼損面積等

市　町	焼損棟数(棟)	焼失面積(㎡)	林野焼損面積(a)
気仙沼市	127	249, 621	22, 212
南三陸町		44, 741	124
合　計	127	294, 362	22, 336

(2) 救助

多数の救助要請等の事案に対応するため、少人数での小隊編成を行い、1 小隊が 1 事案での対応を原則とした活動を展開した。

要請の多くは津波による倒壊等を免れ残存した建物からであり、出動隊は津波による浸水と瓦礫による安全管理に留意し活動を行った。しかし、予想以上の瓦礫に救助活動は思うように捗らなかった。また、隊が分散したことで資器材は充分とは言えなかったが、現場に漂着していた発泡材やコンテナ等を活用し、各隊がそれぞれに工夫し最善の活動を目指した。

車両内に取り残された要救助者を救出している状況

活動地域は広範囲であり、同時多発した事案に対応するため、消防団や付近民に避難所までの搬送等の活動協力を依頼し、消防隊は次の現場へと転戦を重ね、昼夜に及ぶ活動となった。また、多数の入居者がいた福祉施設には消防隊、消防団の他、緊急消防援助隊東京都隊の応援を受け連携した活動を行った。

発災翌日からは、消防隊の救助活動と並行して緊急消防援助隊、消防団、警察、自衛隊が人命検索に重点を置いた活動を実施した。機関毎の活動範囲を調整し、更に、検索建物等の重複検索を避けるため、消防、警察、自衛隊の 3 機関で検索結果の統一表示を定め、検索が終了した建物や車両にはスプレー及びテープで表示した。

検索が終了した建物に表示された「Ｃｒ」マーク

救助人員（平成 23 年 3 月 11 日～平成 23 年 3 月 31 日）

部　隊	救助人員（人）
広域消防	298
緊援隊（陸上）	378
緊援隊（航空）	266
相互応援協定	10
合　計	952

(3)救急

救急要請は通常時の救急搬送件数の約 2～3 倍に及んだ。救急需要が出場可能件数を上回ったため、指令課員が緊急度と災害発生地点を考慮し、医療機関が近い場合は、自車での受診について住民に協力を求めた。更に、基幹病院に救急救命士 1 名を派遣し、病院との連携調整を図った。

緊急消防援助隊及び宮城県広域消防相互応援協定による県内応援救急隊には、現場案内等を含めた活動の補助として、出動時に当消防本部救急隊員が同乗した。

また、救急救命士の活動は、消防庁救急企画室長から、通信事情を考慮しての特定行為について通知されたが、当消防本部管内では通信体制が確保されていたこともあり、通常のメディカルコントロール体制下で活動するよう全隊に周知した。

当消防本部の救急隊の他に、各応援部隊の救急隊を気仙沼消防署に 2 隊、本吉分署に 2 隊、仮設の南三陸消防署と歌津出張所に各 1 隊を常駐させ、急増する救急需要に対応した。

出動する応援救急隊

気仙沼海上保安署の巡視艇と連携した救急搬送

離島の大島からの救急事案には、当消防本部の高速消防救急艇が被災したため、気仙沼海上保安署所有の巡視艇に救急隊員が乗船し、傷病者を搬送した。

電話回線が途絶していた発災当初は、病院への搬送連絡はできなかったため、地域の拠点病院もしくは仮設の診療所へ直接搬送した。

管外医療機関への多数傷病者搬送依頼もあり、当消防本部の救急車だけでは対応しきれなかったため、緊急消防援助隊、宮城県広域消防相互応援隊の救急車や防災ヘリコプターで搬送を行った。

発災初期（発災～1 週間）においては、通院や服薬ができないことから慢性疾患（透析）の憎悪などによる病態が多かった。2～3 週間期においては、呼吸苦や息切れ、発熱など、土埃の吸い込みなどに起因する肺炎といった呼吸器系の疾患が多かった。

救急出動状況（平成 23 年 3 月 11 日～平成 23 年 3 月 31 日）

部　隊	出動件数（件）	搬送人員（人）
広域消防	419	407
緊援隊	161	174
相互応援協定	67	72
合　計	647	653

(4)その他の活動について

津波に伴い発生した現場活動は多岐に及んだ。特に、捜索活動では、94 名の遺体を発見している。その他にも、避難所等への給水活動や、被災した病院の清掃活動を消防職員と消防団が協力して実施している。

その他の出動状況（平成 23 年 3 月 11 日～平成 23 年 4 月 30 日）

災害事案	件　数	隊　数	活動延べ人員（人）
捜　索	33	66	184
危険排除	35	36	112
その他	9	13	44
合　計	77	115	340

※その他は、避難誘導・警察支援・怪煙調査等である。

被災したミニローリー

被災した病院の清掃活動

大型漁船の燃料が漏れ、警戒区域を設定する消防隊

民家周辺に流出したドラム缶

10　消防団の活動状況

管内には気仙沼市と南三陸町に消防団があり、それぞれの地元を守るため、昼夜を問わず活動した。

管内の消防団の車両等配置状況

団　名	分団数	団員数	ポンプ車	積載車	小型ポンプ	屯所数
気仙沼市	13	860 名	13 台(2)	63 台(10)	23 台(9)	95(36)
南三陸町	12	575 名	3 台(3)	45 台(12)	7 台(7)	55(35)

※( )数は被災数

気仙沼市消防団は発災後、気仙沼・本吉広域防災センター内に消防団指揮本部を設置し、消防本部と情報の共有、連携した活動を展開し、地震・津波災害時の活動フローに基づき、広報活動、水門門扉の閉鎖活動、避難誘導活動を行った。津波襲来後は、不眠不休で火災防ぎょ活動、避難誘導活動、救助活動、集中捜索活動、遺体搬送活動、公共施設清掃作業と多岐に及び、発災後の一ヶ月間で延べ約 17,900 名が活動に従事した。連絡情報収集体制では、3 台の赤バイク隊を編成し、瓦礫の堆積により道路が遮断された状況下で、その機動力を生かし情報収集、各分団との連絡調整に威力を発揮した。また、気仙沼市本吉町の 4 個分団では、配置されていた消防団無線機により情報連絡を行い、携帯電話が不通の状態で非常に有効であった。

南三陸町消防団は震災後、同様に事前命令により、広報活動、水門門扉の閉鎖活動、避難誘導活動を行った。津波襲来後、災害対策本部に消防団幹部が詰め、各関係機関と連携し、人命救助活動、避難所開設、火災防ぎょ活動、遺体捜索活動、支援物資搬送、燃料輸送等の活動に従事した。南三陸町消防団は津波により、団員、施設等に甚大な被害を受け、現有消防力が低下した状況の中で、全精力を傾注し発災後の一ヶ月間で延べ約 5,000 名が活動に従事した。

気仙沼市消防団の活動状況

南三陸町消防団の活動状況

第5章　各署所の活動

地震直後から災害が管内各所で発生した。特に津波襲来後は火災と救助事案が多発したため、各署所ではその対応に追われることとなった。

1　気仙沼消防署

職員数　38 名　　当日の体制　15 名

消防ポンプ自動車	2 台	化学車	1 台
小型動力ポンプ付水槽車	1 台	梯子車（30m級）	1 台
照明電源車	1 台	救助工作車	1 台
水難救助車	1 台	高規格救急車	1 台
指令車	1 台	資器材搬送車	1 台
合計	11 台		

地震発生直後、職員は自身の安全確保を行いながら車庫内車両の確認と、防災センターで救急講習を受講していた看護学生の安全確保と避難誘導を行った。

2 階事務室は書類等が散乱し、車庫内の車両は大きく揺れたが異状は認められなかった。

書類等が散乱している事務室内

気仙沼方面指揮所

当直隊は、直ちに津波監視及び警戒広報を実施するため 2 隊に分かれて指定された方面に出動したが、階上方面出動隊は津波と遭遇したため、退避場所として指定されていた階上中学校に一旦退避した。しかし、体育館に収容しきれない程避難民等が殺到しその対応に追われた。

参集した職員は、津波襲来直後から多発した救助要請により活動を開始したが、浸水と瓦礫や車両が折り重なる状態であり、現場への到達を阻まれ活動は困難を極めた。

また、数日間は大規模な街区火災等が各所で発生したが、災害が多発し部隊が分散したことによる人員不足と津波襲来による活動中断を余儀なくされた。

さらに、防災センターが避難所になっていたこともあり、避難民と車両が集中したため、駐車場が混乱した。

防災センター車庫内の避難状況

防災センター3 階多目的ホールの避難状況

防災センター駐車場の状況

2 気仙沼消防署南町出張所

職員数　14 名　　当日の体制　5 名
消防ポンプ自動車　2 台　　高規格救急車　1 台
合計　　3 台

南町出張所では、地震発生時ポンプ隊が外勤中であったが、全車両を笹ヶ陣高台に移動し方面指揮所を開設した。直ちに沿岸部（南町海岸～魚市場方面　魚町～港町）の避難誘導及び警戒広報を開始、参集した職員と合流後 2 隊に分かれて実施し、津波到達 10 分前には方面指揮所と陣山高台に分散して避難し津波監視を行った。

陣山に避難した救急隊は、津波襲来後に方面指揮所と合流を図ったが、瓦礫等により道路が寸断され移動できなかったため、陣山と太田地内に避難所を開設し避難者の対応に当たった。その後は、津波監視と共に、鹿折街区で発生した火災の監視と本部への状況報告を行った。

翌 12 日、安波山林道から滝の入を通過し方面指揮所に合流、以降は気仙沼署隊増強のため全隊が防災センターに移動し災害活動を行った。

庁舎北側の被災状況

庁舎南側の被災状況

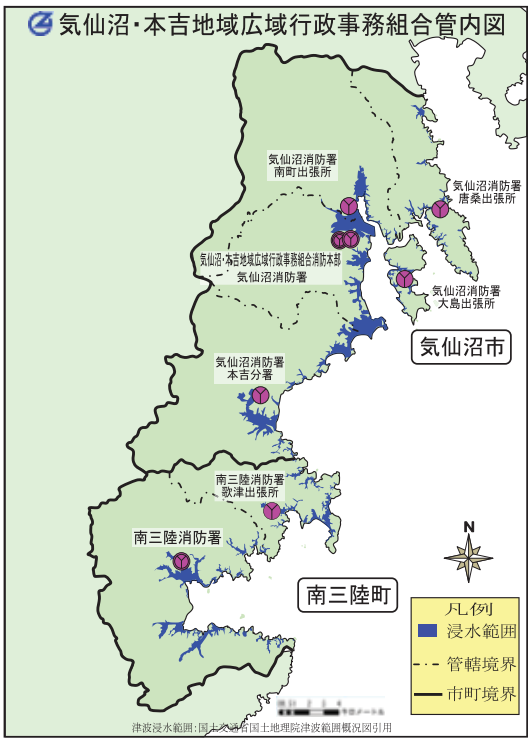
１階車庫内の被災状況

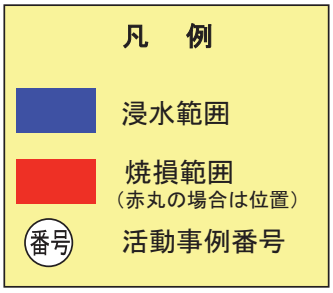
仮眠室の被災状況

２階事務室の被災状況

気仙沼地区
活動状況図

（気仙沼消防署及び南町出張所管轄）





※　火災について詳細は、第３章7「火災発生状況」参照。

※　浸水範囲は大阪市立大学原口強氏の現地調査報告から引用。

火災1
朝日町地内
建物火災
3/11 15 時 30 分頃発生
焼損棟数 1 棟
建物焼損面積 2,695 ㎡
（焼失面積 2,367 ㎡）

火災2
鹿折地区
その他火災
3/11 15 時 40 分頃発生
焼失面積 101,973 ㎡

この部分は著作権

火災7
仲町二丁目・弁天町
一丁目地内その他火災
3/11 16 時 00 分頃発生
焼失面積 4,489 ㎡

火災8
内の脇二丁目地内
建物火災
3/11 16 時 00 分頃発生
焼損棟数 1 棟
建物焼損面積 485 ㎡
焼失面積（建物除く）815 ㎡
焼失面積 1,149 ㎡

この部分は著作権の都合上、掲載できません

の都合上、掲載できません。

火災9

気仙沼湾火災

3/11 17 時 30 分頃発生
焼損棟数 62 棟
焼損船舶数不明
焼失面積 103,199 ㎡
林野焼損面積 22,212a

※焼損棟物件・面積等は海上火災に起因した全ての火災（大島・唐桑出張所管内分含む）の合計。
詳細は第 3 章7「火災発生状況」参照。

火災11

内の脇一丁目地内
その他火災

3/14 22 時 00 分頃発生
焼損棟数 62 棟
焼失面積 36,444 ㎡

津波直後の水道事業所前歩道橋付近の状況

水道事業所前歩道橋付近の延焼状況

①　鹿折地区その他火災（火災２）

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市中みなと町・西みなと町・東みなと町地内</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成23年3月11日　15時40分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>曇り</td><td>1.7℃</td><td>89.6%</td><td>北西</td><td>1.3m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">津波襲来被害により何らかの原因で３地点より出火し、津波により流出した建物及び瓦礫等を焼損したもの。3月23日鎮火。
建物　295棟　29,828㎡（震災前棟数）
建物を含む焼失面積　101,973㎡</td></tr>
<tr><td rowspan="8">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知15時58分　放水開始20時24分
鎮圧（3月12日）13時22分　鎮火（3月23日）7時48分</td></tr>
<tr><td rowspan="7">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>本部ポンプ１</td><td>4</td><td>19:39</td><td>19:56</td><td>12日 1:20</td><td>他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>気仙沼タンク１</td><td>3</td><td>20:01</td><td>20:12</td><td>12日 1:54</td><td>12日 3:55</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ１</td><td>4</td><td>20:01</td><td>20:12</td><td colspan="2">12日他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>南町ポンプ１</td><td>3</td><td>20:04</td><td>20:19</td><td>12日 1:21</td><td>他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>気仙沼化学１</td><td>4</td><td>20:29</td><td>20:51</td><td>12日19:06</td><td>12日19:23</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ２</td><td>4</td><td>21:16</td><td>21:27</td><td colspan="2">12日他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">緊急消防援助隊　東京都隊　陸上隊　159隊　728名
航空隊　3隊　21名
緊急消防援助隊　新潟県隊　2隊　8名</td></tr>
</table>

気仙沼市陣山にて津波監視及び警戒広報を実施していた南町出張所救急隊が、中みなと町方面の火災を確認、更に夜間となり鹿折方面の上空全体が赤くなっているのを確認し状況を無線報告したが、南町出張所ポンプ隊は気仙沼小学校で津波監視及び救助活動を行っていたため、気仙沼消防署ポンプ隊が現場に向かった。現場到着時、街区全体に火災が拡大し大規模火災の様相を呈しており、明らかに消防力は劣勢であり、延焼防止を主眼とする防ぎょ活動とした。市街地の北側鹿折バイパス高架橋付近及び東側変電所付近、さらに西側ＪＲ大船渡線を防火線として防ぎょ活動を実施するが、数回にわたる津波襲来により隊員が高台へ退避したため、消火を中断せざるを得なかった。

翌12日から、総務省消防庁長官の出動指示により緊急消防援助隊である東京都隊162隊749名、新潟県隊2隊8名の応援を受け陸上と空中から（大型ヘリコプターで3回）消火活動を行う。

津波による多量の瓦礫に阻まれる中、13日間にわたり消火活動と再燃警戒を続けた。

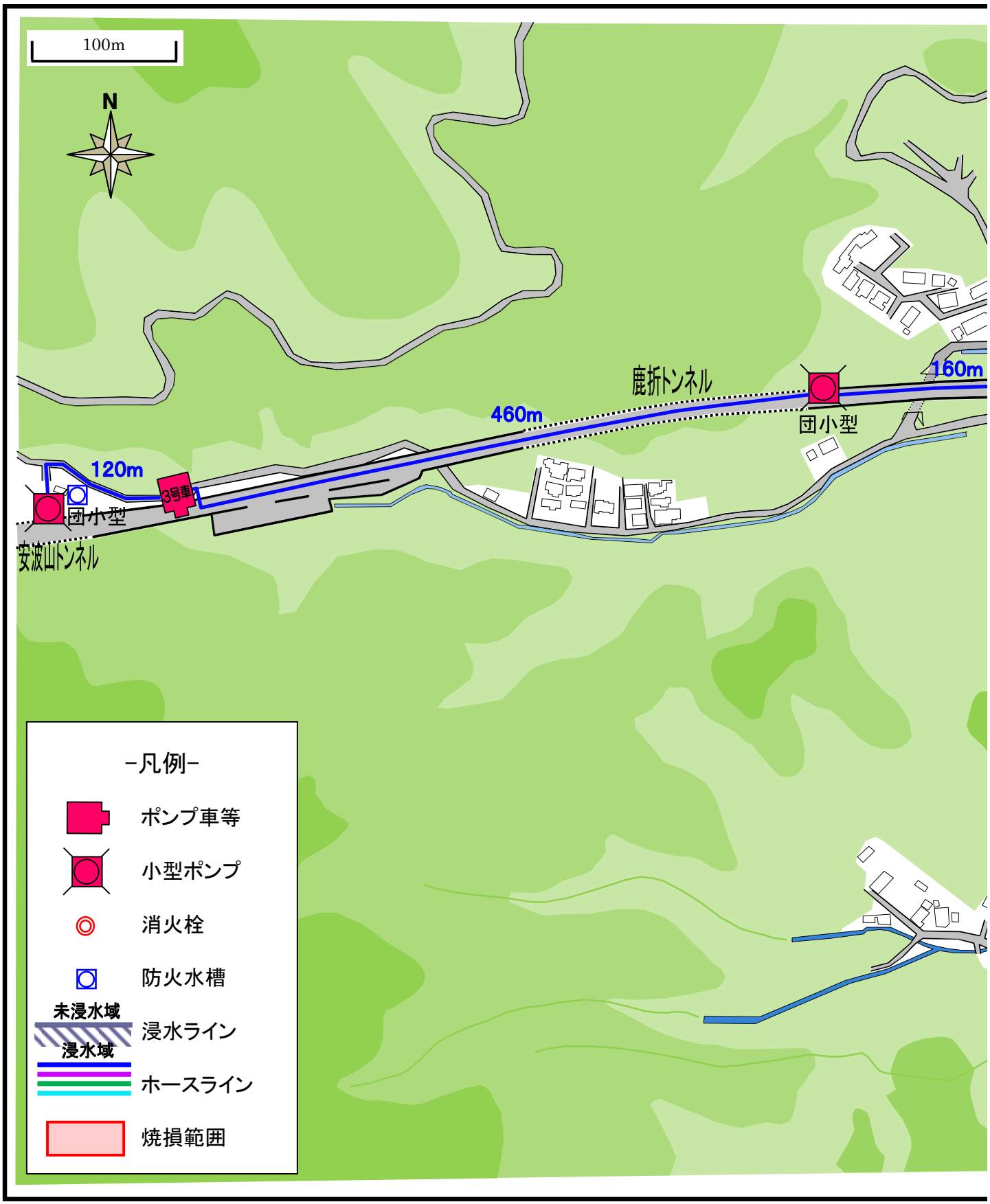
東北電力鹿折変電所付近の火災防ぎょ活動

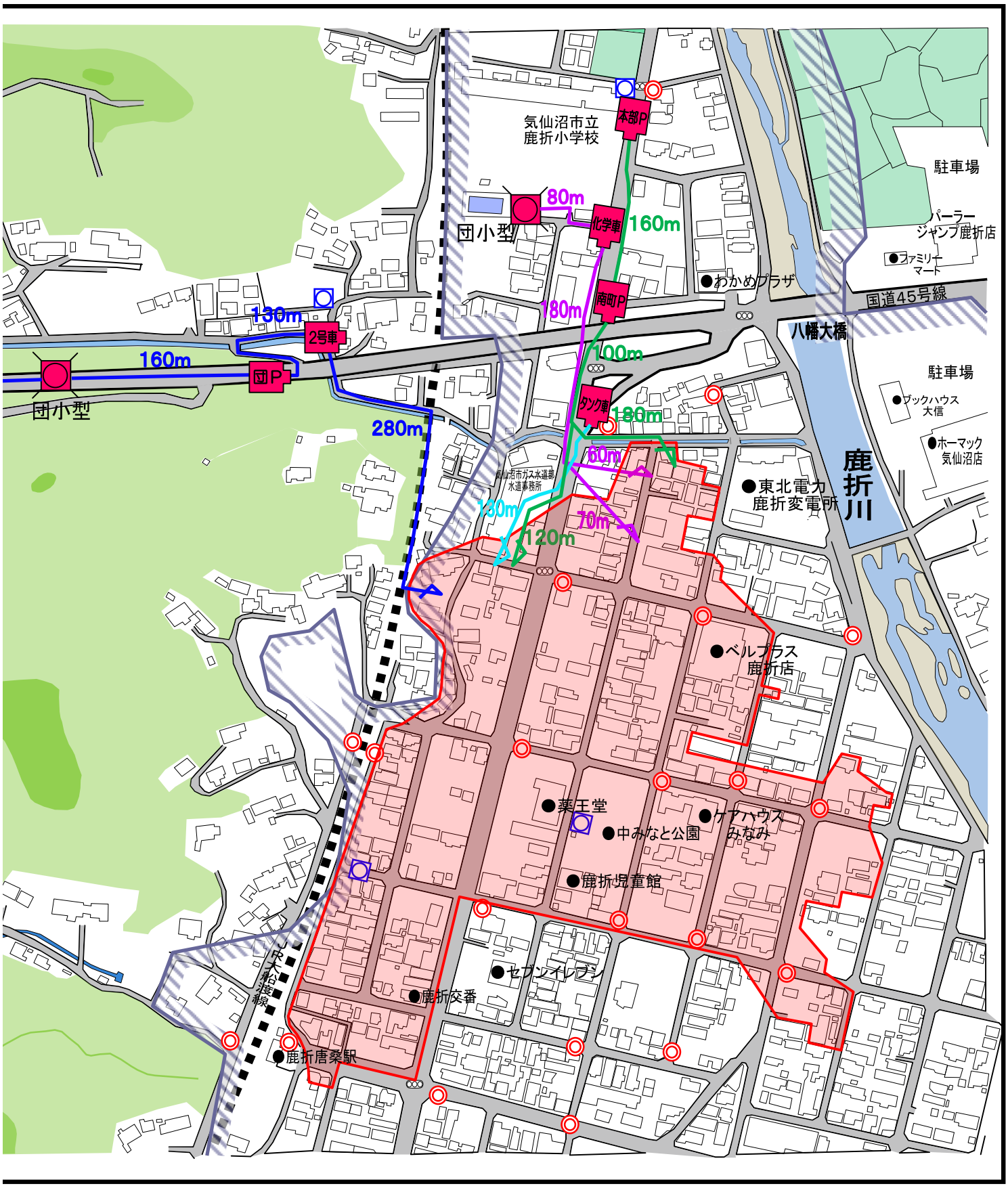
鹿折地区の延焼状況

鹿折地区の延焼状況

12 日朝、鹿折高架橋に集結した緊急消防援助隊

① 鹿折地区その他火災防ぎょ図




気仙沼市立
鹿折小学校
本部P
駐車場
80m
化学車
160m
団小型
パーラー
ジャンプ鹿折店
ファミリー
マート
わかめプラザ
国道45号線
180m
南町P
130m
2号車
八幡大橋
160m
団P
100m
駐車場
団小型
タンク車
180m
ブックハウス
大信
280m
ホーマック
気仙沼店
60m
気仙沼市ガス水道部
水道事務所
東北電力
鹿折変電所
鹿折川
130m
70m
120m
ベルプラス
鹿折店
薬王堂
ケアハウス
みなみ
中みなと公園
鹿折児童館
JR大船渡線
セブンイレブン
鹿折交番
鹿折唐桑駅

②　鹿折地区その他火災現場における救助

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市中みなと町地内</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成23年3月11日　15時36分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象
（救出時）</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>－1.0℃</td><td>71.7%</td><td>西北西</td><td>1.5m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">火災現場で要救助者１名が手を振り助けを求めている。（火災防ぎょ中の消防団からの情報）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5">覚知（3月12日）6:20　　救出開始6:22　　救出完了6:50</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼化学１</td><td>6</td><td>6:20</td><td>6:22</td><td colspan="2">他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>気仙沼救急１</td><td>3</td><td>7:02</td><td>7:21</td><td>7:47</td><td>7:53</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">気仙沼市消防団</td></tr>
</table>

鹿折地区その他火災防ぎょ中、活動中の消防団員から手を振り助けを求めている人がいるとの情報を得た。現場付近に移動し、西みなと町地内の住宅敷地内から現場を確認すると、東側へ約100mの位置、目標となる中みなと町地内のドラッグストアからは北側へ約80mの地点に要救助者を確認した。

現場は、焼損した建物及び瓦礫が燻っており、ドラッグストアは時折爆発を伴い延焼中であった。

周囲は煙で視界が不良であり、幾度か要救助者の位置を見失う状況だったが、隊員3名で燻っている瓦礫の上を進行し、要救助者と接触した。要救助者は裸足であったため隊員1名が背負い、先行の隊員は退避ルートの足場を確保しながら誘導した。火災範囲外まで搬送し、さらに後続の隊員及び消防団員とともに津波浸水区域外の安全な高台まで搬送した後、救急隊と協力して救急車内へ収容した。

現場付近の状況

③　多数避難困難者の救助

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市錦町二丁目地内</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成23年3月11日　15時36分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象
（救出時）</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>3.8℃</td><td>40.1%</td><td>北西</td><td>2.3m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">津波により介護老人保健施設リバーサイド春圃、気仙沼市総合市民福祉センターやすらぎに要救助者が取り残されている。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5">覚知（3月12日）11:00　　救出開始 12:00　　救出完了 16:28</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼化学1</td><td>9</td><td>11:05</td><td>11:50</td><td>16:30</td><td>他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">東京消防庁ハイパーレスキュー隊　8名
気仙沼市消防団　２０名</td></tr>
</table>

津波の浸水を受け、介護老人保健施設リバーサイド春圃には施設職員も含め 152 名が、また気仙沼市総合市民福祉センターやすらぎには 85 名が取り残されていた。両施設とも歩行可能な入所者等は施設職員に誘導を依頼し、津波浸水区域外の国道 45 号線バイパス上まで避難するように指示した。

自力歩行困難な介護老人保健施設リバーサイド春圃の入所者 50 名は、消防隊、消防団、施設職員が施設内の車椅子を使用して国道 45 号線バイパス上まで搬送した。救助活動のさなか、東京消防庁ハイパーレスキュー隊 8 名が応援に駆け付け、協力して救助活動にあたった。

介護老人保健施設リバーサイド春圃の救助完了後、気仙沼市総合市民福祉センターやすらぎ内に取り残されていた自力歩行困難者 26 名も同様に、各機関協力して車椅子及び布担架で国道 45 号線バイパス上まで搬送した。

津波により被災した「リバーサイド春圃」の状況

④　津波浸水区域における救助１

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市南郷地内　一般住宅</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成23年3月11日　15時36分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>5.4℃</td><td>32.9%</td><td>西</td><td>1.5m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">津波により孤立した。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知（3月12日）17:34　　救出開始 17:40　　救出完了 18:30</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ2</td><td>3</td><td>17:35</td><td>17:40</td><td>18:30</td><td>18:38</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">なし</td></tr>
</table>

津波により自宅玄関付近に瓦礫が堆積し、現場周囲は約 1mの冠水のため自力避難ができずに孤立した。現着時は女性２名が２階に避難していたが、自力で１階に移動し、出口付近から１名ずつバスケットストレッチャーを曳航し搬送した。

なお、バスケットストレッチャーの浮力を上げるため、底部に断熱材（スタイロフォーム）を装着した。瓦礫と冠水により足元が確認できない状態であったため、歩行時の安全管理に留意し活動した。

バスケットストレッチャーに浮力体を取り付けた状況

要救助者の搬送状況

⑤　津波浸水区域における長距離の徒歩による救助

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="4">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市川口町一丁目地内　工場</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成23年3月11日　15時36分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象
（救出時）</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>17.4℃</td><td>27.8%</td><td>西</td><td>6.1m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">津波による浸水と瓦礫により、工場２階の事務室に３名が取り残された。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知（3月12日）19:00頃　　救出開始（3月14日）13:30
救出完了 15:15</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ２</td><td>4</td><td>13日8:05</td><td>13:00</td><td>14:50</td><td>17:15</td></tr>
<tr><td>気仙沼救助２</td><td>8</td><td>14日9:00</td><td>13:11</td><td>15:30</td><td>17:10</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">愛知県防災航空隊
気仙沼市消防団　２名</td></tr>
</table>

覚知翌日の3月13日に出動したが、瓦礫の中で長距離の徒歩での移動による搬送困難のため、現場を確認した後、搬送した舟形担架及び二連梯子、ロープ等の資器材を現場2階の事務所に置き、一旦帰署する。

現場は活動の拠点となった南郷地内の前進指揮所から直線距離で約1,300mの位置であったが、津波による浸水で瓦礫が堆積していたため歩行可能なルートを選定しながらの迂回を余儀なくされた。

3月14日、出動車両を気仙沼大橋付近に駐車し、隊員8名及び消防団員2名で大川左岸を徒歩で移動する。移動途中の曙橋付近にて、本部から津波襲来による退避命令を受信したが、付近に高台や3階以上の建物はなく、近隣の2階建て建物の屋根上に一次退避する。約1時間後、退避命令が解除され目標の工場に向けさらに進行し、現場の工場が確認された付近で2回目の退避命令を受信した。急きょ全員を工場2階に避難させ現場に到着した。

要救助者の状態を考慮し、ヘリコプターの要請を行うが強風等で調整が難航する。調整中の時間を利用し、要救助者搬送のため、津波により破壊された階段及び工場内に瓦礫を利用して搬送ルートを確保した。2時間後に愛知県防災ヘリコプターが飛来、ホイスト降下場所を工場1階の屋根とし、屋根上の瓦礫撤去後誘導員を配置、隊員2名がホイスト降下し要救助者3名をピックアップし救出した。

ヘリコプターによる救出完了後、前日搬送した資機材を携行しながら、徒歩にて大橋付近に到着し帰署した。

津波襲来情報に退避する消防隊

ヘリコプターによる救出状況

⑥　津波浸水区域における火災（火災７）

<table>
<tr><td rowspan="4">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市仲町二丁目・弁天町一丁目地内</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成 23 年3月 11 日　16 時 00 分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>曇り</td><td>2.4℃</td><td>64.4%</td><td>北西</td><td>1.3m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">津波襲来により何らかの原因で出火し、上記発生場所地内の建物及び津波により流出し瓦礫となった建物等を焼損したもの。火災発生当初は津波により対応できず、３月 13 日～14 日に消火活動を実施した。
焼損物件　建物 11 棟　1,016 ㎡（震災前棟数）
焼失面積　4,489 ㎡</td></tr>
<tr><td rowspan="8">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知 16:26　放水開始（３月 13 日）15:00
鎮圧（３月 13 日）17:13　鎮火（３月 14 日）16:17</td></tr>
<tr><td rowspan="7">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ１</td><td>4</td><td>13日14:26</td><td>14:38</td><td>17:13</td><td>他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>南町ポンプ１</td><td>4</td><td>13日14:30</td><td>14:30</td><td colspan="2">他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ２</td><td>4</td><td>13日14:30</td><td>14:43</td><td colspan="2">他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>南町ポンプ１</td><td>4</td><td>14日13:43</td><td>14:31</td><td>17:08</td><td>他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>気仙沼化学１</td><td>4</td><td>14日13:49</td><td>14:35</td><td>17:20</td><td>18:17</td></tr>
<tr><td>南町ポンプ２</td><td>4</td><td>14日14:00</td><td>14:46</td><td>16:55</td><td>18:33</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">緊急消防援助隊　東京都隊　３隊　12 名
気仙沼市消防団　10 名</td></tr>
</table>

地震発生当日、気仙沼消防署南町出張所ポンプ隊により火災を覚知したが、大津波警報継続中の浸水区域であり、消火活動を行うことができなかった。

現場周囲は津波襲来による多量の瓦礫に埋め尽くされた状態で、直近の水利は使用不可能であったため、3 月 13 日～14 日に気仙沼魚市場前岸壁から取水し消火活動を実施した。

12 日朝の火災現場の様子

鎮圧直後の火災現場

火災現場焼損状況

⑦　気仙沼市沿岸部及び林野火災（火災９－１）

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市二ノ浜～浪板地内　沿岸部及び林野</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成２３年3月１１日　１７時３０分頃</td></tr>
<tr><td>気　　象
（3月14日覚知時）</td><td>天候
晴れ</td><td>気温
８℃</td><td>湿度
50%</td><td>風向
無風状態</td><td>風速
0m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">気仙沼市二ノ浜地内の造船所から約１００m西側海上で何らかの原因で出火、津波により流出した養殖イカダ、建物等の瓦礫、船舶、石油タンクから漏洩した石油等に着火した漂流物が押し寄せた津波に乗って二ノ浜・小々汐地区の海岸線から商港岸壁、魚市場側の西側海岸線に沿って内湾を通り、東側の大浦・小々汐地区を対流してきた漂流物が、浸水と西からの風の影響もあり、防波堤を越えて住宅地に入り込み、浪板・大浦・小々汐地区の海沿いに堆積していた瓦礫に延焼、飛び火により大浦・小々汐地区の山林に延焼拡大。３月 11 日～18 日にかけて燃え続けた火災である。
焼損物件　建物 188 棟（震災前棟数）
建物その他の焼失面積　91,154 ㎡
林野の焼損面積　10,512a
なおこの火災は、火の付いた漂流物により弁天町、仲町、さらには大島の山林、唐桑地区津本地内の山林等にも延焼、拡大したものである。</td></tr>
<tr><td rowspan="7">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知 17:34　放水開始（３月 14 日）23:24　鎮圧（３月 17 日）10:40
鎮火（３月 18 日）15:40</td></tr>
<tr><td rowspan="6">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼化学１</td><td rowspan="5">大浦にて
消火活動
１６名</td><td>21:39</td><td rowspan="5">大浦漁港
到着
22:34</td><td rowspan="5">大浦漁港
より引揚
15 日
2:08</td><td>22:23</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ２</td><td>21:39</td><td>22:23</td></tr>
<tr><td>気仙沼救助１</td><td>21:39</td><td>22:23</td></tr>
<tr><td>気仙沼指揮１</td><td>21:39</td><td>22:23</td></tr>
<tr><td>気仙沼搬送１</td><td>21:39</td><td>15 日 3:59</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">海上保安庁　５名
① ３月 14 日 海上保安庁に対し、車両進入不可能のため港町岸壁から大浦漁港まで小型船舶による人員及び資器材の輸送を依頼した。小型ポンプ２台を消防団より借用。
② ３月 18 日 海上保安庁に対し、小々汐地区沿岸部の再燃（瓦礫炎上）火災を巡視艇により消火するよう依頼した。</td></tr>
</table>

二ノ浜付近海上火災を 119 番通報により覚知するが、津波のため対応できなかった。3 月 14 日、一関市消防本部からの転送による携帯電話からの 119 番により、避難所となっている住宅に山林から火が近づいているとの通報を受け出動した。

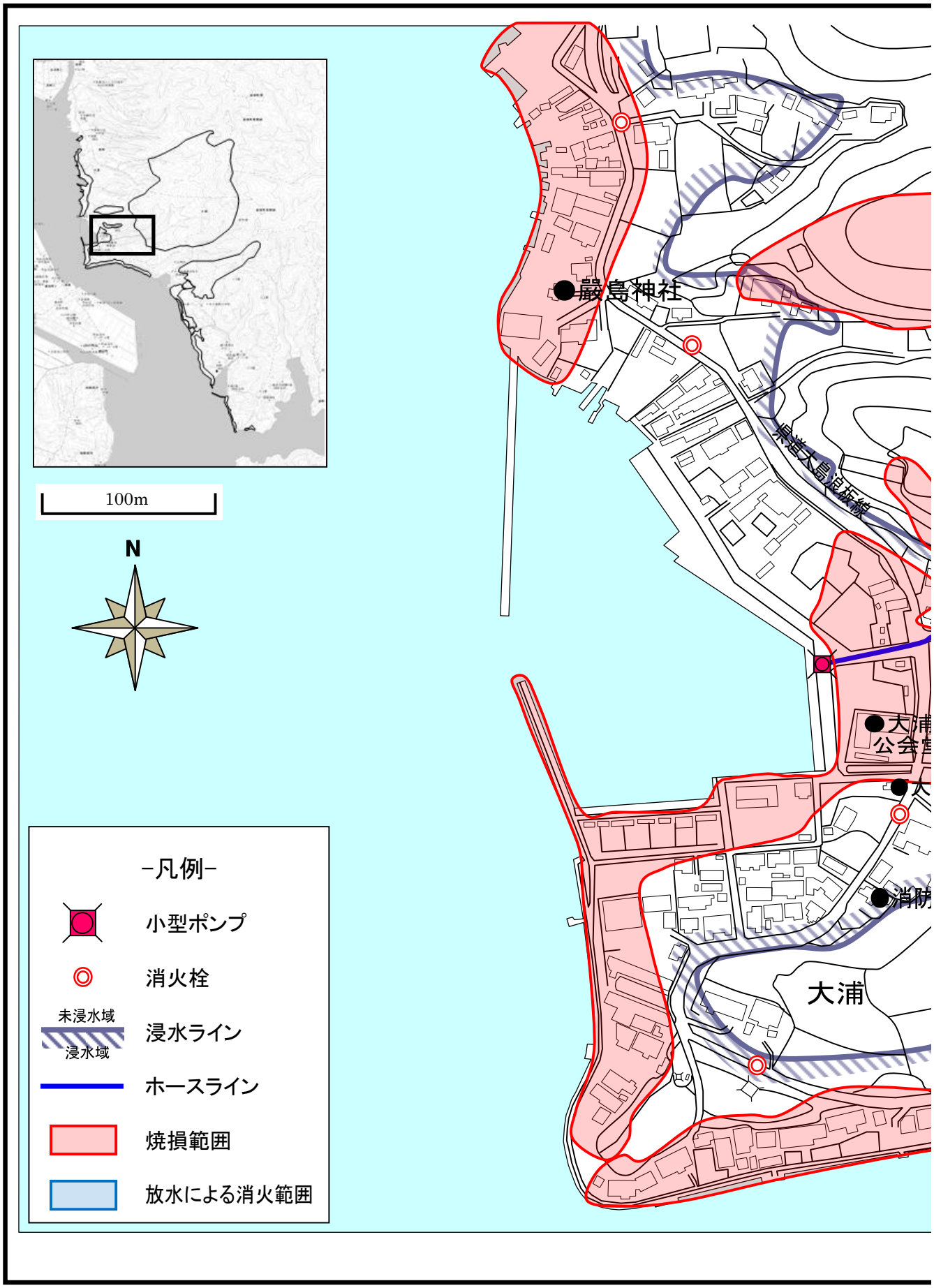
瓦礫等により消防車両が進入できないため、海上保安庁の小型船舶により、港町岸壁から大浦漁港まで隊員及び資器材を輸送、大浦漁港から小型ポンプ 2 台による中継を行い、避難所となっている住宅の北側及び西側の林野火災からの住宅への延焼阻止にあたった。

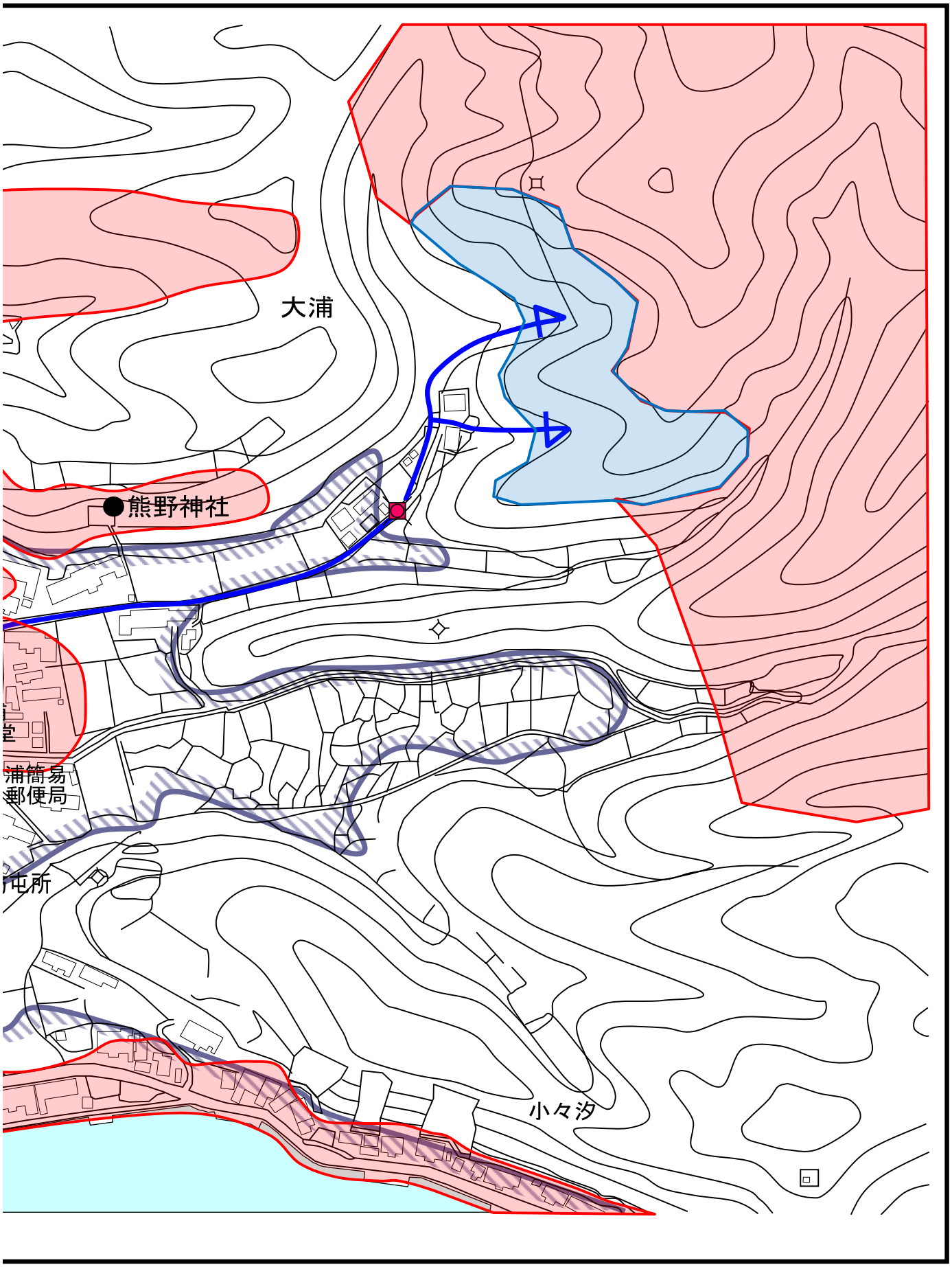
3 月 18 日、朝日町地内の火災対応中に小々汐地区沿岸部の瓦礫が再燃炎上したため、海上保安庁巡視艇による放水を実施後、隊員 4 名が乗船し現場へ向かい鎮火を確認した。

市立病院から見た気仙沼湾の状況

瓦礫が漂う大川と炎上する気仙沼湾

⑦気仙沼市沿岸部及び林野火災防ぎょ図




大浦
熊野神社
浦簡易
郵便局
小々汐

⑧　内の脇地区火災（火災 11）

<table>
<tr><td rowspan="4">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市内の脇一丁目地内</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成 23 年3月 14 日　22 時 00 分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>8℃</td><td>57%</td><td>北北西</td><td>2.0m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">内の脇一丁目地内の、津波被害により流出した建物及び瓦礫等の数箇所から何らかの原因で出火し広範囲にわたって延焼拡大。津波により流出した建物及び瓦礫、車両等を焼損した火災である。
焼損物件　　建物 62 棟　（震災前棟数 74 棟）
焼損建物部分含む焼失面積　36,444 ㎡</td></tr>
<tr><td rowspan="13">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知 22:34　　放水開始（3月 15 日）1:05
鎮圧（3月 15 日）20:20　　鎮火（3月２５日）15:00</td></tr>
<tr><td rowspan="11">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ２</td><td>5</td><td>23:01</td><td>23:10</td><td>15日10:00</td><td>10:15</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ１</td><td>5</td><td>23:42</td><td>23:52</td><td>15日 8:18</td><td>8:33</td></tr>
<tr><td>南町ポンプ１</td><td>5</td><td>23:42</td><td>23:52</td><td>15日10:00</td><td>10:15</td></tr>
<tr><td>気仙沼指揮１</td><td>2</td><td>15日 0:10</td><td>0:20</td><td>7:15</td><td>7:34</td></tr>
<tr><td>本部指揮２</td><td>3</td><td>15日 0:14</td><td>0:25</td><td>5:50</td><td>6:03</td></tr>
<tr><td>気仙沼救助２</td><td>5</td><td>15日 0:28</td><td>0:37</td><td>5:30</td><td>5:45</td></tr>
<tr><td>本部ポンプ１</td><td>4</td><td>15日 5:00</td><td>5:11</td><td>16日11:19</td><td>12:50</td></tr>
<tr><td>気仙沼化学１</td><td>5</td><td>15日 5:00</td><td>5:10</td><td>16日 0:08</td><td>0:20</td></tr>
<tr><td>気仙沼搬送１</td><td>2</td><td>15日 5:00</td><td>5:15</td><td>7:35</td><td>7:49</td></tr>
<tr><td colspan="6">３月 14 日～20 日　出動延べ人員　75 名</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">緊急消防援助隊　東京都隊　７隊　34 名
（3月 14 日～3 月 25 日）</td></tr>
</table>

対岸で別件火災活動中の消防隊から、内の脇地区で出火しているのを確認し本部に状況報告した。消防隊現着時、数箇所からの出火を確認したが、道路及び街区は多量の瓦礫で埋め尽くされ、現場への接近が困難であり、直近の水利が使用不能のため、河川、海からの遠距離送水を余儀なくされた。

水利部署位置から現場までは周囲一面が瓦礫であり、折り重なった不安定な木材の上や堆積した泥、倒壊した家屋の屋根上をホース延長しなければならない場所もあったことから、放水までに時間を要した。

3 月 15 日の早朝に応援隊が到着し、南北の防火線を大川とJR気仙沼線線路に設定、西側は木造アパートの一角に設定し消火活動にあたった。

3 月 15 日 20 時 20 分鎮圧状態。緊急消防援助隊東京都隊の応援を受け、陸上及び空中からの消火を実施し、3 月 25 日 15 時 00 分鎮火となった。

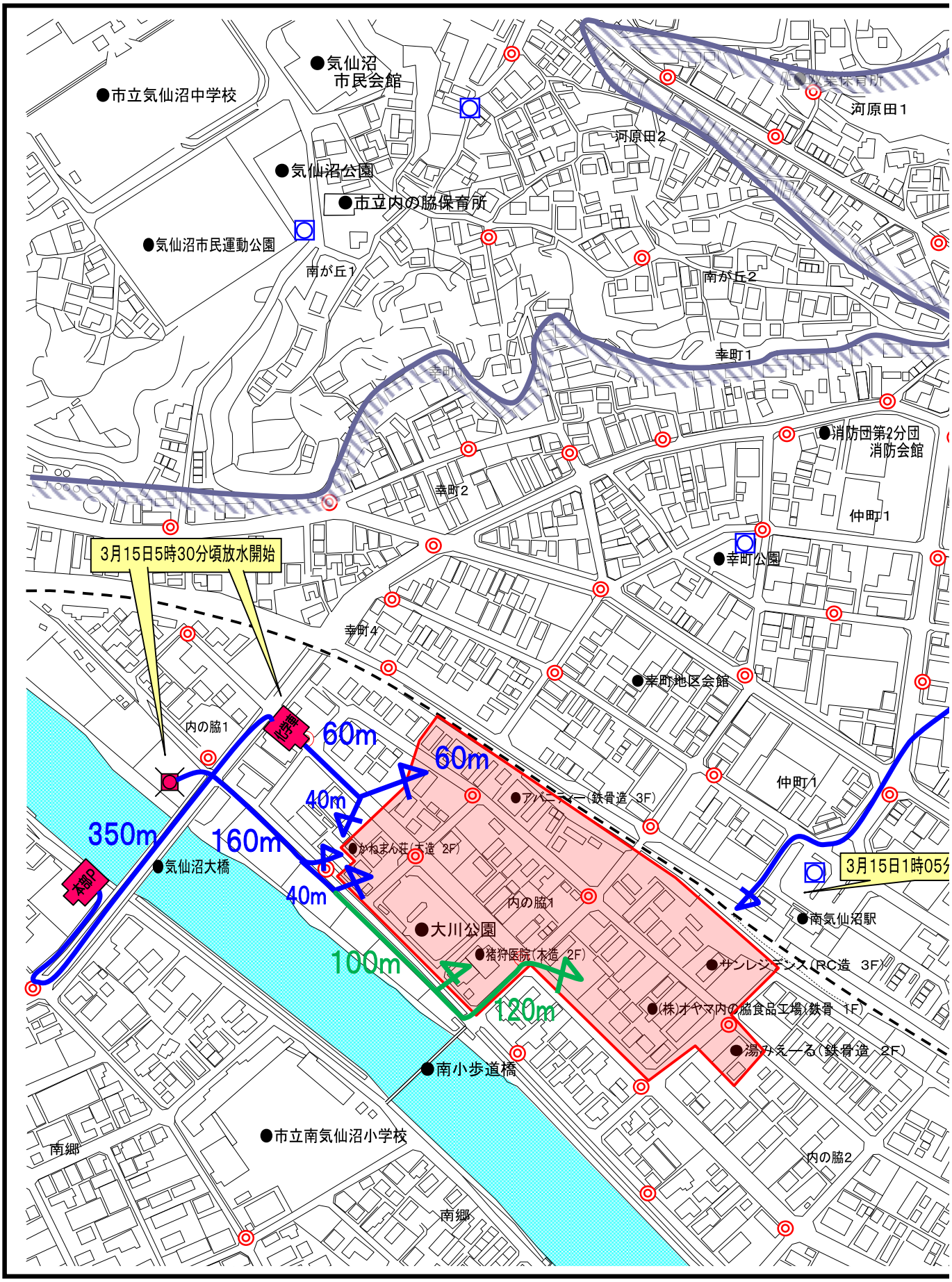
神山橋付近から見た火災現場の状況

安波山から見た火災現場の状況

火災現場の状況

西側木造アパート付近の消火活動

⑧ 内の脇一丁目地内その他火災防ぎょ図



-凡例-
ポンプ車等
小型ポンプ
消火栓
防火水槽
未浸水域
浸水ライン
浸水域
ホースライン
転戦ホースライン
焼損範囲
100m
N
2号車
3号車
南P
80m
80m
740m
L=37
●気仙沼市魚市場
●けせんぬま
海鮮市場海の市
魚市場前4
●気仙沼市魚市場前郵便局
仲町大通
仲町2
弁天町1
弁天町1
●ライオン南駅前店
●一景島公園
弁天町2
放水開始
潮見町
●南運動広場
●市立気仙沼
中央公民館
●気仙沼市
勤労青少年ホーム
●気仙沼中央公民館
体育館
潮見町2

⑨津波浸水区域における冷蔵工場火災（火災１）

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市朝日町地内</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成23年3月11日　15時30分頃</td></tr>
<tr><td>気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>（3月18日覚知時）</td><td>晴れ</td><td>0.4℃</td><td>63.0%</td><td>北西</td><td>4.1m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">津波襲来により何らかの原因で出火、冷蔵工場を焼損したもの。出火当初は津波のため消火活動ができなかったものの火災は沈静化していた。通報を受けた18日から21日まで消火活動を実施した。
焼損物件　冷蔵工場　焼失面積　2,367㎡
焼損面積　2,695㎡</td></tr>
<tr><td rowspan="11">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知15:30　放水開始（3月18日）12:44　鎮圧15:00
鎮火（3月21日）15:30</td></tr>
<tr><td rowspan="9">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>南町ポンプ2</td><td>4</td><td>18日 9:42</td><td>10:27</td><td>18:00</td><td>18:40</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ2</td><td>3</td><td>18日 11:49</td><td>12:45</td><td>18:00</td><td>18:40</td></tr>
<tr><td>気仙沼搬送1</td><td>1</td><td>18日 11:49</td><td>12:24</td><td>18:00</td><td>18:40</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ1</td><td>4</td><td>19日 15:32</td><td>16:15</td><td>17:44</td><td>18:00</td></tr>
<tr><td>気仙沼搬送1</td><td>2</td><td>20日 11:14</td><td>11:30</td><td>16:10</td><td>16:22</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ1</td><td>4</td><td>20日 11:34</td><td>11:52</td><td>13:40</td><td>13:55</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ2</td><td>3</td><td>20日 15:31</td><td>15:39</td><td>18:25</td><td>18:37</td></tr>
<tr><td>本部ポンプ1</td><td>4</td><td>21日 7:55</td><td>8:20</td><td>11:50</td><td>12:06</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">海上保安庁</td></tr>
</table>

津波襲来時に出火、その後沈静化し小康状態を保っていたが、3月18日になり冷蔵工場付近に煙が見えるとの通報があり、陸上からの進入が困難なため、海上から海上保安庁巡視艇で出動した。

現場到着時、冷蔵工場内では堆積物が燻っており、津波により破壊された壁の僅かな隙間から内部に進入し、海上保安庁巡視艇の放水銃からホース一線を延長して消火した。大量放水により15時00分ほぼ鎮火の状態なるも白煙が立ち上っている状態であった。他への延焼の恐れはなく、重機による壁体の破壊を実施しない限り完全消火は困難と判断し現場を引き揚げた。

翌3月19日に建物排気ダクトからの白煙が多くみられたため、3月20日まで継続して放水を実施し、3月21日に重機で壁体を破壊しての消火活動により、15時30分鎮火となった。

冷蔵工場焼損状況

冷蔵工場内部の消火活動

⑩　ツイッター情報による救助１

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="4">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市幸町四丁目地内　工場</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成 23 年3月 11 日　15 時 36 分頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象
（出動時）</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>曇り</td><td>9.8℃</td><td>47.9%</td><td>南</td><td>1.2m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">工場内に要救助者がいる模様とのツイッター情報による１１９番通報。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5">覚知（3 月 20 日）13:37</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>気仙沼ポンプ１</td><td>3</td><td>13:39</td><td>13:55</td><td>14:41</td><td>15:08</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">なし</td></tr>
</table>

現場は、津波により流出した家屋及び瓦礫等が堆積し、車両での進入は不可能であったため徒歩で現場に向かった。

現着時、工場 1 階には数台の車両が流されており、車両内を検索したところ 14 時 00 分、40 代と思われる男性の遺体を発見。さらに 14 時 10 分、隣接する住居 2 階部分に 20～30 代の女性の遺体を発見した。

ツイッター情報による出動のうち生存者の救出事例はなく、遺体の発見につながったのもこの 1 件のみで、これ以外の事案については出動し調査するものの通報内容の事実が存在していなかった。これは、寄せられた情報はほとんどが津波によって孤立したという内容であったことから、実際にツイッターに投稿した時点ではそのような状態にあったが、消防が覚知し現場を確認するまでに自力で避難したことが考えられる。

現場付近の状況

3 気仙沼消防署本吉分署

職員数	19 名	当日の体制	6 名
消防ポンプ自動車	1 台	水槽付ポンプ車	1 台
高規格救急車	1 台	査察車	1 台
合計	4 台		

本吉分署は、火災予防運動行事のため非番員を招集し、一人暮らし高齢者宅の防火指導を実施中であった。

地震発生と同時に町内の警戒広報と避難誘導に出動し、国道走行中の車両誘導、土砂崩れ箇所の調査に出動したが、その後は救急対応に追われた。

参集した職員は、火災等の災害活動に出動したが、津波により国道が 12 箇所寸断されたため現場活動を困難なものにした。

津波により落橋した小泉大橋とＪＲ鉄橋

震災直後から消防団は各地域の避難所を中心に活動し、浸水地域に近いほとんどの避難所に配置された。消防団無線を 6 年前から活用しており、団本部と相互に情報交換・指示等が明確に可能で、分署隊（分署にも 1 台配置）及び支所との連携がスムーズに行われ、救急・捜索活動に有用であった。

国道が寸断され通信手段がない状態で、現場到着までの所要時間が通常より数倍掛かる場合でも、情報の確認等が正確・最短に実施することができた。また、震災直後から避難所又はその地区からの救急要請に対しても、詳細で正確な情報等が得られ的確な救急活動が実施できた。そして、広範囲な捜索等の現場活動では、自衛隊・緊急消防援助隊（消防団又は分署隊が随行）との活動が消防団無線により、災害対策本部本吉支部を中心に運用され円

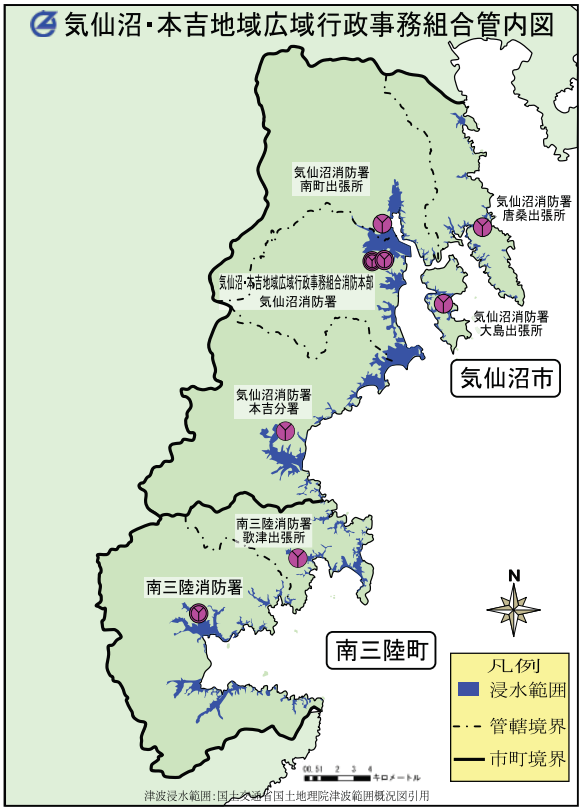
滑な連絡体制を保つことができた。

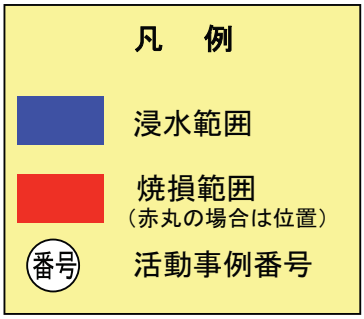
気仙沼市本吉総合支所内　災害対策本部本吉支部の状況

気仙沼市本吉総合体育館で支援物資の仕分けを行う婦人防火クラブ

気仙沼市本吉地区
活 動 状 況 図

（気仙沼消防署本吉分署管轄）





※　火災について詳細は、第３章7「火災発生状況」参照。

※　浸水範囲は大阪市立大学原口強氏の現地調査報告から引用。

この部分は

著作権の都合上、掲載できません。

①　行方不明者捜索

<table>
<tr><td rowspan="5">活動状況</td><td rowspan="3">活動場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市本吉町・気仙沼市御伊勢浜海岸の津波浸水区域内</td></tr>
<tr><td>活動年月日</td><td colspan="5">平成２３年3月１３日～4月2日（１９日間実施）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">行方不明者捜索活動</td></tr>
<tr><td rowspan="4">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>ポンプ車・救急車等
延べ46台</td><td>延べ
119名</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">緊急消防援助隊　山梨県隊
緊急消防援助隊　香川県隊
気仙沼市消防団
気仙沼市本吉総合支所</td></tr>
</table>

気仙沼市本吉町と気仙沼市御伊勢浜海岸付近の津波浸水区域内をローラー検索し、行方不明者の捜索を行った。

3 月 13 日　津波で被災した車両 2 台から各 1 遺体を収容した。

3 月 15 日　緊急消防援助隊山梨県隊と合同で捜索実施。大谷地内にて 2 遺体、津谷明戸地内にて 2 遺体を発見する。

3 月 16 日　緊急消防援助隊山梨県隊と合同で捜索実施。JR気仙沼線大谷駅線路脇で、瓦礫の下から 1 遺体、付近の海岸から 1 遺体を収容した。さらに被災した軽自動車内から 2 遺体を収容した。

3 月 17 日　緊急消防援助隊香川県隊が加わり捜索を実施した。

3 月 22 日　緊急消防援助隊山梨県隊と合同で捜索実施。二十一浜地内にて 1 遺体を収容した。

3 月 23 日　緊急消防援助隊山梨県隊と合同で捜索実施。蔵内地内海岸テトラポットに挟まれた 1 遺体を発見し収容した。

捜索において、活動隊に同行した消防団員が活用していた消防団無線は、広範囲の捜索でも各隊で情報の共有を図ることができ非常に有効であった。

行方不明者捜索活動の状況

②　被災病院からの救急搬送

<table>
<tr><td rowspan="5">活動状況</td><td rowspan="4">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市立本吉病院</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成２３年３月１７日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">気仙沼市立本吉病院入院患者１９名を、岩手県立千厩病院へ転院搬送。</td></tr>
<tr><td rowspan="7">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td rowspan="5">出動車両</td><td>車両名</td><td>台数</td><td>覚知</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>緊急消防援助隊山梨県隊</td><td>3</td><td>12:18</td><td colspan="2">搬送２回</td><td>16:40</td></tr>
<tr><td>一関市消防本部救急隊</td><td>2</td><td>12:18</td><td colspan="2">搬送２回</td><td>17:30</td></tr>
<tr><td>徳州会病院救急車</td><td>1</td><td>12:18</td><td colspan="3">記録無し</td></tr>
<tr><td>気仙沼救急１</td><td>1</td><td>12:18</td><td>13:24</td><td>16:20</td><td>他事案へ出場</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">緊急消防援助隊　山梨県隊　３台
一関市消防本部救急隊　２台
徳州会病院ＴＭＡＴ　１台</td></tr>
</table>

津波により被災した気仙沼市立本吉病院の入院患者 19 名を、徳州会病院医師により搬送優先順を決定し、各救急隊により岩手県立千厩病院までの転院搬送を実施した。

被災した気仙沼市立本吉病院

③　被災車両からの出火（火災 13）

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発 生 場 所</td><td colspan="5">気仙沼市本吉町津谷明戸　気仙沼市立本吉病院敷地内</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年 3 月 30 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>8℃</td><td>25%</td><td>西</td><td>1.0m/ s</td></tr>
<tr><td>災 害 概 要</td><td colspan="6">気仙沼市立本吉病院敷地内の医師住宅と介護センターの間に、津波により流されて放置されていた車両のエンジンルームから出火し、車両を焼損したもの。</td></tr>
<tr><td rowspan="7">出動状況</td><td>時 間 経 過</td><td colspan="6">覚知 8:51　　鎮火 9:02</td></tr>
<tr><td rowspan="5">出 動 車 両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>本吉水槽 1</td><td>3</td><td>8:53</td><td>8:54</td><td>9:11</td><td>10:05</td></tr>
<tr><td>本吉ポンプ 1</td><td>2</td><td>8:53</td><td>8:55</td><td>9:11</td><td>9:13</td></tr>
<tr><td>本吉救急 1</td><td>3</td><td>8:53</td><td>8:53</td><td>9:11</td><td>9:13</td></tr>
<tr><td>本吉指揮 1</td><td>1</td><td>8:53</td><td>8:54</td><td>9:11</td><td>9:13</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">気仙沼市消防団
気仙沼警察署</td></tr>
</table>

津波により多数の車両が被災したが、浸水の影響によるものと思われるライトの点灯、ハザードランプの点滅、クラクションの鳴動等が多くみられた。また、これらの車両の中には避難をあきらめて路肩に駐車したものもあると思われ、津波に押し流されたままの状態で長期間にわたり放置される状態であった。このため、車両のバッテリーの短絡等が原因による火災の発生が懸念されていた。

被災車両の焼損状況

4 気仙沼消防署唐桑出張所

職員数	15 名	当日の体制	6 名
消防ポンプ自動車	1 台	高規格救急車	1 台
多機能型広報車	1 台		
合計	3 台		

唐桑出張所は、地震発生直後に停電となったため、発電機を使用し無線及び同報無線広報の電源を確保して同報無線による広報を実施し、ポンプ車隊が只越～崎浜方面、救急車隊は宿浦～鮪立高台での避難誘導と警戒広報を実施した。

津波襲来後、気仙沼方面から大量の黒煙が流れて来ており、テレビ情報で気仙沼市が、津波で湾内に流出した油による火災で、鹿折地区全域が延焼拡大中との情報を得たため、参集していた団員約 15 名と津波への対応と火災の延焼阻止に当たることとした。

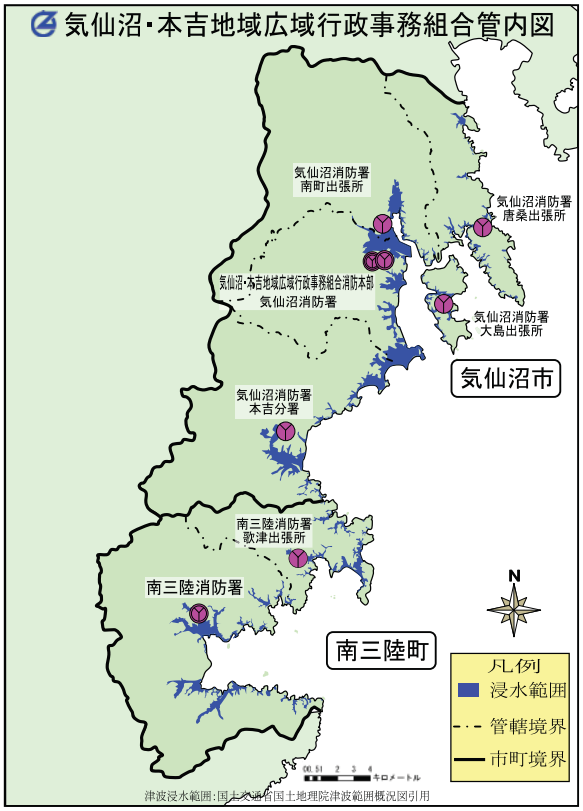
情報収集については気仙沼市唐桑総合支所が隣接しているため比較的容易であったが、当日は状況を把握できず、夕方に駆けつけた団員から舞根、只越地区の道路が寸断され孤立状態であり、沿岸付近が壊滅状態であるとの情報を得た。

津波襲来直後から救助要請が連続したが、津波による浸水や瓦礫等により進入できず監視に止めざるを得なかった。また、進入可能な事案についても山間部を通過しての移動となるため、長時間を要することとなった。

津波直後の鮪立漁港

気仙沼市唐桑地区
活 動 状 況 図

（気仙沼消防署唐桑出張所管轄）



凡　例

浸水範囲

焼損範囲
（赤丸の場合は位置）

番号　活動事例番号

※　火災について詳細は、第３章7「火災発生状況」参照。

※　浸水範囲は大阪市立大学原口強氏の現地調査報告から引用。

この

載で

部分は著作権の都合上、掲

きません。

①　津波浸水区域における救助２

災害状況	発生場所等	発生場所	気仙沼市唐桑町小鯖地内　一般住宅				
		発生年月日	平成 23 年３月 11 日				
		気　　象	天候	気温	湿度	風向	風速
			雪	5℃	32%	-	0.6m/s
	災害概要	津波により住宅１階部分が損壊し、２階に３名が取り残されている。自力歩行困難者１名あり。					
出動状況	時間経過						
	出動車両	車両名	人員	出動	現着	引揚	帰署
		唐桑救急１	3	17:46	18:01	19:30	19:42
		唐桑ポンプ１	3	18:45	19:00	19:30	19:38
	関係機関等	気仙沼警察署　唐桑駐在所					

現場付近に先着した救急隊が通報者と接触し、要救助者 3 名のうち 1 名が自力歩行困難者であることを確認した。ポンプ車隊と合流し現場へ向かうが、大津波警報継続中の津波浸水区域のため津波監視員を 1 名配置した。夜間でもあり、現場周囲に散乱していた瓦礫及び漁業用ロープを除去しながらの活動となった。

住宅 2 階には二連梯子を使用して進入し、自力歩行困難な要救助者 1 名を背負い救出。自力歩行可能な残りの 2 名を介添えにより救出した。救急車内へ収容したが、この時点で市内医療機関への道路は寸断されていたため、避難所となっている唐桑第二体育館へ搬送した。

②孤立被災者の救助１

災害状況	発生場所等	発生場所	唐桑町東舞根地内　山林				
		発生年月日	平成 23 年3月 12 日				
		気　　象	天候	気温	湿度	風向	風速
			晴れ	1℃	65%	-	0m/s
	災害概要	唐桑町東舞根地内の山林に、自力歩行困難者１名が避難できずにいる。					
出動状況	時間経過						
	出動車両	車両名	人員	出動	現着	引揚	帰署
		唐桑ポンプ１	3	7:40	8:10	11:51	11:58
		唐桑救急１	3	11:05	11:10	12:55	13:25
	関係機関等	なし					

現場出動経路上の唐桑町浦地区が、津波により消防車両が進入できないため徒歩にて現場に向かった。唐桑町東舞根地内山林に孤立している 6 名を発見し、水山養殖場へ避難させた。更に唐桑町西舞根地内に負傷者がいるとの情報により、付近民の車で移動し負傷者に接触した。観察の結果、肋骨骨折及び腹腔内出血の疑いがあり、物干し竿と毛布による応急担架を作成し、他の避難者 7 名とともに搬送した。救急隊と接触した後、負傷者をバックボードに固定し車内収容した。他の避難者は住民の車で避難所に避難した。

③　孤立被災者の救助２

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">唐桑町西舞根地内</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年3月 13 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>14℃</td><td>50%</td><td>－</td><td>1.6m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">道路の崩落により、西舞根地内において被災者が孤立状態にあり、その中の１名が具合を悪くしたとの情報。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>唐桑搬送１</td><td>4</td><td>9:55</td><td>10:05</td><td>15:05</td><td>15:10</td></tr>
<tr><td>唐桑救急１</td><td>3</td><td>14:05</td><td>14:15</td><td>15:05</td><td>15:10</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">気仙沼市消防団
気仙沼市唐桑総合支所</td></tr>
</table>

現場出動経路上の唐桑町浦地区が、津波により消防車両が進入できないため徒歩にて現場に向かった。現場には被災者約 20 名がおり、うち 4 名が重傷であった。崩落した道路を迂回して林野を搬送することは極めて困難と判断し、付近民所有の船舶の提供を受け重傷者 4 名を浦漁港まで海上搬送した。さらに西舞根地内の別の場所に被災者が孤立しているとの情報を得て転戦。孤立していた被災者のうち 2 名を消防団員に陸上搬送するよう依頼し、他 18 名を海上搬送した。

被災者を船舶で搬送している状況

④　気仙沼市沿岸部火災の漂流物による林野火災（火災９－９）

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">唐桑町津本地区沿岸部</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年３月 14 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>19℃</td><td>30%</td><td>－</td><td>0m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">消防団の駆け込みで津本地内海岸の漂流物が燃えているとの情報により出動。
焼損面積　0a（0.25a）松林の下草　漂流物 20m×５m</td></tr>
<tr><td rowspan="4">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5">覚知 14:15　　鎮火 16:55</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>唐桑ポンプ１</td><td>3</td><td>15:29</td><td>15:36</td><td>17:42</td><td>17:52</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">気仙沼市消防団</td></tr>
</table>

警戒中の消防団が海岸付近から白煙が上がっているのを発見し、消防団員が気仙沼市唐桑総合支所へ連絡するとともに小型ポンプを海岸に配置し、気仙沼湾から漂着した火の付いた漂流物及び山林への延焼阻止にあたった。

気仙沼市唐桑総合支所より連絡を受け、気仙沼消防署唐桑出張所からポンプ車隊が出動。現着時、海岸で漂流物が燃えており、山林へ延焼拡大の恐れがあった。ポンプ車隊は、消防団と協力して小型ポンプ 2 台で海から取水し消火活動を行った。

燃えながら漂着する瓦礫の状況

5 気仙沼消防署大島出張所

職員数	16 名	当日の体制	5 名
消防ポンプ自動車	1 台	高速消防救急艇	1 隻
救急自動車	1 台	広報連絡車	1 台
合計	4 台		

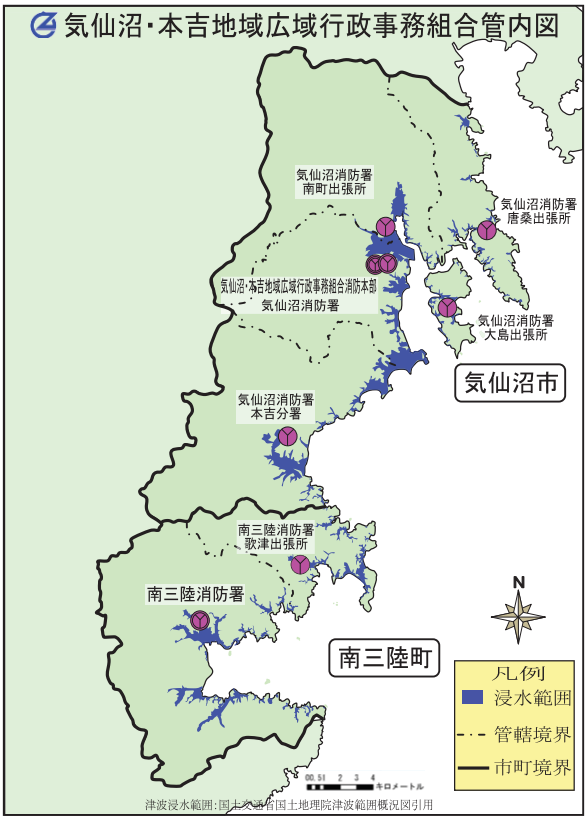
大島出張所は、地震発生後、庁舎と人員の確認を行いポンプ車隊と救急隊は島内警戒広報と避難誘導を行い、津波襲来 10 分前には旅館黒潮付近の高台へ避難し海面監視を行った。その後は大島小学校や開発センター等の避難所に移動し避難状況の確認を行った。

12 日には亀山の林野火災が発生し 6 日間燃え続けたが、広範囲であっただけでなく、傾斜や樹木による足場の悪さに加え、当日 5 名体制の当直員と、非番で島内にいた 2 名の計 7 名で活動するほかなく(応援隊 7 名が駆け付けたのは 13 日の 13 時 30 分)、交代要員の望めない中での、隊員の肉体的疲労・精神的疲労が極限状態となり判断力や防ぎょ活動に支障をきたした。

延焼を続ける大島亀山

気仙沼市大島地区
活 動 状 況 図

（気仙沼消防署大島出張所管轄）



凡　例

浸水範囲

焼損範囲
（赤丸の場合は位置）

番号　活動事例番号

※　火災について詳細は、第３章7「火災発生状況」参照。

※　浸水範囲は大阪市立大学原口強氏の現地調査報告から引用。

この部分は著作

作権の都合上、掲載できません。

火災9-7
大島瀬戸番所根
灯台付近船舶火災
3/11（時間不明）発生
焼損船舶数1隻

火災9-8
大島地区
林野火災
3/12（時間不明）発生
焼損棟数1棟
林野焼損面積 11,700a
建物焼損面積 103 ㎡
焼失面積 103 ㎡

①　気仙沼市大島亀山林野火災（火災９－８）

<table>
<tr><td rowspan="4">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">亀山地内</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成23年３月12日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
<tr><td></td><td>災害概要</td><td colspan="6">外浜地内より炎が見えるとの通報があり、出動したもの。
焼損面積　11,700a
亀山リフト乗降小屋　１棟　103㎡</td></tr>
<tr><td rowspan="4">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知22:58　　放水23:40　　鎮圧（3月16日）17:27
鎮火（3月17日）11:03</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>大島ポンプ１</td><td>延べ39名</td><td colspan="4">延べ８回出動</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">自衛隊
海上保安庁
緊急消防援助隊　東京都隊　航空隊
気仙沼市消防団</td></tr>
</table>

気仙沼湾内で発生した海上火災により、燃えた瓦礫が潮流に乗り離島の大島に漂着した。

また、沿岸の進入困難な場所からの延焼拡大もあり、火元の特定も困難であった。

現場となった亀山は水利が乏しかったが、水利のない場所には建設会社の協力により水産加工用の水槽（約1,500ℓ）を小型クレーン付トラックで運んで設置し、コンクリートミキサー車（2t）に海水を入れ、ピストン輸送して給水しながら消火活動を行った。

火災は 6 日間にわたり燃え続け、亀山の半分以上を焼失しながら民家のある亀山のふもとまで迫ってきたが、300 人を超える住民やボランティア等の協力もあり、民家への延焼は阻止した。

大島浦の浜に打ち上げられたフェリー

気仙沼湾から燃えたまま漂着した瓦礫

焼損した亀山リフト乗降小屋

①　気仙沼市大島亀山
林野火災防ぎょ図

時間経過

①３月１２日２３時００分　放水
②３月１３日１５時３０分　予備散水
③３月１３日１８時３０分　予備散水
④３月１３日１９時００分　放水
⑤３月１４日　０時００分　防火線設定
⑥３月１４日　７時００分　防火線設定
⑦３月１４日１４時３０分　予備散水・防火帯設定
警戒筒先配備
⑧３月１４日１４時４０分　住民による可燃物や
被災車両の撤去
⑨３月１４日１７時３０分　空中消火
⑩３月１４日２０時００分　放水、防火線設定
⑪３月１５日　１時３０分　放水（資材置き場）
⑫３月１５日　２時００分　放水、背負い式消火水
嚢による消火
⑬３月１５日　２時３０分　放水、自衛隊による防
火線設定・背負い式消火
水嚢による消火
⑭３月１５日１４時００分　空中消火
⑮３月１５日１５時３０分　放水
⑯３月１６日１３時００分　放水
３月１７日１１時０３分　鎮火（大島内の火災に
ついて）

−凡例−

- ポンプ車等
- 小型ポンプ
- 防火水槽
- ホースライン
- 焼損範囲
- 浸水範囲
- 防火線

この部分は

は著作権の都合上、掲載できません。

②　被災車両からの救助

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">気仙沼市田尻地内　飲食店</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年 3 月 11 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">倒壊建物の２階に２名の生存者がいるとの指令により救助出動した。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5">覚知（3月 13 日）9時 55 分</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>大島ポンプ 1</td><td>4</td><td>9:55</td><td>9:57</td><td>10:50</td><td>11:00</td></tr>
<tr><td>大島救急 1</td><td>2</td><td>9:55</td><td>10:00</td><td>10:11</td><td>10:16</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">気仙沼警察署　大島駐在所</td></tr>
</table>

倒壊建物の 2 階に生存者ありとの指令で出動したが、現着すると付近住民がワゴン車を指差しており、車内を確認すると後部座席で 1 名の男性がCPA状態で横たわっていたため搬出し、救急隊に引き継いだ。

なお、付近住民より津波が来る前にもう 1 名乗車していたとの目撃情報を入手し、ワゴン車の付近を検索したが発見できなかった。

ワゴン車の周囲は倒壊建物が多数あり、周囲に呼びかけたが反応が無く、倒壊した建物及び瓦礫の下に進入しての検索は危険と判断し、もう 1 名の検索を断念した。

③　ツイッター情報による救助２

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">磯草地内　一般住宅</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年 3 月 16 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">県より、成人 1 名と子供 2 名が建物の２階で手を振って助けを求めているとの通報（ツイッターによる書き込み）があり救急・救助出動したもの。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5">覚知（3 月 16 日）20 時 48 分</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>大島ポンプ 1</td><td>6</td><td>20:49</td><td>20:55</td><td>21:09</td><td>21:19</td></tr>
<tr><td>大島救急 1</td><td>4</td><td>20:49</td><td>20:55</td><td>21:09</td><td>21:19</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">なし</td></tr>
</table>

津波浸水区域であったが、津波襲来後からの道路状況調査により、車両進入が可能であることを把握していた。

通報内容から、建物 2 階からの救出であり、負傷者の状況を考慮し、救急隊と連携出動した。

現着し、建物 2 階を検索するも人影は見えず、周囲に呼びかけするも反応がないため、1 階と 2 階に分かれて各部屋内を検索したが要救助者の発見には至らなかった。

6 南三陸消防署

南三陸消防署	29 名	当日の体制	10 名
消防ポンプ自動車	1 台	水槽付ポンプ車	1 台
高規格救急車	1 台	指令車	1 台
資機材搬送車	1 台		
合計	5 台		

今回の震災で南三陸消防署は壊滅的な被害を受けた。

当日、当直員は地震発生直後に沿岸部の情報収集、部隊を再編成し広報及び避難誘導に出向した。残留した職員と参集した職員9名が、路上での避難誘導中や庁舎内で津波の犠牲となった。

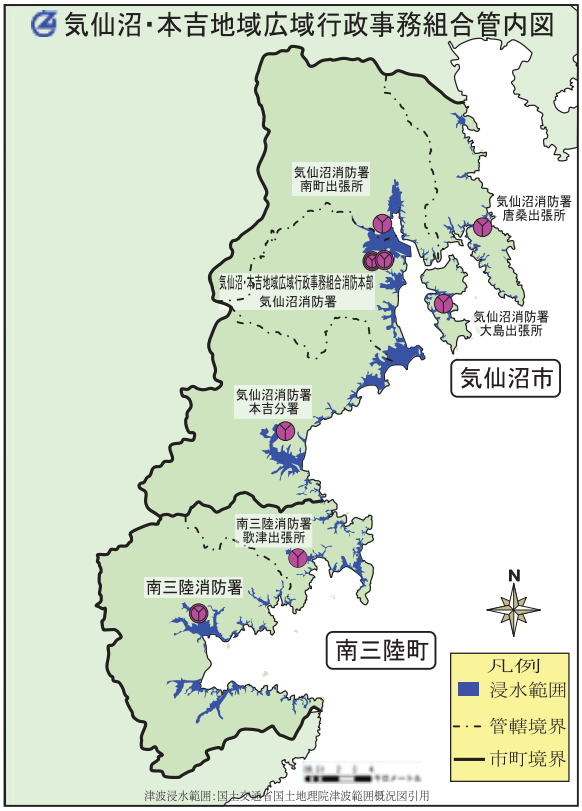
また、庁舎が被災したため本部との通信手段が限られて情報が不足した。また多くの資機材が流失したため、現場活動に支障をきたすこととなり、絶え間なく続く災害への対応は困難を極め、体力、気力の限界を超えた活動となった。

テントを利用した待機室

仮設の事務室内

南三陸町志津川地区
活 動 状 況 図

（南三陸消防署管轄）



凡　例

浸水範囲

焼損範囲
（赤丸の場合は位置）

番号　活動事例番号

※　火災について詳細は、第３章7「火災発生状況」参照。

※　浸水範囲は大阪市立大学原口強氏の現地調査報告から引用。

この部分は著作

権の都合上、掲載できません。

火災3
志津川字天王山
地内その他火災
3/11（時間不明）発生
焼失面積 44,000 ㎡

火災4
戸倉字藤浜地内
車両火災
3/11（時間不明）発生
車両1台焼損

火災5
戸倉字小涼地内
その他火災
3/11（時間不明）発生
焼失面積 61 ㎡
被災車両 5 台焼損

火災6
志津川字下保呂毛
地内その他火災
3/11 15 時（分不明）発生
焼失面積 680 ㎡
林野焼損面積 1a

①　その他火災（火災３）

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">南三陸町志津川字天王山地内</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年３月 11 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ後曇り一時雪</td><td>－</td><td>－</td><td>西</td><td>－</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">天王山地内その他火災。
焼損棟数　67 棟（震災前棟数）
焼損面積　5,082 ㎡
焼失面積　44,000 ㎡</td></tr>
<tr><td rowspan="9">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知 15 時 50 分　鎮火（3月 14 日）15 時 15 分</td></tr>
<tr><td rowspan="7">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>南三陸水槽 1</td><td>3</td><td>15:50</td><td>15:53</td><td>17:30</td><td>17:40</td></tr>
<tr><td>南三陸救急 1</td><td>3</td><td>15:50</td><td>15:53</td><td>17:30</td><td>17:40</td></tr>
<tr><td>南三陸水槽 1</td><td>4</td><td>13日18:30</td><td>18:35</td><td>20:00</td><td>20:05</td></tr>
<tr><td>南三陸広報 1</td><td>4</td><td>13日18:30</td><td>18:35</td><td>20:00</td><td>20:05</td></tr>
<tr><td>南三陸水槽 1</td><td>3</td><td>14日</td><td colspan="3" rowspan="2">記録なし</td></tr>
<tr><td>南三陸救急 1</td><td>3</td><td>14日</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">南三陸町消防団　延べ 35 名</td></tr>
</table>

東北地方太平洋沖地震による津波警戒中、南三陸消防署歌津出張所非番員から南三陸町天王山地内にてその他火災発生の報を受け出動した。

水槽車隊は、沼田地内町道上の地下式消火栓に部署し、ホースカー及び背負い器にて 1 線延長し、警戒に当たった。一方、消防団員には、貯水槽への部署を依頼して警戒筒先の配備を行った。火災発生場所から避難所であるベイサイドアリーナや沼田地内の主要な対象物までは地形として谷を隔てており、距離もあったため延焼危険は少なく、少人数での困難な消火を避けてその人員を救助等に向けることとし、直接の消火活動を実施することはなかった。

この火災は 3 月 13 日に再燃し、新井田地内JR路線上の瓦礫が燃えているのを水槽車隊が発見した。この場所は、瓦礫を除去して通行可能となった国道 45 号線の直近のため、延焼拡大した場合に今後の災害対応に支障を来す恐れがあった。水槽車隊は直ちにJR路線上の瓦礫に放水するも、東側法面は消火不能につき、消防団員の出動及び隊員の増員要請を行った。消防団は沼田地内商工団地南入口付近防火水槽より、団積載車 3 台の中継で水槽車に送水、新井田川より小型ポンプ 2 台の中継で一線放水し、瓦礫を除去しながら延焼拡大を防止した。

この放水により鎮圧状態となったが、これ以上の接近消火は瓦礫により不可能であったため、瓦礫上にホースを残し引き揚げた。

さらに 14 日にも天王山地内において再燃し、消火活動を行っている。

②　津波による流出家屋からの救助

災害状況	発生場所等	発生場所	南三陸町志津川字廻館　旭ヶ丘団地上り口				
		発生年月日	平成 23 年３月 11 日				
		気　　象	天候	気温	湿度	風向	風速
			晴れ後雪	－	－	－	－
	災害概要	津波により数百メートル離れた場所から多数の家屋が押し流された。					
出動状況	時間経過						
	出動車両	車両名	人員	出動	現着	引揚	帰署
		なし	3	16 時頃	記録なし		
	関係機関等	なし					

現場は津波により多数の家屋が押し流されて来ており、住民が救助活動中であった。住民の救助協力者の安全を第 1 とし、付近の高台に津波監視員を配置した。流出家屋の瓦を剥がし、ノコギリ及びバールで屋根を破壊すると、60 代の夫婦が柱に押しつぶされた状態で挟まれており、約 1 時間後に救出した。

この救助活動中、別の場所に 60 才位の男性を発見。旭ヶ丘団地内の避難所に搬送した。

上記 3 名を救出後、サイレントタイムを作り呼びかけると救助を求める声があり、流出家屋 2 階から女性 2 名（90 才、60 才）を布団に包んで屋根を滑らせて救出した。

さらに流出家屋 2 階から手を振って救助を求める家族を発見し状況を確認したところ、靴が無く脱出することが出来ないため、旭ヶ丘団地から靴を 4 足手配し、家族 4 名が歩いて避難した。

この事案では、付近住民及び地元企業の職員らが積極的に救助活動に加わった。

③　孤立被災者の救助３

災害状況	発生場所等	発生場所	南三陸町志津川字新井田地内				
		発生年月日	平成 23 年3月 11 日				
		気　　象	天候	気温	湿度	風向	風速
			雪	－	－	－	－
	災害概要	新井田地内、取り残された多数の被災者が救助を求めている。					
出動状況	時間経過						
	出動車両	車両名	人員	出動	現着	引揚	帰署
		南三陸水槽１	4	17:00	17:00	20:00	20:05
		南三陸救急１	3	17:00	17:00	20:00	20:05
	関係機関等	なし					

要救助者は国道 45 号線上に架かる高さ 5mほどのJR気仙沼線陸橋から、トンネルを越えて西側に進入した線路上に複数名取り残されていた。外傷や低体温、慢性疾患の増悪等の傷病者が多く、高架の線路敷上の足場が非常に悪いことから、要救助者をはじめ隊員や協力を得た一般住民の安全を最優先に活動した。自力歩行可能者 4 名は隊員介添えで救出、自力困難者 2 名はスクープストレッチャーを使用して救出し搬送。その後、国道 45 号線に隣接する一般住宅 2 階で寝たきりの状態で被災した男性を救出し、避難所の南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに収容した。

④　高層建物に孤立した多数被災者の救助

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">南三陸町志津川字汐見町地内　高野会館　（耐火造４階建）</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年３月 11 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>曇り</td><td>3.1℃</td><td>59.8%</td><td>西北西</td><td>3.0m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="5">３月 12 日現在、高野会館屋上に避難者約 360 名が取り残されている。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="5">救助活動は１２日から実施</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>なし</td><td>2</td><td>13:00</td><td>13:30</td><td rowspan="2">13 日
10:00</td><td rowspan="2">11:00</td></tr>
<tr><td>なし</td><td>4</td><td>14:00</td><td>14:30</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">陸上自衛隊及び海上自衛隊（自力歩行困難者のヘリコプターによる救出）
南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナ待機職員</td></tr>
</table>

公立志津川病院や高野会館、町営松原住宅に多数の要救助者情報があり、隊員 2 名が先行調査出向。高野会館屋上の約 360 名について、自力歩行可能者を志津川中学校へ移動する連絡があり、誘導サポートに更に隊員 4 名が出向した。震災当日は町内老人クラブの催事があったため、高齢者が多く避難していた。

現着時、避難者は屋内階段を使用して移動を開始しており、歩行困難を訴える高齢者等約 50 名は、海上自衛隊ヘリコプターのホイストによる救出となり、隊員 6 名にて吊り上げの補助活動を実施したが、16 時過ぎになるとヘリコプターは帰投し、要救助者 27 名が取り残される状況となった。夜を越すため、災害対策本部に毛布の搬送を依頼、隊員 4 名も食糧調達に出向、要救助者に毛布と食糧を配給し、隊員 6 名は高野会館にて待機とした。

翌 3 月 13 日 7 時過ぎに、陸上自衛隊ヘリコプターが公立志津川病院での救出を開始したため、陸上自衛隊隊長に連絡を取り高野会館からの救出も依頼し、松原グランドへの通路確保作業、脱出補助活動を行い、3 度のヘリ離着陸により全要救助者の志津川中学校への移送を完了した。隊員 6 名は徒歩にて避難所である南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナへ引き揚げた。

高野会館全景

高野会館屋上から見た志津川湾

⑤　林野火災（火災 10）

<table>
<tr><td rowspan="5">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発 生 場 所</td><td colspan="5">南三陸町志津川字大沢地内</td></tr>
<tr><td>発生年月日</td><td colspan="5">平成 23 年3月 11 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>晴れ</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
<tr><td>災 害 概 要</td><td colspan="5">津波で流された瓦礫から出火し、林野に延焼したもの。
焼損面積　123a　杉林</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動状況</td><td>時 間 経 過</td><td colspan="5">覚知（3月 15 日）10:25　　鎮火 12:20</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出 動 車 両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>南三陸ポンプ 1</td><td>3</td><td>11:30</td><td>11:45</td><td>12:45</td><td>12:50</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="5">陸上自衛隊
南三陸町消防団</td></tr>
</table>

大沢地内の山林頂上付近に火炎が確認できたが、津波で流出した瓦礫により接近困難であり、現場の特定に時間を要した。火災現場付近に水利がなくホース延長も困難なことから、消防団員と徒歩にて入山し現場を確認、火叩きによる消火を行うも、消火困難のため陸上自衛隊に要請し空中消火を実施。その後、鎮火を確認して下山した。

3 月 11 日の津波襲来後に、瓦礫が燻っているのを付近民が確認しており、山林へ延焼したものと推測される。

津波で流出した瓦礫

7 南三陸消防署歌津出張所

職員数　16 名　　当日の体制　5 名
消防ポンプ自動車　1 台　　高規格救急車　1 台
多機能型広報車　　1 台
合計　　3 台

南三陸消防署歌津出張所は、地震発生後、庁舎1階事務室の書類棚から書類が床に散乱し、壁は剥がれ落ち、食堂の食器がすべて床に落ちて割れていた。2 階天井も剥がれ落ちていたが、幸い来客はなく職員の負傷もなかった。

歌津出張所庁舎被災状況

その直後、歌津管内にて地震による負傷者が発生したとの指令により救急隊が出動、残留の 2 名の隊員が地震津波用資器材を搬送車へ積載し、ポンプ車と現場対策本部及び付近住民の避難場所となっている伊里前小学校へ向かい、付近民の避難誘導を行った。

その後、駆け付けた非番員と共に避難誘導を行っていたが、津波が伊里前小学校まで到達したため、更に高台の歌津中学校へ避難誘導し体育館に南三陸町災害対策本部歌津現地本部を移設し活動した。

救急隊は気仙沼市立病院への搬送となり国道 45 号線を走行中、本吉地内にて津波に遭い国道が通行不能となったため、山道を通り約 1 時間 30 分掛けての搬送となった。その後の救急活動では、南三陸町の医療機関すべてが津波により被災し、津波により幹線道路は壊滅状態となったため、すべて町外の医療機関への長距離搬送となったため長時間の搬送を要することとなった。

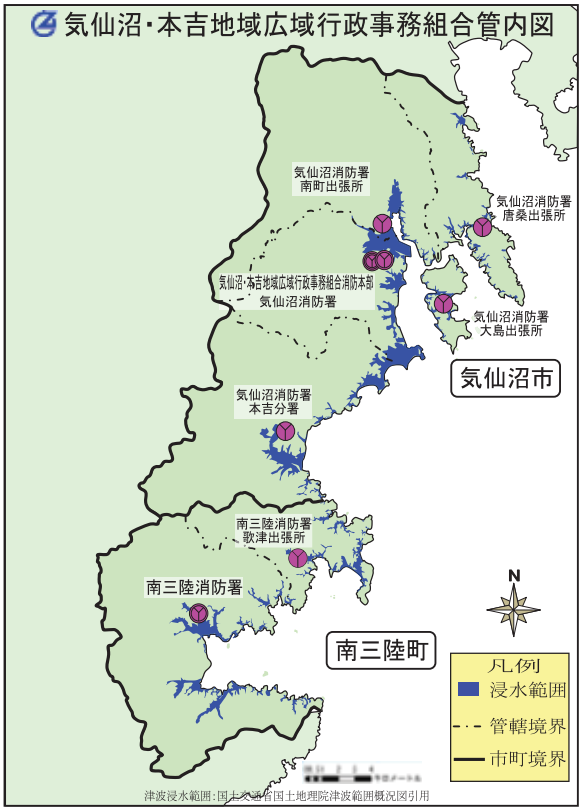
また、歌津地区に4施設あったガソリンスタンドが被災したため緊急車両への燃料確保に苦慮した。

住民と協力し救援物資を搬送

南三陸町立歌津中学校体育館内に移設した災害対策本部歌津現地本部

南三陸町歌津地区
活 動 状 況 図

（南三陸消防署歌津出張所管轄）



凡　例

浸水範囲

番号　活動事例番号

※　浸水範囲は大阪市立大学原口強氏の現地調査報告から引用。

この部分は

著作権の都合上、記載できません。

①　津波浸水区域の救急搬送

<table>
<tr><td rowspan="4">災害状況</td><td rowspan="3">発生場所等</td><td>発生場所</td><td colspan="5">南三陸町歌津字枡沢地内　一般住宅</td></tr>
<tr><td>発生日時</td><td colspan="5">平成23年3月11日　14:46頃</td></tr>
<tr><td rowspan="2">気　　象</td><td>天候</td><td>気温</td><td>湿度</td><td>風向</td><td>風速</td></tr>
<tr><td>曇り</td><td>3.1℃</td><td>59.8%</td><td>西北西</td><td>3.0m/s</td></tr>
<tr><td>災害概要</td><td colspan="6">3月11日14時46分発生の東北地方太平洋沖地震により、22歳女性（妊娠30週）が、自宅階段にて避難の際に転倒し、階段約1mの高さから転落した。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出動状況</td><td>時間経過</td><td colspan="6">覚知１４時５２分</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出動車両</td><td>車両名</td><td>人員</td><td>出動</td><td>現着</td><td>引揚</td><td>帰署</td></tr>
<tr><td>歌津救急１</td><td>３</td><td>14:52</td><td>14:59</td><td>17:15</td><td>17:45</td></tr>
<tr><td>関係機関等</td><td colspan="6">なし</td></tr>
</table>

直近医療機関（南三陸町管内）は産婦人科対応医療機関がなく、掛かり付け医療機関（気仙沼市内の産婦人科医院）は沿岸部の津波浸水区域内であり、内陸部の医療機関は地震により道路状況が不明であるうえ、各管内の救急対応に追われていると判断し、産婦人科及び脳外科対応の医療機関として気仙沼市立病院を選定した。

宮城県第3次地震被害想定調査に示されている津波浸水域を確認し、搬送経路の国道45号線は沿岸部ではあるが海抜が高い場所も多いことから、津波の状況を確認しながら北上し山間部の基幹農道を経由して気仙沼市立病院に至る経路を選択し救急搬送した。

以下、活動概要を記載する。

・現着（14時59分）傷病者は屋外に半座位、意識清明、バイタル安定、屋外まで自力歩行にて避難
・主訴：転落時腰部を打ったとのことで、腰痛あり、外傷なし、下肢の麻痺なし、腹痛、破水なし
・判断：腰痛のみ、腹痛・破水はなくトリアージ　→　緑
・車内収容時（15時04分）、間代性痙攣（約30秒間）あり、子癇発作等を疑ったが、意識回復後、既往歴にてんかんを聴取。

本吉町蔵内漁港通過時：海面に変化なし。

本吉町二十一浜通過時：海面に変化なし。

小泉大橋通過時：河口水位に変化なく、橋への被害なし。

本吉町大沢漁港通過時：橋桁約1m下まで水位の上昇を確認。

本吉町赤牛漁港通過時：国道約50㎝下まで水位を確認、海側で住宅数棟が流されていた。

本吉分署ポンプ隊と本吉町大森地内にて合流し、この先は津波により通行不可能との情報を得たことから、山道を大谷鉱山跡地方向に進入し、寺沢地内から基幹農道へ抜け、赤岩牧沢、赤岩長柴から九条地内の高台を経由して気仙沼市立病院へ向かった。病院正面登り口付近が津波により浸水していたため、通常は搬入しない病院南西側の通用口から患者を収容した。

歌津救急隊が通過した直後と思われる本吉町大沢地内。津波が橋桁下に迫っている。

間もなく道路は完全に水没、付近の家屋が流出している。

① 津波浸水域の救急搬送走行経路図

－凡例－

浸水範囲

数値 m(I・R) 津波高（遡上高=R・浸水深=I）

救急車走行経路

この部分は著作権の都合上、掲載できません。

②　孤立被災者の救助４

災害状況	発生場所等	発生場所	南三陸町歌津字町向地内　工場付近				
		発生日時	平成 23 年3月 12 日　14:00 頃				
		気　　象	天候	気温	湿度	風向	風速
			晴れ	6.7	62.2%	西北西	2.5m/s
	災害概要	南三陸町歌津字町向地内工場付近に１名の被災者が取り残されている。					
出動状況	時間経過						
	出動車両	車両名	人員	出動	現着	引揚	帰署
		なし	2	14:00	14:30	15:25	16:00
	関係機関等	南三陸町消防団　３名					

大津波警報継続中のため、伊里前小学校校庭に津波監視員及び情報伝達のために隊員を2名配置した。活動経路は高台を選択し現場へ向かい、途中消防団員 1 名に要救助者搬送用の軽トラックを借用してくるよう依頼した。要救助者 1 名は、町向地内の工場南側、山の斜面高さ 8mの位置に座位でいるのを確認した。要救助者の周囲は津波により流されたコンテナが斜面をふさぎ、ガラス片等が散乱している状態であった。意識は清明、呼吸正常、左下肢に数カ所の擦過傷があるが止血状態、表情に疲れが見えるが顔色は正常であった。介助により歩行可能であったが靴がなく裸足のため 1 名が背負い 3 名が補助し、交代しながら国道 45 号線路上まで搬送。その後借用した軽トラックの荷台に移し、別の救助事案で搬送された要救助者 2 名と共に避難所へ搬送した。

③　孤立被災者の救助５

災害状況	発生場所等	発生場所	南三陸町歌津字町向地内				
		発生年月日	平成 23 年3月 12 日　14:00 頃				
		気　　象	天候	気温	湿度	風向	風速
			晴れ	6.7	62.2%	西北西	2.5m/s
	災害概要	老夫婦（被災者）が取り残され助けを求めている。（駆け込みによる情報）					
出動状況	時間経過						
	出動車両	車両名	人員	出動	現着	引揚	帰署
		なし	3	14:00	14:30	15:25	16:00
	関係機関等	南三陸町消防団　５名					

大津波警報継続中の活動のため、伊里前小学校に津波監視員として 2 名の隊員を配置し、無線で活動隊員と交信する。現場への進入経路は高台を選定した。自力歩行困難者がいるとの情報によりスクープストレッチャーなどを持参し、消防団員 5 名に協力を要請した。

隊員 3 名と消防団員 5 名が徒歩で歌津中学校を出発し、高所のJR気仙沼線路上を進行、さらに国道 45 号線を通り現場へ進入した。要救助者 2 名は瓦礫上に座位でおり意識清明であった。

自力歩行困難者はスクープストレッチャーに固定し、隊員 2 名及び消防団員 4 名で搬送した。自力歩行可能者は隊員 1 名及び消防団員 1 名が介添えして移動した。国道 45 号線上まで搬送後、準備した軽トラックで避難所に搬送した。

第6章　消防応援活動の状況

1　緊急消防援助隊

(1) 受援の概要

東日本大震災においては、平成 23 年 3 月 11 日 15 時 40 分、平成 15 年の消防組織法改正による制度創設以来初めてとなる緊急消防援助隊の出動指示を消防庁長官が行った。

当消防本部管内には、9 都府県から 1,141 隊、4,317 名が派遣され、仙台市消防局も被災したため、札幌市消防局が指揮支援部隊長の任に当たり、派遣期間は 3 月 12 日から 4 月 28 日までの 48 日間という長期間に及ぶこととなった。

気仙沼市には、東京都隊、新潟県隊、山梨県隊、香川県隊、山形県隊が派遣され、東京消防庁が指揮支援隊長、南三陸町には京都府隊、鳥取県隊、兵庫県隊、秋田県隊が派遣され、京都市消防局が指揮支援隊長として緊急消防援助隊の活動管理を行った。

(2) 受入れ状況及び受け入れに関する調整活動状況

受援に関する規程には、進出拠点に応援部隊に災害状況及び活動概要等を説明できる職員の配置や、交通路の誘導案内を行う現場連絡員を配置すること等を定めていた。しかし、管内の被害が甚大であり、庁舎や人員も被災し多くの機能を失い全職員での災害対応に追われていたため、本来当消防本部が行わなければならない部隊誘導等を隣接消防本部の登米市消防本部が実施した。

被災規模が大きかった南三陸町は、庁舎や人員も被災し情報通信機器が不通状況の中、受援体制の構築は非常に困難であり、計画に定めていた野営可能場所が広範囲に被災、或いは避難場所となったため町内に指定することができなかった。このため、京都府隊及び鳥取県隊は隣接消防本部の登米市消防本部に適応場所を長期に依頼し、兵庫県隊は隣接市の石巻市に野営場所を調整し確保した。

南三陸町はライフラインが長期に寸断されていたため、町外の各野営場所では部隊の交代休息等が図られ、それぞれ 30 分から 1 時間で活動区域に移動することができて効果的であった。全国の緊急消防援助隊が帰任後は、秋田県隊が派遣され、消火、火災警戒、救急活動を行った。

派遣された各部隊は、強い余震が頻繁に発生し、広範囲に瓦礫が散乱するなど容易に活動のできない最悪の環境の中で懸命に消火、救助及び救急活動等に従事した。

(3) 各隊の活動状況

①東京都隊

3 月 11 日 20 時 50 分に 1 次派遣隊 14 隊 61 名が出発し、12 日 9 時 00 分に東京都指揮隊が気仙沼・本吉広域防災センター内の指揮本部に到着した。指揮本部と活動内容を調整し、市内で最も広範囲に激しく炎上していた鹿折街区火災を、到着した 3 隊で 9 時 20 分に火災防ぎょ活動を開始した。17 時 50 分に到着した 3 次派遣隊 63 隊 294 名が加わり 77 隊 355 名で火災防ぎょ活動を行った。13 日には到着した 2 次派遣隊が加わり 108 隊 484 名で活動を行い派遣期間中の最大規模での活動となった。火災防ぎょ活動は、鹿折街区火災の他に 3 件の火災防ぎょ活動を行い火災鎮火後は、24 時間体制で火災警戒活動を行った。

人命救助活動は 12 日に到着したハイパーレスキュー隊を主に津波により倒壊した建物や孤立した建物からの救助の他、航空隊ヘリコプターによる孤立建物からの救助を行った。翌 13 日には水難救助隊が到着し浸水域の救助活動を展開した。

野営場所を気仙沼市営総合運動場及び月立小学校とし、指揮支援本部を気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部に置いて当消防本部と連携した活動を実施した。活動内容は消火活動、人命救助、サーチアンドレスキュー（捜索救難）、救急、火災警戒、人員搬送等と多岐に渡った活動を実施した。火災発生が収束し救急支援に特化した派遣編成となり派遣部隊が縮小されてからは野営場所を気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部として、隊員間の情報の共有伝達が図られ、隊員同士の士気も高揚した。派遣後半は主に火災警戒、救急支援活動を実施し、4 月 23 日まで活動を行った。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.12～4.23	43	403	1,750

②新潟県隊

特殊装備部隊として石巻市に派遣されたが、東京消防庁の要請により海水利用型消防水利システムの送水車、ホース延長車、指揮車が派遣され 12 日 10 時 30 分から鹿折街区火災の火災防ぎょ活動を開始した。活動は遠距離ホース延長を行い東京消防庁消火隊へ大量送水を実施し、東京消防庁と連携した活動を実施し、14 日 10 時 00 分に活動を終了し、石巻市に転戦した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.12～3.14	3	3	8

③山梨県隊

11 日 19 時 25 分に進出拠点の茨城県庁に向けて集結場所を出発し、その後進出拠点が岩沼市に変更され、岩沼市での活動を実施後、14 日 7 時 00 分に指揮支援部隊長(札幌市消防局)からの転戦指示により、13 時 40 分に野営場所の本吉響高校に到着した。主な活動概要は、気仙沼市本吉町と気仙沼市御伊勢浜海岸付近の津波浸水区域内の捜索救助活動と、気仙沼消防署本吉分署に救急隊を待機させた救急需要の増加に対する救急支援活動を行い 4 月 3 日に帰任した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.14～4.3	21	148	523

④香川県隊

3 月 14 日 15 時 13 分に集結場所を出発し、15 日 22 時 00 分に指揮支援部隊長(札幌市消防局)から気仙沼市への進出拠点決定の連絡により、16 日 16 時 40 分に気仙沼・本吉広域防災センターに到着した。指揮支援隊長と活動調整を行い、津谷中学校を野

営場所として本吉町大谷地区沿岸部の捜索救助活動を行い、3 月 20 日に帰任した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.16～3.20	5	10	44

⑤山形県隊

東京都隊が帰任後の 4 月 22 日に気仙沼市に派遣され、気仙沼・本吉広域防災センターを活動拠点とした。市内全域の火災警戒活動、救急支援活動を行い、第 2 陣が 4 月 28 日に帰任し、気仙沼市の緊急消防援助隊の活動は終了した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
4.22～4.28	7	19	53

⑥京都府隊

3 月 11 日 19 時 35 分に指揮支援隊が出発し、12 日 8 時 32 分に消防庁から進出拠点は仙台市の指示を受けたが、14 時 10 分に指揮支援部隊長(札幌市消防局)から進出拠点は登米市中田総合体育館なかだアリーナ、派遣先は南三陸町の指示を受け、21 時 40 分に登米市消防本部の誘導でなかだアリーナに到着した。登米市消防本部からの情報提供を受け、なかだアリーナに京都府指揮本部を設置した。13 日 8 時 41 分に南三陸町災害対策本部に到着、活動内容を調整し南三陸町の人命検索救助活動を開始した。

増加する救急需要に対して、16 日 17 時 20 分から南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに救急隊 2 隊を常駐させ、翌 17 日には志津川小学校にも救急隊 1 隊を常駐させた。21 日からは、総合体育館ベイサイドアリーナに救急隊 3 隊を常駐させ、日中は消

防隊を待機させる体制とした。

災害発生の推移に併せ、4 月 2 日からは京都市消防局の単独での派遣体制とし、救急隊は、日中は総合体育館ベイサイドアリーナに 1 隊、歌津中学校に 1 隊を常駐させ、夜間はベイサイドアリーナに引き揚げる体制とした。派遣期間中、指揮支援隊の京都市消防局は、指揮支援本部を隣接市に設置したが、南三陸消防署の消防方面指揮所に職員を常駐させ、情報連絡体制を構築し、当消防本部と連携した活動を展開し、随時派遣部隊数を縮小しながら 4 月 13 日に帰任した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.13～4.13	32	277	897

⑦鳥取県隊

12 日 8 時 15 分に、消防庁の指示により出発し、13 日に消防庁の指示により宮城県北部に向けて進行し、23 時 30 分登米市津山町もくもくハウスに到着した。13 日駐車場において野営し 14 日 8 時 00 分から南三陸町戸倉地区で活動を開始した。活動内容は南三陸町戸倉地区での捜索救助活動、救急活動を実施し 3 月 20 日に帰任した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.14～3.20	7	28	116

⑧兵庫県隊

3 月 14 日 8 時 40 分に山元町で活動中の兵庫県隊に南三陸町への転戦指示があったが、11 時 20 分に宮城県庁への集合指示があり 13 時 30 分宮城県庁へ到着した。宮城県庁で指揮支援部隊長（札幌市消防局）から再度南三陸町への転戦指示があり、14 時 10 分に宮城県庁を出発、石巻市総合運動公園に到着し野営場所を確保した。兵庫県隊長

は、活動位置が掴めない先着していた京都府隊に接触するため、全国共通波で呼び掛けながら北進し、登米市消防本部の中継により京都府隊と合流した。同日の夜、京都市指揮支援隊、南三陸消防署と活動内容を調整し、南三陸町入谷ひころの里を前進場所として、歌津地区の捜索救助活動、救急活動を実施することとした。15 日歌津中学校に救急隊を常駐させ救急対応とし、歌津地区韮の浜の捜索救助活動を開始した。第 2 次派遣隊以降は、歌津中学校及びベイサイドアリーナに救急隊を常駐させ 24 時間の救急対応とし、南三陸町志津川地区及び歌津地区の捜索救助活動を実施した。3 月 21 日に亘理地区への転戦指示を受け石巻市総合運動公園から転戦した。兵庫県隊は南三陸町の行政組織が壊滅状態により、道路状況が把握できていなかったため、先遣隊が道路状況を調査しながら順次、部隊を現場投入した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.14～3.20	7	212	815

⑨秋田県隊

京都府隊が帰任後に 4 月 13 日に南三陸町に派遣され、登米市中田総合体育館なかだアリーナを活動拠点として、火災防ぎょ活動、火災警戒活動、救急活動を行った。救急隊は南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに 1 隊、歌津中学校に 1 隊を常駐させ 24 時間対応とした。4 月 18 日には南三陸町志津川地区で発生した林野火災に出動し当消防本部と連携した火災防ぎょ活動を実施した。一切の活動を終了し、4 月 28 日に帰任した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
4.13～4.28	16	41	111

⑩航空部隊

当消防本部管内へのヘリコプターの活動は、東京消防庁航空隊ヘリコプター「ひばり」が 12 日 6 時 20 分に気仙沼市上空の捜索調査を行い、8 時 48 分に仙台市霞目飛行場を離陸したヘリコプター「ひばり」が市内の建物から孤立者の救助を開始したのが最初である。ヘリコプターの活動は空中消火、救急、救助、捜索、調査、人員輸送、物資輸送等多岐に及び、出動回数は 125 回となった。

3 月 12 日から 5 月 17 日までに、14 県防災航空隊、1 都 4 市消防航空隊の応援を受けた。東日本大震災における消防防災ヘリコプターの活動状況は下記のとおりである。

［宮城県防災航空隊資料より］

	火災		救急		救助		捜索		その他		合計	
	件数	消火回数	件数	搬送人員	件数	搬送人員	件数	搬送人員	件数	搬送人員	件数	搬送人員
札幌市	0	0	2	8	0	0	0	0	6	19	8	27
青森県	0	0	1	4	2	2	2	0	0	0	5	6
山形県	1	11	1	4	0	0	0	0	0	0	2	15
仙台市	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	3	3
栃木県	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0	2	2
群馬県	0	0	1	3	3	5	0	0	2	1	6	9
新潟県	0	0	1	2	0	0	1	0	2	6	4	8
東京都	4	11	8	24	23	222	22	2	12	14	69	273
石川県	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	1	3
山梨県	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	2	1
長野県	0	0	2	6	0	0	1	0	0	0	3	6
愛知県	0	0	2	5	1	3	0	0	2	0	5	8
名古屋市	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6	2	6
三重県	1	0	0	0	0	0	0	0	2	10	3	10
鳥取県	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	1	4
岡山県	0	0	2	7	0	0	0	0	0	0	2	7
岡山市	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	3	1
広島県	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
山口県	0	0	2	7	1	0	0	0	0	0	3	7
合計	6	22	30	84	31	232	28	2	30	56	125	396

2 宮城県広域消防相互応援協定

宮城県広域消防相互応援協定により、平成23年3月11日22時30分、先行調査隊として登米市消防本部が当消防本部に来庁した。大崎ブロック内3消防本部の応援隊の活動区域を南三陸町とすることで調整し、3月11日23時00分、宮城県広域消防相互応援協定第2条の規定により、大崎ブロック幹事消防本部にブロック内応援要請を行った。応援要請を受け、3月12日登米市消防本部に大崎ブロック隊が集結して全体会議を開催した。大崎ブロック隊の3消防本部の応援隊は登米市消防本部に集結後南三陸町へ前進し、南三陸町に派遣された緊急消防援助隊京都府隊、鳥取県隊と連携した活動を展開した。大崎地域広域行政事務組合消防本部、登米市消防本部、栗原市消防本部から93隊、284名が派遣され、大崎ブロック消防本部隊合同で10名を救助し、47名の遺体を発見した。

南三陸町への応援要請とは別途で、気仙沼市で増大する救急需要に対応するため、大崎地域広域行政事務組合消防本部へ、3月13日6時40分気仙沼市への救急隊2隊を指定した応援要請を行った。

（1）大崎地域広域行政事務組合消防本部

応援要請を受け、ブロック内消防本部の活動調整及び県消防応援活動調整本部との連絡調整を行った。南三陸町への応援は登米市消防本部を集結場所として、消火隊1隊、後方支援隊1隊を3月19日まで派遣し人命検索救助活動を行った。気仙沼市への応援要請を受け、11時55分救急隊2隊が当消防本部へ到着した。当消防本部を活動拠点とし、毎日派遣された隊員が当消防本部で交代する1日交代制がとられ、24時間対応とした救急活動を行った。救急隊には、必ず当消防本部の職員1名を案内人として同乗させ、3月17日まで応援を行った。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.12～3.31	20	38	115

（2）登米市消防本部

3月11日20時23分、当消防本部へ先行調査隊1隊2名を派遣し、22時30分に到着した。活動内容について調整を行い、大崎ブロックの活動地域を南三陸町として調整した。また、12日0時13分に南三陸町へ先行調査隊、2時36分に消火隊を派遣し情報収集を行った。消火隊は南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに設置された災害対策本部に到着して活動調整を行った。消火隊、指揮隊、後方支援隊等を3月19日まで派遣し、人命検索活動を行った。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.11～3.19	9	22	70

（3）栗原市消防本部

3月12日1時20分、栗原市消防本部を出発し消火隊、後方支援隊を3月19日まで派遣し、3月18日からは救急隊1隊を3月31日まで派遣した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.12～3.31	20	33	99

3 岩手・宮城県際市町災害時相互応援協定に基づく受援の概要

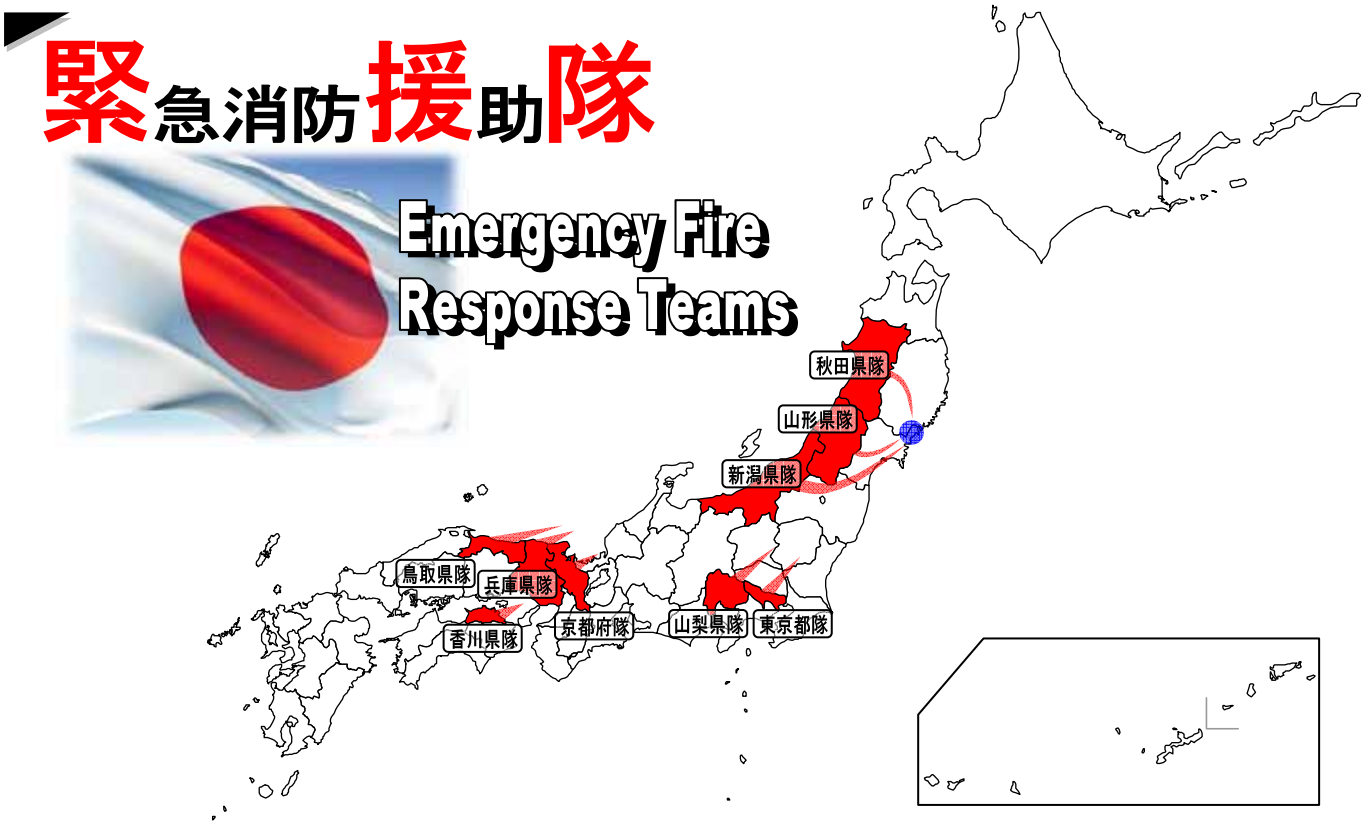
岩手・宮城県際市町災害時相互応援協定により、平成 23 年 3 月 12 日 1 時 40 分、 岩手県一関市消防本部に対し断水が続いていた気仙沼市内の給水活動を要請した。

また、3 月 17 日に、気仙沼市内の医療機関に入院中の傷病者を、圏域外の医療機関への同時多数の救急搬送が生じ、当消防本部の救急車や緊急消防援助隊の救急車で対応しきれなかったため、救急隊 3 隊を指定した応援要請を依頼した。更に、18 日には一関市消防本部管内の医療機関へのヘリコプターによる救急搬送の受け入れ支援を要請した。

一関市消防本部

3 月 12 日 0 時 25 分、先行調査隊 1 隊 2 名が当消防本部に到着し、活動内容の調整を行った。給水活動の要請を受け水槽車(10 トン)により、3 月 12 から 14 日まで延べ 14 箇所の避難所の受水槽へ、20 回、111 トンの給水活動を行った。3 月 17 日には、救急隊 3 隊を気仙沼市内の医療機関へ派遣し、一関市内の医療機関へ救急搬送を実施した。

派遣期間	延日数（日）	隊数（隊）	人員（名）
3.12～3.14	3	5	10
3.17～3.18	2	3	9



緊急消防援助隊応援消防本部名

東京都隊

東京消防庁

新潟県隊

新潟市消防局

山梨県隊

甲府地区広域行政事務組合消防本部　都留市消防本部
富士五湖広域行政事務組合富士五湖消防本部　大月市消防本部
峡北広域行政事務組合消防本部　東山梨行政事務組合東山梨消防本部　笛吹市消防本部
峡南広域行政組合消防本部　上野原市消防本部　南アルプス市消防本部

香川県隊

高松市消防局　坂出市消防本部　丸亀市消防本部　善通寺市消防本部
三観広域行政組合消防本部　仲多度南部消防組合消防本部　多度津町消防本部
小豆地区消防本部　大川広域消防本部

山形県隊

山形市消防本部　最上広域市町村圏事務組合消防本部　酒田地区広域行政組合消防本部
鶴岡市消防本部　米沢市消防本部　上山市消防本部　西置賜行政組合消防本部
西村山広域行政事務組合消防本部　村山市消防本部　東根市消防本部
尾花沢市消防本部

京都府隊

京都市消防局　舞鶴市消防本部　福知山市消防本部　宇治市消防本部　綾部市消防本部
京都中部広域消防組合消防本部　宮津与謝消防組合消防本部　乙訓消防組合消防本部
城陽市消防本部　八幡市消防本部　京田辺市消防本部　久御山町消防本部
相楽中部消防組合消防本部　精華町消防本部　京丹後市消防本部

鳥取県隊

鳥取県東部広域行政管理組合消防局　鳥取県西部広域行政管理組合消防局
鳥取中部ふるさと広域連合消防局

兵庫県隊

神戸市消防局　尼崎市消防局　姫路市消防局　西宮市消防局　明石市消防本部
伊丹市消防局　加古川市消防本部　淡路広域消防事務組合消防本部　芦屋市消防本部
高砂市消防本部　豊岡市消防本部　宝塚市消防本部　川西市消防本部　相生市消防本部
北はりま消防本部　赤穂市消防本部　三木市消防本部　小野市消防本部
三田市消防本部　たつの市消防本部　宍粟市消防本部　朝来市消防本部
佐用町消防本部　養父市消防本部　篠山市消防本部　丹波市消防本部
美方広域消防本部　猪名川町消防本部

秋田県隊

秋田市消防本部　大曲仙北広域市町村圏組合消防本部　横手市消防本部
由利本荘市消防本部　男鹿地区消防一部事務組合消防本部
能代山本広域市町村圏組合消防本部　湯沢雄勝広域市町村圏組合消防本部
大館市消防本部　鹿角広域行政組合消防本部　北秋田市消防本部
にかほ市消防本部　湖東地区消防本部

第2部　災害現場から(職員手記)

渋滞の中で

消防本部予防課　予防係長兼危険物係長兼調査係長兼地震津波安全対策担当　佐々木 敦

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、私は市内魚市場前の(株)気仙沼商会本社にいました。ここは気仙沼本吉地区危険物安全協会長の事務所で事務連絡のために訪れており、2 階事務室で女性職員と話をしている時に突然激しい揺れに襲われ、直ぐ「机の下に」と叫び、私は受付カウンターの下に体を伏せて「これが宮城県沖地震か」と思いながら地震の収まるのを待ちました。今まで体験したことのない長く激しい揺れが収まり、女性職員の無事を確認し、1 階に降りて他の職員に「津波が来るから避難してください。」と指示しました。

消防本部に戻るため車を走らせると、事務用品店の前に知り合いの従業員が不安な表情で立っていたので「早く、逃げろ」と叫びました。信号は停電で止まり渋滞が始まっていたので、曙橋から消防本部に戻るコースが最短だと判断し、魚市場前から中央公民館の脇を通り抜けようとした時、市役所職員に「こっちは渋滞で車が進まない。」と教えられたので、南駅前から大橋を通るコースに変更しました。しかし市内全域が渋滞のため全然前に進むことができず、苛立ちだけが募り、大橋手前のアンダーパスを通過している時に緊張感はピークに達し、ハンドルを握る手が汗ばみ「もし、ここで津波が来たら死ぬかもしれない。」と覚悟しました。15 時 20 分頃、何とか無事に大橋を通過した時にはこれで助かったと思いましたが、今度は中谷地交差点を直進するか左折するかで少し悩みました。どちらも渋滞しており、早く戻るために左折したかったのですが、津波に遭遇するおそれがあり、直進すると時間はかかりますが確実に帰れると判断し直進することを選び、田中から赤岩を通り 15 時 45 分頃に無事に帰ることができました。

私の執った避難行動では幾つかの過ちを犯しました。それは早く戻るために、最短コースを選んだことです。このコースは海岸沿いを通るため津波に襲われる危険がありましたが、宮城県沖地震の第 3 次地震被害想定調査結果では気仙沼湾入口に津波が到達するのに約 23 分の猶予があると認識していました。今回の地震ではそれよりも後に津波は到達しましたが、津波が時間通りに来るとは限りません。遠くの安全なところより近くの高台ということです。次に地震直後の渋滞を甘く見ていたことです。こんなに早く渋滞が始まるとは想像していませんでしたし、その渋滞に巻き込まれ冷静さを失ってしまい、無線等による情報を聞き逃して、自分の置かれている状況について正確に判断することが出来なくなっていました。

そして、最悪の場合は車を捨てる勇気があっても良かったのではないでしょうか、乗っていた車が公用車だったために捨てて逃げることをためらってしまいました。

しかし、嬉しいこともありました。事務用品店の従業員から「あの時、佐々木さんに逃げろと言われなかったら、私、多分逃げなかった。」と言われました。よく聞くと地震の後、他の従業員を避難させ、自分は留守番をするため店に残ろうと思っていたとのことで、私が叫んだ時の形相が鬼のようだったので、これはただ事ではないと思い避難したとのことです。

今回、車で避難することの難しさを体験しました。「避難する時は徒歩で」と指導している立場上、最後まで車で避難した私の行動が良かったのかどうか、そして高齢者等の人たちが徒歩で無事に避難できるのかという疑問が残りました。避難方法については、高齢者等の人たちのことを中心に検討されなければなりません。この経験を今後の防災指導に活かし、住民が津波の犠牲にならないように努めていきたいと思います。

仲間の死を一生背負って

消防本部警防課　警防係長兼救助係長　佐藤 宗一

3 月 11 日昼過ぎ、これまで経験したことのない、激しい揺れが長時間続き、「ついに、宮城県沖地震が来たか。」と思った。揺れが収まり、活動計画に基づき消防本部に設置された指揮本部で、情報収集を開始すると大津波警報が発表された。津波予想到達時間は 15 時 00 分、宮城県第 4 次地震被害想定調査中間報告よりもかなり早い時間である。「時間がない、浸水区域内にいる住民全員は急いで避難してくれ、避難が間に合ってくれ」と心の中で祈った。

各署所では、車両による避難広報に各方面に出動し、通信指令課員は防災行政無線で避難広報を繰り返し実施した。海面警戒隊から強い引潮の報告後に、管轄沿岸部の壊滅的な被害の報告が続いた。被害の様相を見ることができない指揮本部にいた私は、本当かと我が耳を疑い、「気仙沼は一体どうなったんだ」と思った。夕方になり、防災センターに市災害対策本部が移動設置され、災害対策本部と指揮本部での情報収集活動に従事した。その後も、大津波警報が継続中の中、各方面に展開した活動隊の「延焼拡大中」、「消防力が劣勢」等の悲痛な無線報告から、暗夜の建物が倒壊し瓦礫と化した現場で、懸命の救助活動や消火活動を実施している仲間の姿に断腸の思いであった。夜のはじめになり、指揮本部のある庁舎からも、一面に覆い尽くす火災の炎が見え驚愕した。「この火災を、今の我々の消防力だけで、消し止めることができるのか、どうやって消すんだ」と。

その日の夜遅く、登米市消防本部の先行調査隊が到着した。大崎ブロックの 3 消防本部の応援隊が、夜明けと同時に南三陸町で救助活動を開始する事を確認、そして緊急消防援助隊東京都隊が気仙沼市に向け出発し、明け方には当市に到着できるとの連絡があった。また、翌日未明、陸上自衛隊が到着し、夜明けと共に活動を開始することを確認した。「早く夜が明けろ、夜が明ければ応援隊と共に、本格的な救助消火活動を開始できる」と思った。そんな時、南三陸消防署が被災し、安否が確認されていない職員がいることを知った。その事実を聞いた瞬間、今、自分が夢の中にいるのか、現実なのか分からなくなった。その職員一人ひとりとの想い出が走馬灯のように駆け巡り、指揮本部の中で涙を必死に堪えた。気仙沼市の惨状と南三陸消防署の現状を知り、それまでは、津波浸水区域にいたであろう妻と二人の子供の無事を祈るように信じていたが、「家族が最悪の結果になっても、自分だけではない。その時はその時だ」と腹を括った。

翌 12 日の昼前に、東京消防庁 1 次派遣隊が気仙沼市に到着した。最終的な応援規模は約 100 隊、500 名で、人口 40 万都市の消防力に匹敵する勢力である。南三陸町には京都府隊が応援に入るとの連絡を受け、「これで気仙沼本吉は助かる」と、遠地からいち早く駆け付けてくれた応援隊の仲間に涙が出た。4 日目の夜遅く家族の安否が不明だった私に、安否確認のための一時帰宅が許された。自宅が被災していたことは既に知っていたので、妻の実家に向かうと玄関に、新聞広告紙の裏面に「家族は全員無事で、集会場に避難しています。」と妻の字で貼り紙があった。それを見た瞬間これまでの思いがこみ上げ感極まった。

宮城県沖地震に備え、津波災害に対処する図上訓練を繰り返し実施して来たが、10 名の同僚職員が殉職した。訓練を計画した警防課員として本当に無念で、悔しかった。これまで実施してきた訓練は何だったのか、いや訓練をしてなければもっと深刻になっていたのではと、自問自答を繰り返した。一番辛かったことは、これまで家族同然の付き合いをしてきた仲間の最後の別れに出席できなかったことだ。目の前の災害現場対応を離れ、火葬や葬儀に参列することは私にはどうしてもできなかった。亡くなった職員の方もきっと分かってくれるものと思った。そして、職務を全うし職に殉じた 10 名の仲間の死を一生背負って行きたいと思う。

通信指令員の震災回想

消防本部通信指令課　消防士長　及川 智彦

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分地震発生。突然の大きな揺れがあってから、長くそして大きさを増していく地震に恐怖を感じました。私は発災当日当直であり、これまで経験したことのない事態に庁舎ごと崩壊するのではと瞬間的に考えていたことを記憶しています。揺れている最中、緊急地震！と各局に無線を送信し、直ちに指令回線試験、各署所の状況収集に入りました。頭の中では遂に宮城県沖地震が来たかと覚悟を決め、慌てる気持ちを抑えるように冷静になれと自身に言い聞かせていました。

これまで訓練をしてきた想定を遙かに超える状況が、警戒に出た部隊から報告されてきます。それと同時に堰を切ったように 119 番通報が入電し、私に呆然としている暇はありませんでした。発災後から 19 時 10 分に指令台の故障で入電不可となるまで、実に 175 件の 119 番通報があり、私は指令台張り付けの状態で対応に当たりました。左主席、右主席、右補助席の 3 席で受信し、ほぼ繋がりっ放しの状態が続き、その間隙をぬって無線送信を行っている、正に多忙を極めた状況だったのを覚えています。

対応に追われ忙しさで考えないようにしていましたが、入電不可となり無線対応のみの状態になってから、改めて恐ろしさが襲ってきました。その時は現場を見ていないので、どこか非現実的で、状況を受け止め切れていませんでしたが、家族、親族、友人等の安否が心配で仕方ありませんでした。幸い、地震後間もなく家族は無事だと妻からメールを受けていたので、その知らせだけで不安を抑えていた状態でした。それは 5 日後に一時帰宅し、家族に会うまで続きました。

通信指令課としての仕事は、現場に出ない分、情報収集の中枢として気を抜ける時間がなく、精神的な疲労度はかなりのものです。まともに寝ない状態で何日も勤務が継続し、一週間くらいすると頭がぼーっとする。時間の感覚が麻痺するといったような状態になりました。不安、緊張、休息の不足により、精神状態はひどいものでした。

個人的には、今回の震災において未熟さを痛感しました。指令課機器の故障が相次ぎ、その代替措置及び対応について、先輩の指示で動きましたが、仮に先輩がいなかったら出来ていなかった。機器に対する理解度が不足していました。また、課内で意見のぶつかりあいもあり、疲労していた状態とはいえ、まだまだ知識的にも精神的にも未熟であったと思います。

私は現場で消火活動、救助活動に当たっていません。ですから、地獄絵図のような現場も目の当たりにしていませんし、夜を徹しての活動などの肉体的限界と言える現場も経験していません。ただ、11 日の 119 番通報において、津波襲来後の逃げ遅れた住民からの通報は今も脳裏に焼き付いています。「助けてください」と要請されているのに今そちらには向かえないと応えざるを得ず、「どうしたらいいですか」の問いに自分の身の安全を最優先にして待っていて下さいとしか言えなかった。なかには「逃げられないのに救助に来られないなんて、死ねっていうんですか」と取り乱した人もいました。このような極限の状況にあって、天災を恨み、人の力の無力感に打ちひしがれる、そんな思いでした。4 月になって、私は当日の通報内容をまとめる作業をしましたが、聞くたびに状況が鮮明に蘇って来て、辛い作業でした。その中で、私の対応は正しかったのか、指示は間違っていなかったかを考えると、今でも自問自答の日々です。

本音では、私も現場に出たかった。極限の状況であったし、夜に署にボロボロで引き揚げて来る活動隊の姿も見ているので、軽はずみに口にできることではないのは分かっています。しかし、人を直接救助する、荒れ狂う火に立ち向かう、これこそが消防人としての本懐です。足を引きずりながら次の現場に向かう活動隊に敬意を表しつつも、ある意味で羨ましさを感じていました。逆に、今になって住民の方達から感謝された時、自分は直接手を出せていない事実が後ろめたく感じることがあります。

消防人のジレンマという言葉があります。それは、災害の際にいの一番に現場対応に当たるのが我々の任務ですが、そのために一番いてほしい時に家族の側にいてあげられない。人を助ける

のが仕事でも、家族を守ってあげられないかも知れないというものです。発災当時勤務であった私は、非常に強く感じていました。妻からのメールがあったのは地震直後で、津波襲来後には連絡が取れずにいました。正直に言うと、5 日後まで一時帰宅を許されなかったのは私にとって一番のストレスであり、まだ生後 5 ヶ月だった息子を思うと胸が張り裂けそうな心情でした。私の家族は幸い被害がありませんでしたが、中には家族を失った職員もいます。このジレンマは職務の性質上切っても切れない関係にありますが、家族を失った職員にとってはとてつもない自責の念の源になるでしょう。そういった職員のケアについて、手厚い対応を切望します。

ただ、今回の災害で唯一、マイナスではなくプラスの感情を実感できたことがあります。それは【絆】です。東京消防庁から応援に来ていただいた隊員の中に、高校時代の同級生がいました。旧知の仲である分、話し易く、本音で語り合える存在でした。そこで聞いた、「他の応援隊のみんなが同じ思いで活動している。誰もが皆心から何かをしてあげたいと思っているし、直接応援できるのが嬉しいんだ。」という言葉に涙が出そうになりました。紛れもなくそれは消防人としての使命感であり、絆であると実感でき、本当に頼もしい思いでいたことを記憶しています。他の本部の同期からも、心の籠もった支援物資をいただいたり、励ましの言葉を受け取りました。普段表には出ないけれど、本当にありがたい、大きな絆で助けられている気がしました。また、プライベートでも、地元の被害はひどく、自宅付近の集会場が避難所として人が集まっており、助け合いの精神の下で自治的に避難生活が営まれていました。その姿こそ、地域コミュニティとしての絆であり、そこに力強さを感じました。また、自分も地域の一員でありたいとの思いから、非番の日はできるだけ手を貸すようにして絆の一助となれればと考え行動していました。

あれから 1 年が経ち、自衛隊や警察などの関係機関及び災害ボランティアの手によって、大量に積み重なった瓦礫は撤去され、仮設商店街等も建ち始め、一応の落ち着きは取り戻したように見えます。しかし、失ったものは大きく、それは今でも私達の心の中に影を落としています。ここから真に復興と呼べるようになるまでには遥かに長い年月が必要となるでしょう。その中にあって、私達は住民を守る力として、寄り添って支えることが求められています。これまで以上に、市役所等や医療機関、ボランティアも含め連携した体制を構築し、総合的な支援を行うことが重要であると考えます。

大切な家族、長年住み慣れた家、苦労して貯めた財産、そのどれか或いは全部、住民それぞれが失ったものは違います。この喪失感から立ち直るには強い意志が必要です。しかし、皆支え合って力を合わせて乗り越えようとしています。私はそれを支える力として共に歩んで行きたい。

東日本大震災活動手記

気仙沼消防署当直司令兼庶務係長　加藤 信宏

1　大浦地区での活動

3 月 13 日の朝を迎えました。

その日の活動は、瓦礫で孤立した大浦地区の集落より、体調を崩している地区民の避難所への搬送が任務です。唯一の進入路は、津波で押し寄せられた大量の瓦礫で行く手を阻まれており、徒歩での進行を余儀なくされました。

何時間もかけ大浦地区に到着すると、瓦礫の間に男性の遺体を発見しました。更に海岸線の堤防の間にも遺体がありました。高さ 10 メートルはあると思われる落石防止ネットの上にも遺体が打ち上げられていました。津波の凄まじさを、まざまざと見せ付けられた瞬間でした。我々は落胆した気持ちを抑えつつ、遺体を慎重に運び出し、後から来る捜索隊が直ぐに発見できる場所に移動させ、付近にあった布切れや、カーテンを掛けて無言のまま手を合わせ、さらに前へと進みました。

何分か海岸線を進んだ時のことです。そこで見たものは、37 年間の消防生活の中で、もっとも

凄惨で悲しい焼死体でした。それは、臨月を迎えた妊婦が、住宅の裏山に向かう土手に手を伸ばした格好でうつぶせになっている姿でした。「苦しかったろう、熱かったろう」大切な子供を守るため、業火から少しでも避けるためのうつぶせだったのかと思うと、涙が流れてきました。

ヘルメットを深々と被り他の隊員に涙を見せないようにしましたが、涙が頬を流れ落ちていきました。何故、このような弱者の命までも奪わなくてはならないのか、私は震災の酷さと、いつもは、防災の担い手などと言われている我々が何の手立てもできなかった不甲斐なさに自責の念を持たずにはいられませんでした。

付近を見回し一番立派で綺麗な布を皆で探し始めました。少したって誰かが花柄の綺麗な布を見つけてきました。泥で汚れていた顔を拭いてやり、隊員全員で丁寧に布を掛け、手を合わせました。今、私たちができる精一杯の供養でした。この震災さえなければ、新しい命が生まれ、家族は子供中心となり成長に併せた笑いや喜びがあったはずなのにと思うと胸が張り裂ける思いでした。

2 乗船、そして林野火災へ向かう

3 月 14 日の朝、我々の部隊は再度鹿折地区の海岸沿いを南下していました。歩き始めて 2 時間位過ぎた大浦地区に入ったときです。東側の山林が至る所で煙を上げているのが目に入ってきました。現場を確認するため、険しい山道に入り込み歩くこと 1 時間、そこで我々が目の当たりにしたのは、白煙の中で僅かな沢水を汲み集め必至に消火活動を行っている地域の人達でした。話を聞くと昨夜から不眠不休でバケツリレーを実施していたとのこと。しかしバケツリレーでの消火範囲は知れたもので消火する片っ端から燃え広がっていました。

指揮本部に状況を報告、ヘリコプターでの空中消火を要請しましたが、強風のためヘリからの消火活動は無理との回答でした。周りを見回しても有効となる消火資器材はなく、バケツと僅かな沢水では延焼を阻止するどころか、我々も煙炎に巻かれる可能性がありました。我々は何とかもう一度ヘリコプターによる空中消火ができないものか要請しましたが、やはり回答は同じでした。そこで我々は、地域住民に対して必ず隊を立て直して消火に来ることを確約して、瓦礫の上を引き返しました。

帰署したのは日も暮れた午後 6 時過ぎでした。直ちに作戦会議が行われました。津波の被災を免れた住宅が延焼の危機に曝されている。しかし、出動経路は津波により進入不能。そこで私達が決めた作戦は、海上保安署巡視船の協力を得て、消防隊を大浦漁港まで海上輸送し、大浦漁港から海水を利用して火災防ぎょにあたるというものでした。それは、夜間の林野火災対応と、津波による海面変動が続く中を船で移動するという、極めて危険を伴う任務でした。しかし、隊員たちは臆することなく、黙々と準備作業を始めました。消火用ホース 30 本と小型ポンプ 2 台、その他諸々の資機材の積み込みが完了したのは、午後 9 時過ぎでした。昼から食事も休憩もなく活動していた隊員達は、乾パン 2 枚と水を慌ただしく口に含み、午後 9 時 39 分、消防署から出動しました。

気仙沼署隊総勢 17 名が海上保安署の巡視艇に乗船、前代未聞の消防隊の海上輸送が開始されました。真っ暗闇の瓦礫の海をサーチライトの灯りを頼りに航行し、消防隊が大浦漁港に上陸したのは午後 10 時 34 分でした。上陸後の隊員は、今までの疲れをものともせずに貯め込んでいたパワーを一気呵成に打ち出すがごとく、10 分後にはホース 27 本を山林の中腹まで延張し放水を開始しました。

しかし物事というものは全てがうまくいくものではありませんでした。余震とそれに関係する津波の余波、更には大潮が重なって海岸に部署した小型ポンプに海水が襲い掛かって来たのです。機関員は、その度に下半身をずぶ濡れにしながら、ポンプを退避させました。3 月の深夜、骨まで凍り付くような厳寒の中での出来事です。退避する度に放水ができなくなり、消火した火災がまた火勢を盛り返すという状況が続きました。海面が安定し連続した消火作業ができるようになったのは、日付が変わった零時過ぎからでした。

ようやく周囲の火勢が治まった 15 日午前 2 時過ぎのことでした。隊員の一人が、気仙沼の南

駅方向に火の手が上がっているように見える、と言ったのです。それと前後して、ただならぬ無線交信の内容が入ってきたのです。内ノ脇地区全域で火災が発生し北側に向かって爆発を伴って炎上中との交信内容でした。直ちに東側の山腹に移動して、市街地方向を見ると、炎は真っ赤に夜空を染めて不気味な爆発音を発しながら、黒煙は空高く上がっているのが確認できました。17 名の隊員が大浦の林野火災に出動しているので待機の職員は 30 名足らず、しかも皆、疲労困憊しているはず。一刻も早い転戦が必要とされました。

使用した資器材を巡視船に積み込むと、小雪の降る中を内湾目指して真っ暗闇の海上を突き進みました。隊員は皆、濡れた防火衣から身体に浸み込む寒さにじっと耐え、下を向き誰一人として口を開くものはいませんでした。

午前 3 時 59 分帰署。前代未聞の船に乗っての大浦地区の林野火災は、約 6 時間による消火活動と、105 ㌶の山林を焼失して終了したのです。火災の概要を報告し外に目をやると、隊員達は内ノ脇地区の火災に向け出動準備を整えているところでした。あの寒さの中じっと耐えて活動し、暖を取る暇さえもなくまた次の現場へ向かうその姿勢、何ものにも屈しないそして諦めないという消防魂を目の当たりにしました。

それから間もなく出動指令が出され、消防車はサイレンを響かせながら紅蓮の炎が燃え上がる次の現場へ向かっていきました。

震災との戦い　― 1 人の被災者として ―

気仙沼消防署　消防士長　畠山 光

私の自宅は、入り江に小さな集落を形成している地区にあり、庭に小船をつけられるほど海の近くだった。その日は非番で、当直の疲れから昼寝をした。14 時 40 分に起き、茶の間で母と会話をしたその時だった。

急に家が倒壊するのではという縦揺れを感じ、思わず母を外に突き飛ばし、庭に四つ這いになった。間もなく強い横揺れが始まり、自宅にひびが入り、隣の家は地面に沈んでいった。「とうとう宮城県沖地震が来た」と思った。

揺れが収まると、自宅前の湾の水が引いており、声の限り「津波が来るぞ!!全員逃げろよ!!」と叫んだ。消防署へは海岸道路を通るため、参集を諦め避難することにした。母に「荷物を持って逃げるぞ!!」と話し、2 階へ駆け上り避難リュックを背負った。「次ここに来るとき、家はもうないな」と思い、数秒部屋の中を眺めた。すぐに「津波にみんなくれてやれ」と思い直し、母と避難を開始した。

数名が避難を始めていた。私は足の不自由なお年寄りをおぶったり、家のこたつに座っていた老人を外に出したり、高台を何往復かした。家のリヤカーに高齢者を乗せて、健康な避難者に頼んだ。「もっともっと高台へあがれ!!」と怒鳴りながら避難させた。ぎりぎりまで行動し、最後に自転車で逃げた。途中、家に戻ろうとする車や人に立ちはだかり、水門を閉めようと戻ってきた消防団員も止めた。「とにかく命が優先だ」と思った。

避難所に指定されている浦島小学校の登校坂にさしかかると、気仙沼商港の海面が徐々に上がっていた。津波が防潮堤を越えると一気に海水がなだれ込み、屋外タンクが次々と倒されていった。何とか生きたなと思ったが、今津波が妻と二男、三男を襲っていると思うと、不安で押しつぶされそうになった。

学校に到着し、祖母と長男に会った。妻や、南気仙沼幼児園にいた二男・三男も、無事避難できたと知って涙を流した。消防本部指令課には参集できない事と浦島小学校の状況をメールした。夕方、雪が降り寒さが襲ってきた。

17 時過ぎに 7 名で、一時避難所に取り残されたお年寄り 2 人の救出に向かった。1 人を担架に乗せたところ、目の前の海で急に爆発が起こり、大きなきのこ雲が現れ、黒煙が急速に拡大していった。私達は危険を感じ、私がもう 1 人を背負い、死ぬ気で避難所へ走った。風下だった避難所は

すぐに黒煙に取り囲まれ、轟音と爆発音と火の粉にさらされた。私は子供たちに防炎の毛布をかぶせ、校庭の真ん中でじっとさせた。強い風が巻き起こり、黒煙で呼吸ができず 2m先も見えなかった。「これは死んだな」と思った。誰かに状況を伝えておこうと119番通報し、「煙と火と熱風にとり囲まれている。厳しいかもしれないが、頑張ってみる」と伝えたのが精いっぱいだった。

黒煙に囲まれながらバケツなどで 6 時間消火活動し、幸いにも火に囲まれることはなかった。事前に積もった雪が飛び火を防いだのかもしれないと皆で話した。携帯のテレビで気仙沼市が炎上している映像が流れた。「津波で助かったのに今度は火災か」と何とも言えない怒りや、悲しみが込み上げてきた。高齢者と子供を最近耐震補強した 1 階の 2 教室で休ませることにした。寒さで子供たちは震え、満足に睡眠をとれないでいた。

その夜は徹夜で林野火災の消火にあたった。高台から気仙沼湾を見ると、海に浮かんでいるがれきが燃えていて、津波で行ったり来たりを繰り返していた。まさに地獄絵図だった。対岸では絶えずサイレンが鳴り響き、「同僚は大丈夫だろうかと」いう心配と、何もできない無力な自分に涙が出て悔しく思った。

日の出前にミーティングを行った。夜明けとともに偵察機が飛ぶはずなので、校庭に「200 人・水食料なし・毛布不足」と石灰で書いた。沢水で備蓄米を炊き少し食べることができた。夜が明けると、生存者 2 名が梶ヶ浦漁港にたどり着いた。片浜で津波にのまれ、船に乗り込み、燃えている湾の中を一晩中漂っていたと話し、体は冷たく、けがも深く、ほかの地区の状況も厳しいことが容易に分かった。

家が見渡せる高台に行った。集落は壊滅していて、自宅があった場所は何もなかった。

梶ヶ浦の火災が落ち着き避難所の体制ができてきたので、私は鹿折街区まで山越えをし、消防署へ参集することを決めた。皆を置いていくのは心配だったが、職務を理解して送り出してくれ、貴重なおにぎりを持たせてくれた。

10 時に小学校を出発。道なき道を山越えした。対岸でヘリによる救助が行なわれていて、救助の手が届いているのを希望に感じた。口の渇きは沢水をわずかに含んで凌いだ。大浦まで 2 時間かかった。大浦も壊滅状態だった。寄った沢、寄った沢で情報収集をしながら鹿折へ向かった。水などを恵んでもらうたびに、ありがたく思い涙が出てきた。食事をしていない人におにぎりを分けたりした。5 時間かけて鹿折に出ることができたが、変わり果てていた。

鹿折大橋に出ると多くの緊急消防援助隊の車列があり、被災者として非常に頼もしく感じた。後に同僚に聞いたが、私の顔は煤だらけで、直視できないような酷い顔だったそうだ。

私は無事消防隊と合流し、参集途上で得た情報を災害対策本部へ伝えた。24 時間後に消防署への参集を果たした私は、そのまま現場活動を志願した。ここから、私の消防士としての震災との戦いが始まった。

あの日職場に向かう最中

気仙沼消防署　消防士　小野寺 勇介

3 月 11 日の地震発生時、私は非番で本吉町図書館にいた。異様に長く強い揺れであったものの、館内は上段の本が数冊落下する程度で負傷者等も出ず、私はすぐに自宅に向かった。走行中は建物等に大きな被害がないのを確認しつつ、10 分ほどで帰宅。家族と付近民の無事を確認し、活動服へ着替え 8 キロ離れた気仙沼署へ向かった。

20 分程走行し、気仙沼署1キロ手前、松崎中瀬地内にある坂道を高台から低地へ下り切った時「津波だー！」という男性の叫び声が聞こえた。海側を見ると、高さ約 4～5 メートルのどす黒い瓦礫の山がすごい勢いで向かって来るのが見えた。すぐ車をバックギアにし、坂道を約 20 メートル戻った時、車両前方から若い男性と年配の女性が走って坂道に避難して来るのが見えた。しかし、その 2 名を追いかけて来るかの様に津波も押し寄せ、間もなく瓦礫の山に飲み込まれてしまった。今に

も瓦礫に飲み込まれそうな状況下で、離されない様に女性の手を強く握りしめた男性の姿は一生忘れることが出来ない。なおも迫ってくる津波から逃げ続ける私の車の後方には坂道を駆け上がる避難民もおり、思うようにスピードが出せず、瓦礫を含んだ津波が直ぐ目の前まで迫っていた。坂を約 60 メートル登った地点で津波はその勢いを失った。アクセルを弛めると同時に周囲を確認しようとしたその瞬間、車両右方向から轟音と共に津波が襲来してきた。再び坂を登り始めたその途中、車両左前方の民家から 1 人のお婆さんが出て来るのを確認した。約 130 メートル登った坂の頂上に車を止め、坂を下り見渡すと民家の庭先に水面から顔を出し仰向けになっている 80 代位のお婆さんの姿を確認した。また波が押し寄せる可能性も考え周囲に気を配りながら駆け寄り、放心状態のお婆さんに「大丈夫ですか？」と呼びかけるとお婆さんは小さく頷いた。水深は 50 センチ程度と深くはなかったが、厚着をしていたお婆さんの体は海水に浸り重く、自力では立ち上がれない状態であったため、負傷していないことを確認し、お婆さんを背負い高台の安全な場所まで連れて行った。お婆さんの事を避難していた付近民にお願いし、一安心した私は高台から周囲の被害状況を確認したが、片浜・尾崎地区が津波で覆われている光景には身の毛がよだった。

その後、私は車を反転させ気仙沼署へ向かい、15 分程で到着。事務室に入ると、そこには駆け付けた先輩方が集まっていた。いつも見ている先輩方の顔を見た瞬間、安心感で体の力が抜けていったのを覚えている。

しかし、安心したのも束の間、すぐさま災害対応に追われることとなった。あの夜、気仙沼署の2階から見た真っ赤に染まる気仙沼湾は、忘れられない光景の一つだ。

震災直後、私は救急活動と消火活動の両方を行っていた。救急活動では搬送者のほとんどが低体温症、在宅酸素療法の患者、人工透析の患者であった。もちろん、外傷を負った方々も搬送したが、想像していたよりは少なかった。よく考えると、これも生か死かをはっきり分ける津波被害の恐ろしさだったのかもしれない。

東日本大震災手記

気仙沼消防署　消防士　村上　一成

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分、私は消防学校の初任総合教育救急課程における実技訓練中であった。激しい揺れが収まり、教官の指示の下に全生徒がグラウンドに避難した。幸いにも誰一人怪我をした者はいなかった。教官方はラジオで情報収集し、それをホワイトボードに書いていった。気仙沼の津波の予想される高さを目にしたときは愕然とした。校舎、寮は倒壊の恐れがあったため、部屋の代表者が部屋員の携帯電話や毛布を取りに行った。家族に電話しても一向に繋がらなかった。携帯電話でテレビを視聴していたが、どの映像も目を覆いたくなるような状況であった。

2 時間ほど経過して、教官に集められた。内容は家に連絡がつき、帰宅できる状態の者は帰宅してよいというものであり、3 分の 1 ほどが帰宅した。残った者は、卒業式に備え周囲が紅白幕で飾られた屋内訓練場に布団を敷いて一夜を明かすこととなった。発電機と救助工作車の照明を利用し、屋内訓練場内を照らした。中にテレビを 1 台設置し、みんな釘付けになっていた。各地の悲惨な情報が次々と流れていたが、気仙沼、南三陸の情報はなかなか流れなかった。被害が少なかったからではないかと思うようにしていた。そうでも思わなければ心が保てなかった。屋内訓練場も倒壊の恐れがあったため、少しの揺れや緊急地震速報が流れると、直ちに屋外に出なければならず、何度もそれを繰り返した。その日は学校に備え付けられていた非常食を食べ、22 時に消灯となった。しかし、寝付けずに家族、友人、職場の先輩など、それまで関わったことがある人達のことを考え、経験したことのない不安感に襲われていた。

翌日、徐々に気仙沼、南三陸の情報が流れるようになり、被害の大きさを知った。それでも、私はただテレビに釘付けになっているか、外で他の学生と話をするかで唯々無力であった。各地のあ

まりの被害の大きさに、次第にテレビやラジオを視聴したくなくなっていった。現実を受け入れたくなかったのかもしれない。その日も帰れる学生は帰ることになり、夕方には 15 名ほどだけになっていた。だが、気持ちが沈むことだけではなかった。残った学生で、避難所になっている近くの小学校に支援に行くことになったのだ。それによって、微力だがやっと人のために何かをすることができたと思った。また、その間は支援のことだけを考えることができ、不安や心配を少しは感じずに済んだ。加えて、夜に間接的だが家族全員の無事を知ることができた。

翌々日、教官の自家用車で気仙沼に帰れることとなった。しかし、道の状況やガソリンの状況から、実際に気仙沼に辿り着けないと分かった時点で消防学校に戻ってくるという条件付きであった。しかし何とか気仙沼に辿り着くことができた。新月パーキングで休憩したのだが、ヘリコプターが何機も飛び交っている状況を見て、現実のものとはなかなか思えなかった。新月周辺は特に被害が見られなかったが、実家のある鹿折方面のことを考えると、大火災に見舞われていると知っていただけに、鹿折トンネルを抜けたくないように感じていた。トンネルを抜けて眼前に広がる光景は、数え切れないほどの消防車両であった。その光景に見とれていたが、すぐに鹿折の惨状を目の当たりにすることとなった。幼い頃から見慣れた風景とはかけ離れすぎていた。なんとか実家には辿り着き、家族全員に再会でき無事を確認できた。それからやっと消防の仕事を考えることができた。実家には当分帰れないこと、消防署では先輩方は着替えることも無く活動していることを考え、持てるだけの着替えを持って気仙沼消防署に向かった。

気仙沼消防署には災害対策本部が設置されており、関係機関の車両の往来が激しかった。そのため、新人の私は同期とともに車両誘導係を命じられた。緊急車両の出動に支障を来さぬよう、事故が起きないよう注意しながら次々と入ってくる車両を誘導しなければならなかった。現場から戻った先輩方の表情は疲れ果て、現場の壮絶さ、過酷さが顔を見ただけで伝わってきた。私たちは多くの車両の誘導に四苦八苦しながら、その日は 23 時過ぎまで誘導を続けた。予想とは裏腹に、私たちはそれから毎日決まった時間に出勤し、決まった時間に帰宅することとなった。先輩方に対する申し訳ない気持ちと、現場に行けない悔しさがあった。

3 月末まで車両誘導を続けた。結局、現場には一度も行けなかった。しかし、私の仕事内容を知らない親戚や友人からは「絶対死ぬなよ」と何度も言われた。「あと一年早く配属されていれば」と、何度も思った。これは一生思い続けることだと思う。車両誘導という仕事にはやりがいは感じていた。車両誘導する者がいなかったら、出動に支障をきたしていたということで、先輩方から感謝されていたからである。先輩が車両誘導係になることで、現場に人が足りなくなることを考えたら、私がその係で良かったのだと感じる。それでも本音はやはり現場に行きたかった。なぜなら消防吏員を志したのも、父親が消防団だったころに、地域のために昼夜問わずに火災現場に駆けつけていたのを見ていたからであり、現場への憧れがあったからだ。

未曾有の大震災の中、地域、住民の方々のために私ができたことは何もなかったと思う。しかし、現場に行けなかった悔しさ、先輩方から学んだ使命感を胸に刻み、今後訓練や勉強に励んで、必ず地域、住民の方々に還元していく。

瓦礫と化した堤防の上を行く

気仙沼消防署唐桑出張所　消防士　小山　大介

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、宮城県沖を震源とした震度 7 の大地震が発生した。私は、あの時の恐怖を一生忘れることはないだろう。

その一瞬は携帯電話の緊急地震速報から始まった。「キュィッキュィッキュィ」次の瞬間、地鳴りとともに体が激しく揺さぶられた。しばらくは夢ではないだろうかと思っていたが、その間も揺れは収まらなかった。家が大きく揺れ、車が飛び跳ね、初めて現実の地震であることを認識したのと同時に遂に、想定されていた宮城県沖地震が起きたと確信した。

一緒にいた家族や、近所で働く祖母の安否が分かり、冷静さを取り戻した私は、火災の発生を予防するためにガスの元栓を閉め、電気のブレーカーを下げた。祖母が営む商店でも同様の処置を行った。店内は割れた酒類の強烈なアルコール臭が充満し、嗅ぐだけでも酩酊するのではないかと思うほどであった。

近隣の人たちはどうなったのだろうか、と思った私は、駆け足と大声で安否を確認したが幸いにもけが人や倒壊家屋などもないことが確認できた。

その後、車に乗り込み職場がある唐桑半島に向かった。各地に設置された防災行政無線からは大津波警報を知らせる広報が流れていた。出張所にもう少しで到着するという時に土手の下から津波に襲われ、高台への避難を余儀なくされた。その高台には付近の住民や水産加工場の従業員が津波から逃れてきていた。漁船を沖に避難させにいった父親の安否を気遣いながら泣いていた少女の顔が今でも忘れられない。

主要道路が瓦礫により寸断されていたので、高台から出張所に続く山道を住民の案内で進み、やっとのことで職場に辿り着いたのは18時過ぎのことだった。この日を含めて2日間に渡り、燃えながら漂着する瓦礫の警戒を行った。

発災から3日目の朝、半島内西舞根地区にて孤立している住民がいるとの救助要請を受け搬送車にて出動した。普段であれば車で10分程の地区なのだが、数百メートル進んだ地点で瓦礫に進行を妨げられ、徒歩での進行を余儀なくされた。道路上にうずたかく堆積した瓦礫は、徒歩での進行も阻み、山肌の獣道を大きく迂回させられた個所もあった。

やっとのことで舞根地区へ入ると、避難民が孤立している高台はちょうど入り江を挟んだ対岸に位置していた。地面には津波によって破壊された堤防と思われるコンクリートの塊や海底にあったと思われるヘドロが堆積しており独特な異臭が鼻についた。水深が分からない水たまりが点在し、我々は極力、水のない場所を選定し津波による潮位変化の合間を縫って前進した。住民が避難していた高台の家には40名以上の地域住民がいた。その中でも特に持病の薬が無くなった者や家族と離ればなれになった高齢者を優先に救助を行うこととした。しかし、体力が消耗した避難民では、山肌の急傾斜地を移動するのは困難である。背負って搬送するにしても、消防隊の人数を考えると現実的ではなかった。すると、津波を避けるために一晩、沖に出ていた漁船が幸運にも帰ってきたという。所有者の協力を得て、孤立住民を避難所まで海上搬送することになった。この手段により、多くの住民を少ない人員で迅速に避難させることが出来た。この救助事案は消防隊だけでなく消防団員、住民の協力が無ければ遂行することは困難だった。

今回の震災から、現場で活動するためには、災害規模に関係なくリスクを常に意識して対応しなければならないと思った。そこには冷静沈着な判断力・的確な行動力・迅速な決断力が求められるものであり、一方では不安感と恐怖感によるストレスとの戦いでもあると感じた。災害の態様は、一定ではなく状況により変化していくものであることから、五感で感じてリスクを読み取らなければならないものである。これからも基本行動を軸としてあらゆる災害に対応できる考える力を養い、目の前で助けを求める人を一人でも多く救っていきたい。

唯一得たものを

気仙沼消防署大島出張所
所長補佐兼庶務係長兼警防係長兼調査係長兼
救急係長兼救助係長兼地震津波安全対策担当
佐藤　健一

前々日にも震度 4 の地震があり、津波注意報が発表された。若干の引き潮は確認できたが、押し寄せる波は無かった。

あの日も前々日と同様に大島出張所の当直責任者として勤務していた私は、非常に激しく長い

長い揺れが収まった後、ポンプ車に乗り込み同じ場所で海面監視を開始した。監視場所は、後に火災に襲われた大島の象徴ともいえる亀山に上る県道上で、太平洋に面する田中浜を見下ろせ、その田中浜の沖合約 100 メートル付近には海面監視の際に目安となる消波ブロックが積まれており、監視に適した場所として事前に設定していた。

監視を開始して間もなく、潮が引き始めた。前々日のそれとは明らかに違う。沖の消波ブロックが瞬く間に姿を現していく。予想され、私たちも訓練を重ね対策を練ってきた「宮城県沖地震」に伴う大津波の襲来を確信したのはこの時だった。避難広報活動をしながら監視場所に移動する間、地震による大きな建物被害は見られず、また、助けを求める声も情報も無く、いずれ確実に発生するのであれば、「これが本当に予想された宮城県沖地震であって欲しい。そして津波も予想を下回るものであって欲しい。」と思った。あれほどまでに巨大な津波に襲われることや亀山に林野火災が発生することなど、考えもせずに。

津波襲来後、無線により次々と管内の状況が本部に報告される。気仙沼署隊からは、私の母校である階上中学校に凄まじい勢いで避難者が集まってきていること。そして、その避難者の悲惨な状況。複数の監視隊からは、それぞれに津波の高さや浸水域。予想をはるかに超えている。本部が繰り返し南三陸署を呼び出すが応答がない。まさに最悪の状況だ。そんな状況下でも大島では救急以外の出動要請は無く、また、積極的に浸水域に入り検索などの活動を行うという判断も出来ず、当初は避難所を巡り情報を集めることに力を入れることとし、余震がある度に避難所を巡回した。

津波は気仙沼で発生した火災から、火の着いた漂流物を大島に運び林野火災を引き起こした。この火災の消火活動は、12 日の深夜から断続的に 6 日間続き、15 日までは亀山で朝を迎えた。疲労と睡魔との闘いでもあったが、若い職員が、消防団員が、そして地元の建設業者の方が頑張っているなかで、自分が先に音を上げるわけにはいかなかった。気力などというものではない。自分に気力が不足しているのは、自分が一番よく知っている。周りが頑張っているから自分も頑張れたのだと思う。建設業者は、ミキサー車で防火水槽にどんどん水を運んでくれ、この作業は、私たちの消火活動が中断している間も続けられた。また、消防団員の中にはあの寒さの中で立ったまま眠っている伝令員や機関員もおり、明らかに体力の限界を超えていたが、「亀山を燃やすのか！」という分団長の檄に刺激され、不平を口にする団員は一人もいなかった。

14 日、火災が拡大し住宅地に迫ってきたこともあり、気仙沼の各分団から急きょ招集された応援隊約 40 名が大島に派遣された。その応援隊の顔ぶれを見た時、なぜこの団員達がと我が目を疑った。私の住む階上地区も大きな被害を受けていることは、大島から肉眼で見ただけでも間違いない。その階上地区を管轄する分団から 10 名が派遣され、その中には明らかに自宅を失っているであろう顔見知りの団員が数名含まれていたからだ。自らが被災したにもかかわらず、家族を避難所に残して大島に渡り、手を挙げ進んできつい任務を引き受けてくれた地元の団員のことを思うと、とても誇らしく、今でも目頭が熱くなる。

待ちに待った空中消火が 15 日に行われ、その効果は著しく、堆積した落ち葉の中に潜む残り火による再燃も危惧されたが、17 日には所長が鎮火を宣言した。

消火活動にあたり、安全管理と効率ばかりを優先しホースを延長し易い道路を防火帯とし迎え撃ちたい私たちと、点在する火点を探して果敢に消火したい団員との間に意識の格差が感じられたが、初期の段階で私たちがもう少し積極的に火点に向かっていれば、あれ程長期化することは無かったのではと悔やまれてならない。

18 日の午後、妻からメールが届いた。二人の息子たちも元気だという。気が付いた時には既に電話が通じない状況で、お互い連絡が取れないでいた。三日目か四日目あたりから、徐々に電波の状況は回復し始めていたが、妻は停電により携帯電話の充電がままならず、不安を抱えながら息子たちの世話をしてくれていた。本当に感謝している。その夜、電話が繋がり天を仰ぎながら息子たちの声を聞いた。何を話したかは覚えていない。と、言うより、大したことは話せなかったはずだ。今思い起こすと、火災が終息してからの夜は、皆、少しの時間を見つけては電波を探して庁舎の周りをウロウロしていたように思える。それまで、誰も口に出せずにいたそれぞれの家族の話が聞

かれるようになってきた。しかし、ここで忘れてはならないのは、永遠に大切な家族と連絡が取れなくなってしまった職員がいること、そして、なにより 10 名もの職員が無念にも殉職してしまったことだ。

東日本大震災は、本当に多くのものを奪い去った。掛け替えのない大切な人たち、慣れ親しんだ街並み、住み慣れた家、子供たちが遊ぶグラウンドや公園、数え出したらきりがない。しかし、たった一つだけ震災が残したものがある。それは、津波から命を守るには逃げるしかないという教訓だ。私たちは、大きな大きな犠牲の代償として得たこの教訓を、全ての人に発信し、後世に伝えていかなければならない。

雪の中の活動記録

南三陸消防署　消防士長　遠藤 君男

その時私は町内の店舗にいました。始めに小さな揺れを感じ「地震だな」と思う間もなく強い揺れになり、急いで店外に出て駐車場に避難したものの、揺れはおさまらず建物も車も左右に大きく揺れながら「ギシギシ」と音が鳴っていました。私は、遂に宮城県沖地震が来たと確信し、揺れが収まらない最中に車を発進させました。町中では車は止まり信号機も止まっていました。

一旦自宅に戻り、必ず津波が来ると感じていた私は、長丁場になると思い余震が続くなか部屋に入り、ありったけの着替えをバックに詰め込みました。その頃、大津波警報が発表され、町の防災無線で 6mの津波が予想されると放送しサイレンが鳴り響いていました。地震の大きさから道路状況を考え小さい車に乗り換えました。山道を通り署に向かい、途中消防署の裏の高台になっている旭が丘団地を走行中、団地へ上がってくる多くの避難住民とすれ違いました。

南三陸署に到着するとすでに車両は警戒に出向しており、2 階に上がると事務室には誰もいなく、書類や机の上のものが床に散乱しており、通信室には非番員が数名いました。停電はしていたものの発電機によりテレビや水門監視装置は正常に観ることができ、テレビで釜石市河口で高さはないものの、津波が押し寄せてくる映像をその場にいた全員で観ていました。誰と言うこともなく「間違いなく来るな」と話をしました。それからまもなく、水門監視モニターを観ていたところ、9 分割になっている画面の遠くの地域の映像がブラックアウトし、次々と画面が消えていきました。やはり、これまで経験したことのない大きな津波が来ると、私をはじめ誰もが感じたと思います。そして、八幡川水門の映像を観ていたところ、閉まった水門の上から水が入り込んできたのを確認できました。私は署に残っている車両を高台に上げるよう指示され、切迫感からか自然と編み上げを履き、ヘルメットを被り完全装備で移動を始めました。

車を高台の旭ヶ丘団地に上げ、次の車を上げるため坂を走り下り始めたところで津波が来て戻れず、消防署方面が見える所まで移動し確認したところ、すでに消防署の 2 階が半分まで浸水していました。そこから見た景色は、津波と言うよりも北上川でも見ているような感じでした。想像を遙かに超えた津波だったので、その場から高台に避難した人達をさらに山の方へと避難誘導し、私の他に 3 名が高台に上がったものの、離れてしまい連絡を取る手段もなく会うことは出来ませんでした。

その後、夕方になり雪が積もるなか、数名の住民に声をかけられ、山ひとつ越えた高校に避難住民が多数おり、毛布などを運びたいとのことでした。そこで、毛布などを貸してもらい、歩く道のわからないなか他の人達を誘導しながら山を越えました。高校に着いた時には、多くの避難住民が体育館の中で寒さに耐えながら居ました。その後、高校生や若い人達で旭が丘から炊き出しした食料や衣類を搬送し、その後は、物資を運べるような通行可能な道を探したりしました。

夜が明けてみる光景は、さらにその被害の大きさを感じさせられ、地元の消防団に昨夜確認した道路の状況を伝え、重機を使用し国道に抜ける道を作るよう依頼しました。旭ヶ丘のセンターに行

くと、昨日別れた二人と署長に合流でき、それからは妊婦やけが人を住民と協力し応急担架を作成し山を越え高校まで搬送、自衛隊ヘリへの引き継ぎを繰り返した。

高校では、高校生に手伝ってもらい瓦礫の中から薪を拾ってきたり、旭が丘から食料を運んだり、その際にも時々津波襲来の情報が入り、拡声器を使い下で活動している人達や、国道を歩いている人達に避難を呼びかけた。こうした活動を3日間続け、4日目には、方面指揮所のあるベイサイドアリーナに行き指示を仰ごうと、徒歩で各避難所に廻りながら避難人員と必要な物資などを情報収集しながら向かいました。方面指揮所に到着すると、久々に見る消防車と仲間達の顔がありホッとしました。それからは署隊として活動しましたが、これほどの大規模の災害では個人はもちろんのこと、一消防本部の力ではどうすることも出来ず、緊急消防援助隊の多くの車両と人員に心強さを感じました。

今回、このような大災害に見舞われ、我々職員を始め多くの住民の尊い命と財産が奪われました。「想定外」とはいえ、今まで指導してきた避難所や高台が被災したことは事実として受け止め、今後の防災指導に活かさなければならないと思います。

負い目

南三陸消防署　消防士長　長山 隆一

のちに未曾有と言われる大震災、大津波が南三陸町を丸ごと飲み込んだ翌日、志津川中学校がある高台から町を眺めて愕然としたことを昨日のように思いだす。

永遠にも続くように感じた地震発生直後、車両を車庫外に出し、住民への警戒広報の準備をして水槽車に乗り込み消防署を出発した。当日通信勤務員だった後輩の『気をつけて！』を背中で受けながら。これが後輩の最後の言葉になるなどと思いもせずに。

南三陸消防署では、通信勤務員だった後輩を含む、消防副署長以下9名が殉職した。そのうち2名はいまだ発見されていない。

そんなことになるとは夢にも思わず、全隊員がそれぞれに、これから起こりえる災害に向けて全力で立ち向かわなければと奮い立っていたし、限られた人員、資器材の中で、どれだけの町民を救えるのかと、武者震いさえ感じていた気がする。

予想をはるかに超えた津波による、甚大な被害が発生していたにもかかわらず、情報が遮断され、孤立した我々は、目の前の災害事案を一つずつ自己完結させていくことで精一杯だった。初日は新井田地区で発生した火災とその火災現場付近からの津波被災者の救助活動。十分とはいえない人員と資器材で、頼れるのは気力だけだった。そんな疲労困憊の最中、消防署庁舎が津波に遭い、活動していた同僚が行方不明だと知らされた。

兄貴の様に慕う上司達、弟のように可愛がっていた後輩。一人一人の顔が頭に思い浮かぶ。救助のいろはを時に厳しく、時には優しく教えてくれた副署長もその一人だった。『現場は生きている。マニュアル通りの現場は無いのだから、臨機応変に対応できるようにしなければならない。そのためには、基本をしっかりたたき込め。』飲むと決まって檄を飛ばしてくれた副署長の言葉が今も私の消防人生を支えている。

2日目は、高野会館に取り残された従業員と付近から避難してきた住民、入谷地区の老人クラブ計530名の救助活動にあたった。先遣隊として情報収集のために林道から徒歩で雪山を越えて志津川中学校に到着し、津波の余波が押し寄せる瓦礫の山を少しずつ乗り越えて到着した高野会館。

4階建ての4階部分まで襲った津波から命からがら逃げ出した530名は、接触時、屋上部分とそのエレベーター脇にある20畳ほどの倉庫スペースに身を寄せ合っていた。私たちが到着したときの老人達の安堵の顔が忘れられない。一昼夜かかった救助活動は、緊急援助隊と自衛隊の協力もあり全員無事に救出する事が出来た。この事案は、今後の私の活動に大きく影響していくと思

う。

震災 3 日目、救出を終えて活動拠点になっているベイサイドアリーナに戻ったのは、上司の遺体が発見され、ビニールシートに包み運ばれてきた頃だった。娘が同年で同じバレーボール部のキャプテンということで、可愛がってもらっていた上司の遺体にすがり、すすり泣く家族にかける言葉がみつからず、ただ手を合わせることしか出来ない自分がいた。なぜ参集職員が、災害活動の拠点となるべき消防署で活動中に死ななければならなかったのか、なぜ・・・そんな空虚な思いが胸を覆い尽くす。一刻も早く、未だ行方不明の同僚を捜索したかったが、目の前の災害に対応することで精一杯だった。

今思うとこの 3 日間が私にとっての 3・11 だった。4 日目には、災害派遣で南三陸町に入った京都府遣隊の隊長から、災害対策本部と活動部隊の無線中継を我々の隊に依頼され、火災対応以外はベイサイドに貼り付けを余儀なくされ、車両待機になったからだ。もっと活動したい、捜索したいという気持ちはあるのに捜索も救助活動も行うことが出来ず、ただ 1 日中車両で過ごす日々は本当に苦痛だった。無線中継という活動を回りからは理解してもらえず、我々を見て、『ただ座って居るならなぜ捜索に行かない。』と詰め寄られたことも一度や二度ではなく、自己嫌悪に追い打ちをかけた。

捜索も救出活動もすることが出来ず、発見され運ばれた 7 名の同僚をただベイサイドアリーナで迎えることしかできなかった私は、震災後 1 年を迎えようとしている現在も遺族の方に対してどう接していいのかわからない。

火葬や通夜に葬儀、可能な時は参列したが、どの遺族も、口をそろえて『命を大事にしてくださいね。』『私達みたいな思いは家族にさせてはだめですよ。』と言う。遺族の無念さは痛いほどわかる。しかし、自分がまた同じような場面に遭遇してもやはり組織の一員として命令に忠実に動くと思う。なぜなら、我々は、自身の危険を顧みずに住民の生命と財産を守るという一本の筋を持って活動しているからだ。

妻や子供も、同僚の遺族と同じように、『危険な目に遭うくらいなら逃げて帰ってきて。』と震災当初から心配し、言い続けている。それでも自分は消防官である以上最後まで職務を全うするつもりだ。

だからこそ、災害時に活動の基本となる活動計画は、隊員の絶対的な安全を確保したものでなければならない。

それが志半ばで職務に殉じた同僚達への弔いになるものと信じているし、それが成し得たとき、捜索や救助活動をすることが出来なかった自身の負い目も軽減されるのではと思っている。

決して未曾有、想定外などという言葉には逃げてはいけないと感じている。

発 行 年 月　平成 24 年 9 月
編集・発行　気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部
〒988-0104　宮城県気仙沼市赤岩五駄鱈 43-2

印刷・製本　小宮山印刷工業株式会社
〒988-0392　宮城県気仙沼市本吉町猪の鼻 169-7

この冊子は　植物油インキ及び
再生紙を使用しています